宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第５３集

ZOH　ZA　MURA

藏座村遺跡

国営農業水利事業尾鈴銀座２号ファームポンド建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２年

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第53集
「藏座村遺跡」正誤表

訂正箇所	誤	正
例言－3	平成11年3月21日	平成12年3月21日
例言－8	磁北(磁針方位は西偏約5.5°)ある。	磁北(磁針方位は西偏約5.5°)である。
目次1p－119	第3図　座村遺跡各調査面範囲(1/1,500)	第3図　藏座村遺跡各調査面範囲(1/1,500)
目次1p－122	第6図　査第1面 遺構・遺物検出状況図(1/80)	第6図　調査第1面 遺構・遺物検出状況図(1/80)
p2－123	認された中ノ迫A遺跡(第1図－17・	認された中ノ迫A遺跡(第1図－17)・
p6－19	黒褐色土(HUE 7.5YR 2/1。	黒褐色土(HUE 7.5YR 2/1)。
p12		SI6とSI7の図面が逆
p17－12	38～40は,	37～39は,
p17－12	38・39は,	37・38は,
p17－13	41は,	39は,
p17－16	野岳・休場型タイプ	野岳・休場タイプ
p17－17	船野型タイプ	船野タイプ
p26－12	大型土坑1基・土坑群	大型土壙1基・土壙群
p29－土層註記	⑫黒色土…別の遺構(SC68)の埋土である。	⑫黒色土…別の遺構(SC82)の埋土である。
報告書抄録－調査期間	1999.10.18～3. 21	1999.10.18～2000.3. 21

ZOH　ZA　MURA

藏座村遺跡

国営農業水利事業尾鈴銀座２号ファームポンド建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２年

宮崎県埋蔵文化財センター

藏座村遺跡遠景

序

宮崎県教育委員会では，国営農業水利事業尾鈴銀座２号ファームポンド建設工事に伴い，藏座村遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では，旧石器時代から近現代にかけての遺構・遺物が検出されました。特に，旧石器時代～縄文時代早期の土器・石器類や弥生時代中期～後期の竪穴住居跡・土器群は，当時他地域との交流があったことを連想できるものであり，当地の歴史を考える上で重要な資料となりました。

本書が学術資料としてだけでなく，学校教育や生涯学習の場で活用され，埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお，調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ，ご指導・ご助言をいただいた先生方，ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成14年２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　矢　野　　剛

例　　言

1．本報告書は,国営農業水利事業尾鈴銀座２号ファームポンド建設工事に伴い宮崎県教育委員会が行った蔵座村遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，宮崎県教育委員会が主体となり，宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は平成11年10月18日から平成11年３月21日まで行った。

4．現地での実測・写真撮影等の記録は主に甲斐貴充，松永幸寿が行い，空中写真撮影は業者に委託した。

5．整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレースは甲斐貴充が整理補助員の協力を得て行い，一部松本茂（37～43）と重留康宏（47～68）が実測を行った。

6．本書で使用した第１図「蔵座村遺跡の位置と周辺遺跡図」は国土地理院発行の５万分の１図「妻」「高鍋」「都農」「尾鈴山」を基に作成した。

7．土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

8．本書で使用した方位は，主として座標北（座標第Ⅱ系）を使用している。その他「M.N」と記載しているものは磁北（磁針方位は西偏約5.5°）ある。レベルは海抜絶対高である。

9．本書使用した遺構略号は以下のとおりである。

　　ＳＡ…竪穴住居跡　　ＳＣ…土壙　　ＳＩ…集石遺構

10．本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記しているが，主なものについては一部例外を除いて以下のように統一している。

　　集石遺構…１／30　　竪穴住居跡…１／60　　土壙…１／60・１／80

　　縄文土器…１／３　　敲石・磨石・凹石…１／２　台石…１／４

　　それ以外の石器…３／５　　弥生土器…１／４

11．本書の執筆及び編集は甲斐貴充が行った。

12．出土遺物・その他諸記録は，宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の組織……1
第Ⅱ章　調査の概要……2～6
　第１節　遺跡の位置と環境……2
　第２節　調査の経過……5
　第３節　基本層序……6
第Ⅲ章　調査の記録……7～37
　第１節　調査第１面（旧石器～縄文時代早期）の調査……7～25
　第２節　調査第２面（弥生時代～近代）の調査……26～37
第Ⅳ章　自然科学分析……38～45
　第１節　藏座村遺跡の土層とテフラ……38～42
　第２節　藏座村遺跡におけるリン・カルシウム分析……43～45
第Ⅴ章　まとめ……46～49

挿　図　目　次

第１図　藏座村遺跡位置と周辺遺跡図（１／50,000）……3
第２図　藏座村遺跡周辺地形図（１／2,000）……4
第３図　座村遺跡各調査面範囲（１／1,500）……5
第４図　藏座村遺跡グリッド点配置図（１／1,000）……6
第５図　藏座村遺跡第Ⅶ層上面地形図（１／500）……7
第６図　査第１面 遺構・遺物検出状況図（１／80）……9～10
第７図　集石遺構①（１／30）……11
第８図　集石遺構②（１／30）及び出土遺物（３／５）……12
第９図　縄文時代早期土器①（１／３）……14
第10図　縄文時代早期土器②（１／３）……15
第11図　旧石器時代～縄文時代早期石器①（３／５）……16
第12図　旧石器時代～縄文時代早期石器②（３／５）……18
第13図　旧石器時代～縄文時代早期石器③（３／５）……19
第14図　旧石器時代～縄文時代早期石器④（３／５）……21
第15図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑤（３／５）……22
第16図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑥（１／２）……23
第17図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑦（１／２）……24

第18図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑧（１／２・１／４）……25
第19図　藏座村遺跡第Ⅳ層上面地形図（１／500）……27
第20図　調査第２面 遺構検出状況図（１／250）……28
第21図　１号竪穴住居跡（ＳＡ１）（１／60）……29
第22図　２号竪穴住居跡（ＳＡ２）（１／60）及び竪穴住居跡出土弥生土器（１／４）……30
第23図　大型土壙(SC１)跡（１／60）及び出土土器（１／３）……31
第24図　土壙群検出状況（SC23～26・SC30～31・SC71）（１／80）……32
第25図　土壙群出土遺物（１／１）……32
第26図　弥生時代土器①（１／４）……35
第27図　弥生時代土器②（１／４）……36
第28図　弥生時代土器③（１／４）……37
第29図　弥生時代石器（３／５）……37

表　目　次

第１表　集石遺構計測表……12
第２表～第６表　出土土器観察表……50～54
第７表～第８表　出土石器・その他の遺物観察表……55～56

図　版　目　次

図版１　①藏座村遺跡遠景……57
図版２　①調査区全景（第Ⅶ層上面検出時）／②Ａ区西側第Ⅶ層上面検出状況……58
図版３　①Ａ区西側第Ⅶ層上面検出状況／②ＳＩ１検出状況（北東側から）／……59
③ＳＩ２検出状況（北東側から）／④ＳＩ２検出状況（南側から）／
⑤ＳＩ５検出状況（上側から）／⑥ＳＩ８検出状況（東側から）
図版４　①調査区全景（第Ⅳ層上面検出時）／②調査区全景（東側から）／……60
③土層堆積状況（Ｂ区南面）
図版５　①Ａ区全景（第Ⅳ層上面検出時）／②１号竪穴住居跡（ＳＡ１）／……61
③１号竪穴住居跡（ＳＡ１）（上から）／
④１号竪穴住居跡（ＳＡ１）（東側から）
図版６　①土壙群と１号竪穴住居跡／②25号土壙（ＳＣ51）土層断面／……62
③27号土壙（ＳＣ27）／④26号土壙（ＳＣ26）／
⑤土壙群（ＳＣ31・30・26・25・24・23）／⑥１号大型土壙（ＳＣ１）
図版７　①出土縄文土器（第１類）／②出土縄文土器（第２類）／……63
③出土縄文土器（第３類）／④出土縄文土器（第４ａ・４ｂ類）／
⑤出土縄文土器（第４ｃ・４ｄ類）／⑥出土縄文土器（第５類）

図版８　①出土縄文土器（第６類）／②出土縄文土器（第７類①）……64
③出土縄文土器（第７類②・第８類）／④出土石器（ナイフ形石器）／
⑤出土石器（細石核・細石刃・剥片）／⑥出土石器（剥片）
図版９　①出土石器（石鏃①）／②出土石器（石鏃②）／……65
③出土石器（尖頭状石器・抉入状石器・石匙）／④出土石器（石核）／
⑤出土石器（両面加工石器）／⑥出土石器（削器）
図版10　①出土石器（蛤状剥片石器Ⅰ類）／……66
②出土石器（蛤状剥片石器Ⅱ類）／③出土石器（蛤状剥片石器Ⅲ類）／
④出土石器（蛤状剥片石器Ⅳ類）／⑤出土石器（蛤状剥片石器Ⅴ類）／
⑥出土石器（二次加工のある剥片）
図版11　①出土石器（磨石）／②出土石器（敲石①）／……67
③出土石器（敲石②・凹石）／④ＳＡ１・ＳＣ１出土土器／
⑤ＳＡ２出土弥生土器／⑥土壙群出土煙管
図版12　①出土弥生土器（第１類①）／②出土弥生土器（第１類②）／……68
③出土弥生土器（第１類③）／④出土弥生土器（第１類④）／
⑤出土弥生土器（第２類①）／⑥出土弥生土器（第２類②）
図版13　①出土弥生土器（第２類③）／②出土弥生土器（第２類④）……69
③出土弥生土器（第３類）／④出土弥生土器（第４ａ類・第４ｂ類）
⑤出土弥生土器（第４ｃ類・第４ｄ類・第５ａ類）／
⑥出土弥生土器（第５ｂ類）
図版14　①出土弥生土器（第６類ａ・第６類ｂ）／……70
②出土弥生土器（第６ｃ類）
③出土弥生土器（第６ｃ類・第６ｄ類・第10類①）／
④出土弥生土器（第７類・第８類①・第９類）／
⑤出土弥生土器（第８類②）／⑥出土弥生土器（第10類②）／
⑦出土弥生石器（磨製石鏃・石庖丁）

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

農林水産省九州農政局宮崎農業水利事務所が児湯郡川南町大字川南字藏座村に尾鈴銀座２号ファームポンド建設を計画した。そこで，平成７年度に事業紹介があり，県文化課と協議を開始した。

建設予定地は，周知の埋蔵文化財包蔵地ではあったが，確認のために平成９年11月に県文化課が試掘調査を行い，あらためて遺跡が確認された。この結果を受けて，平成９年度～平成11年度に県文化課と九州農政局宮崎農業水利事務所尾鈴農業水利事業建設所は事業の進捗に合わせて協議を継続的に行った。平成11年７月には，事業の本格化に伴い埋蔵文化財センターが確認調査を実施し，ほぼ工事予定区域全域からアカホヤ上下２枚の文化層が確認された。

平成11年10月１日付で「埋蔵文化財発掘調査負担契約書」を締結し，埋蔵文化財センターが平成11年10月18日から平成12年３月21日まで発掘調査を実施した。

第２節　調査の組織

（平成11年度）　発掘調査

調査主体　　宮崎県教育委員会

教　育　長	笹山　竹義
教 育 次 長	新垣　隆正
	岩切　正憲
文 化 課 長	仲田　俊彦
同　課長補佐	矢野　　剛
主幹兼庶務係長	井上　文弘
埋蔵文化財係長	北郷　泰道
同係 調整担当	重山　郁子

（平成12・13年度）　整理・報告書作成

教　育　長	岩切　正憲（平成13年度）
教 育 次 長	福永　孝義
	川口　靖文
	岩切　正憲（平成12年度）
文 化 課 長	黒岩　正博
同　課長補佐	井上　　貴
主幹兼庶務係長	長谷川勝海
埋蔵文化財係長	石川　悦雄
同係　調整担当	松林　豊樹

宮崎県埋蔵文化財センター

所　　長	田中　　守
副　所　長	江口　京子
庶 務 係 長	児玉　和昭
調査第二係長	青山　尚友
同　主　査	谷口　武範（調整担当）
同　主　事	甲斐　貴充（調査担当）
同　調査員	松永　幸寿（調査担当）

所　　長	矢野　　剛
副所長兼総務課長	菊地　茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総　務　係　長	亀井　維子
調査第二課調査第三係長	菅付　和樹
調査第二課調査第四係長	永友　良典
同課　調査第三係主任主事	甲斐　貴充

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の位置と環境（第１図・第２図）

藏座村遺跡（第１図―１・第２図）は，児湯郡川南町大字川南字藏座村に位置する。遺跡の位置する川南町は，日向灘に面した宮崎県中部にあり，上面木山（1,040ｍ）から派生する山地及び丘陵面とその東麓から海岸にかけて広がる段丘面から成る。段丘面は，一連の平坦面ではなく，崖によって区別され，青鹿面・茶臼原面・国光原面・唐瀬原面・川南原面などの計14面から構成される。本遺跡は，川南町市街地から北西へ約３㎞，14面のうち１面の唐瀬原面との境目付近の標高約145ｍの丘陵辺縁部東斜面上に位置する。遺跡の周辺は，発掘調査例は少ないが，旧石器時代から歴史時代にかけて多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代遺跡の調査例は後牟田遺跡（第１図―２）や霧島遺跡（第１図―３）と少ないが，大野寅男氏の踏査や川南町の分布調査によって，白鬚遺跡（第１図―４）・旭ヶ丘遺跡（第１図―５）・番野地Ｃ遺跡（第１図―６）・椎原遺跡（第１図―７）・大久保遺跡（第１図―８）・谷ノ口遺跡（第１図―９）・住吉Ｂ遺跡（第１図―10）・卒手遺跡（第１図―11）という数多くの旧石器時代の遺跡が確認されている。旧石器時代遺跡は，主に山地及び丘陵地に集中するようである。

縄文時代遺跡は，調査例が後牟田遺跡・霧島遺跡・上ノ原遺跡（第１図―12）と少ないが，川南町の分布調査によって60カ所の遺跡が確認されている。特に押型文土器を伴う早期の遺跡が顕著であり，旭ヶ丘遺跡・住吉Ｂ遺跡・丸山西原遺跡（第１図―13）・松ヶ迫遺跡（第１図―14）・大久保遺跡などで確認されている。縄文時代遺跡は，旧石器時代同様，主に山地及び丘陵地に集中するようである。

弥生時代，川南の台地上や丘陵地縁辺上において，特に中期から後終末期にかけて遺跡が急激に増加する。弥生時代遺跡は，中期が本遺跡同様丘陵地縁辺部，後終末期が台地上や丘陵地縁辺部に集中して立地するようである。中期の調査例はないが，後終末期は円形と方形の各１基の周溝墓が確認された東平下遺跡（第１図―15）・竪穴住居跡２軒が確認された把言田遺跡（第１図―16）・竪穴住居跡１軒が確認された中ノ迫Ａ遺跡（第１図―17・竪穴住居跡６軒が確認された上ノ原遺跡・竪穴住居跡２軒と周溝状遺構が確認された野稲尾遺跡（第１図―18）の調査例がある。さらに，調査こそされていないが，多くの弥生時代の遺跡が数多く確認されている。こうした数多くの集落群跡や墳墓群といった遺跡の存在は，後の古墳時代に台地上で展開する川南古墳群（第１図―19）などに続くような，大規模な社会集団の存在を想定できる。

【引用参考文献】

川南町1983「第一章 川南の歴史的環境と古代遺跡」『川南町史』

川南町教育委員会1983『川南町の埋蔵文化財』遺跡詳細分布調査報告書

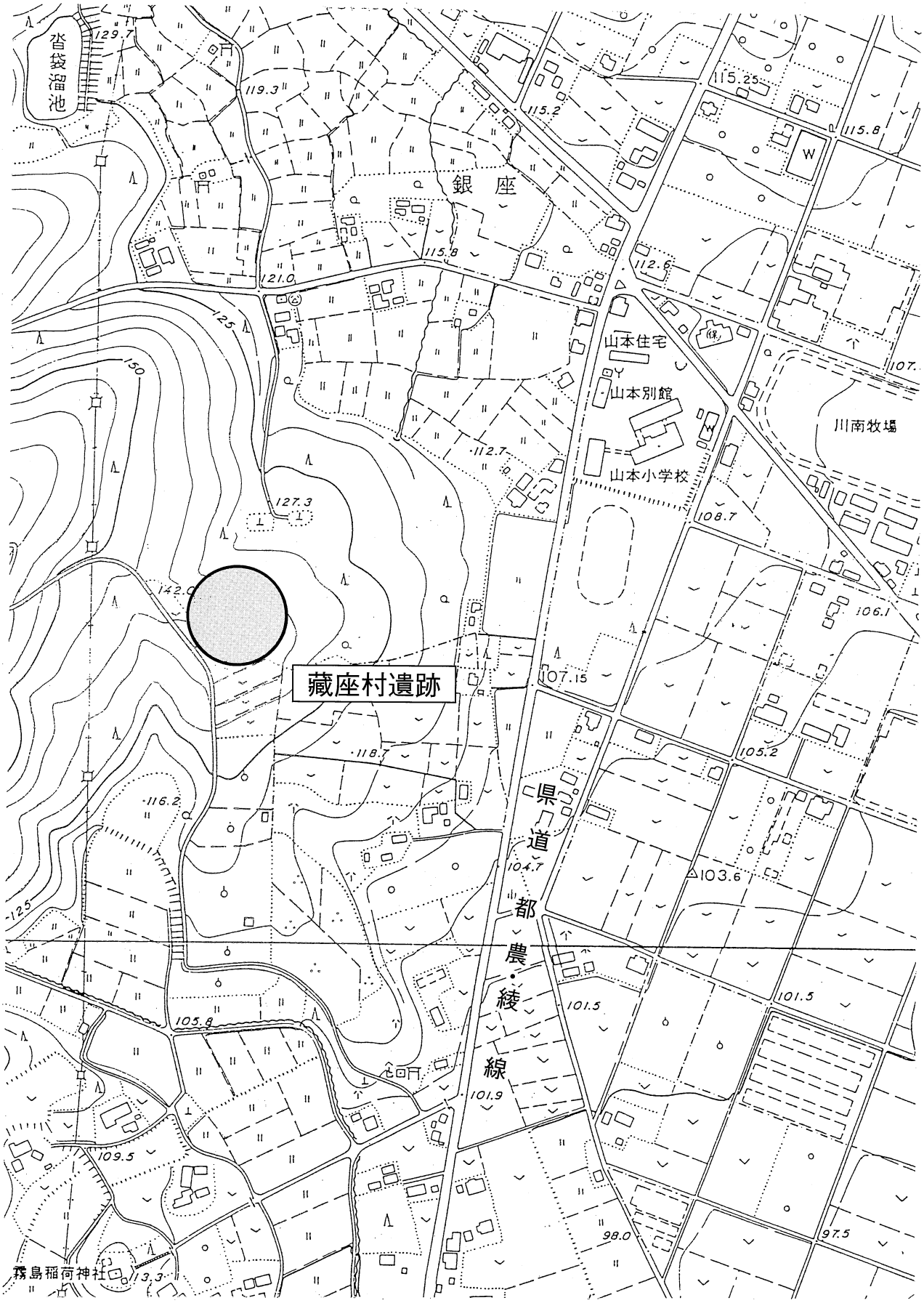
島岡武1995「宮崎県児湯郡後牟田遺跡について」『旧石器から縄文へ』鹿児島考古学会・宮崎考古学会

宮崎県埋蔵文化財センター 1997『霧島遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第４集

茂山護・大野寅男 1977「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第３号 宮崎考古学会

宮崎県1992「東平下遺跡」「中ノ迫Ａ遺跡」「上ノ原遺跡」「把言田遺跡」「野稲尾遺跡」『宮崎県史』資料編考古１

第１図　藏座村遺跡位置と周辺遺跡図（１／50,000）



第２図　藏座村遺跡周辺地形図（１／2,000）

第２節　調査の経過（第３図・第４図）

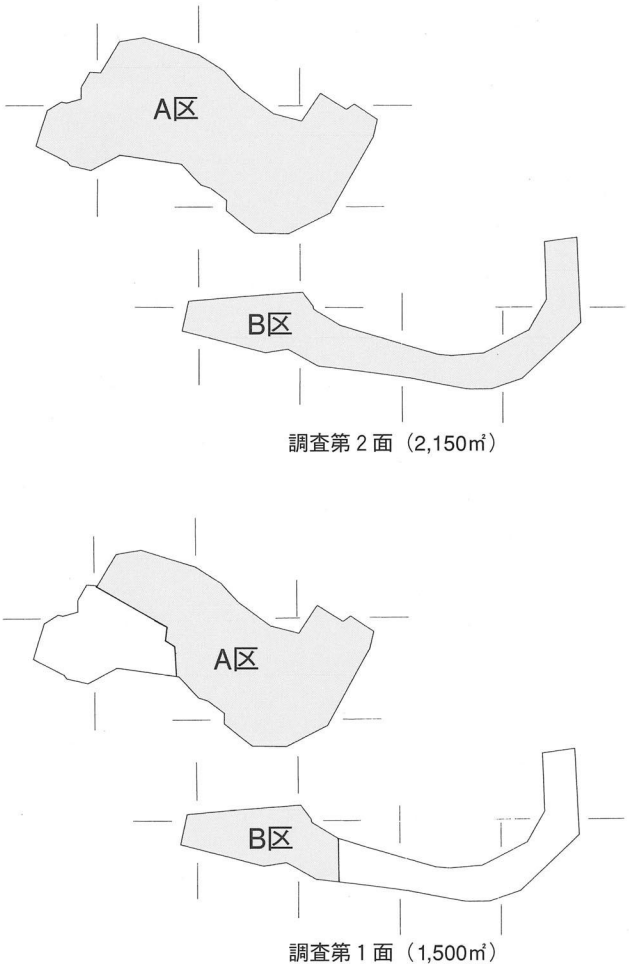
藏座村遺跡の調査対象面積は6,300㎡である。調査の便宜上，丘陵上（3,700㎡）をＡ区，丘陵斜面上（2,600㎡）をＢ区と設定した（第４図）。調査前は，Ａ区は山林・Ｂ区は畑地および里道であり，歩くと土器片や石器などが表採できるような状態であった。調査対象面積は，急斜面や削平され包含層が確認できなかった約4,000㎡を調査対象区から除外し，最終的には約2,300㎡となった。調査に先立って行った確認調査（平成11年８月実施）の結果をうけて，アカホヤ火山灰層を境とする大きく２つの調査面（アカホヤ火山灰層上：調査第２面・アカホヤ火山灰層下：調査第１面）を中心として調査を行った。なお，調査は，調査第２面→調査第１面の順で着手した。

調査第２面の調査はＡ・Ｂ区同時に着手した。重機を用いて第Ⅰ層から第Ⅲ層を除去した後に，人力によって第Ⅳ・Ⅴ層を掘り下げたところ，Ａ区全体及びＢ区西側より弥生土器をはじめとする遺物が散見し始めた。第Ⅳ・Ⅴ層は，Ａ・Ｂ区全体から検出され，調査対象面積は2,150㎡（Ａ区1,400㎡・Ｂ区750㎡）となった（第３図―上）。更に精査の結果，土坑多数・竪穴住居跡２軒・土坑１基が確認された。遺物は，縄文土器・弥生土器などが出土した。

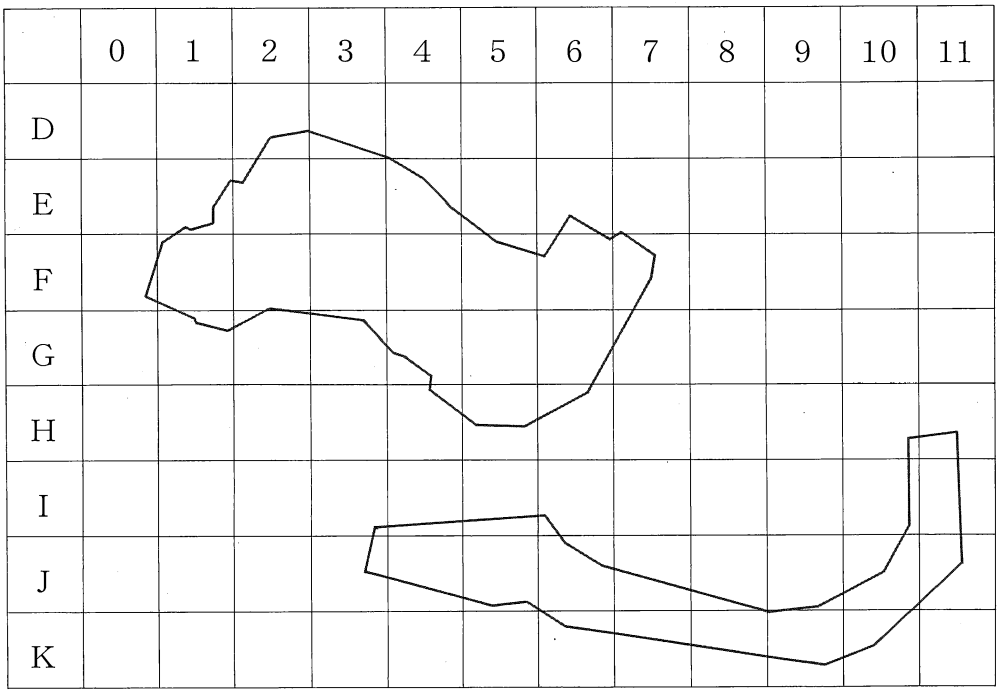
第Ⅴ層調査後，人力と重機によって第Ⅵ層のアカホヤ火山灰層を除去し，調査第１面である第Ⅶ層の調査に着手した。第Ⅶ層は，Ｂ区東側で残っておらず，調査対象区から除去した。第Ⅳ層・第Ⅴ層の調査対象面積は1,500㎡（Ａ区1,200㎡・Ｂ区300㎡）となった（第３図―下）。人力による掘り下げを行ったところ，Ａ区西側を中心に，礫群１カ所・集石遺構７基が確認された。遺物は，縄文土器片・石器などが出土した。第Ⅶ層は，出土した土器片や石器から，旧石器時代から縄文時代早期の包含層であると考えられる。

また，調査中にトレンチを数カ所設定し，第Ⅶ層以下の確認を行ったが，遺構・遺物は確認できなかった。

現地での記録図面作成のため，国土座標（ＸＹ座標）に乗じた10ｍ単位のグリッドを設定した（第４図）。更にこのグリッドを利用して，南北方向は北から南へＡ～Ｌ・東西方向は西から東へ１～９に区画し，この２つの組み合わせで区画（例えば「Ｇ４区」・「Ｋ９区」など）を設定した。以後の文章にこの区画を用いることとする。



第３図　藏座村遺跡各調査面範囲（1,／1,500）



第４図　藏座村遺跡グリッド点配置図（１／1,000）

第３節　基本層序

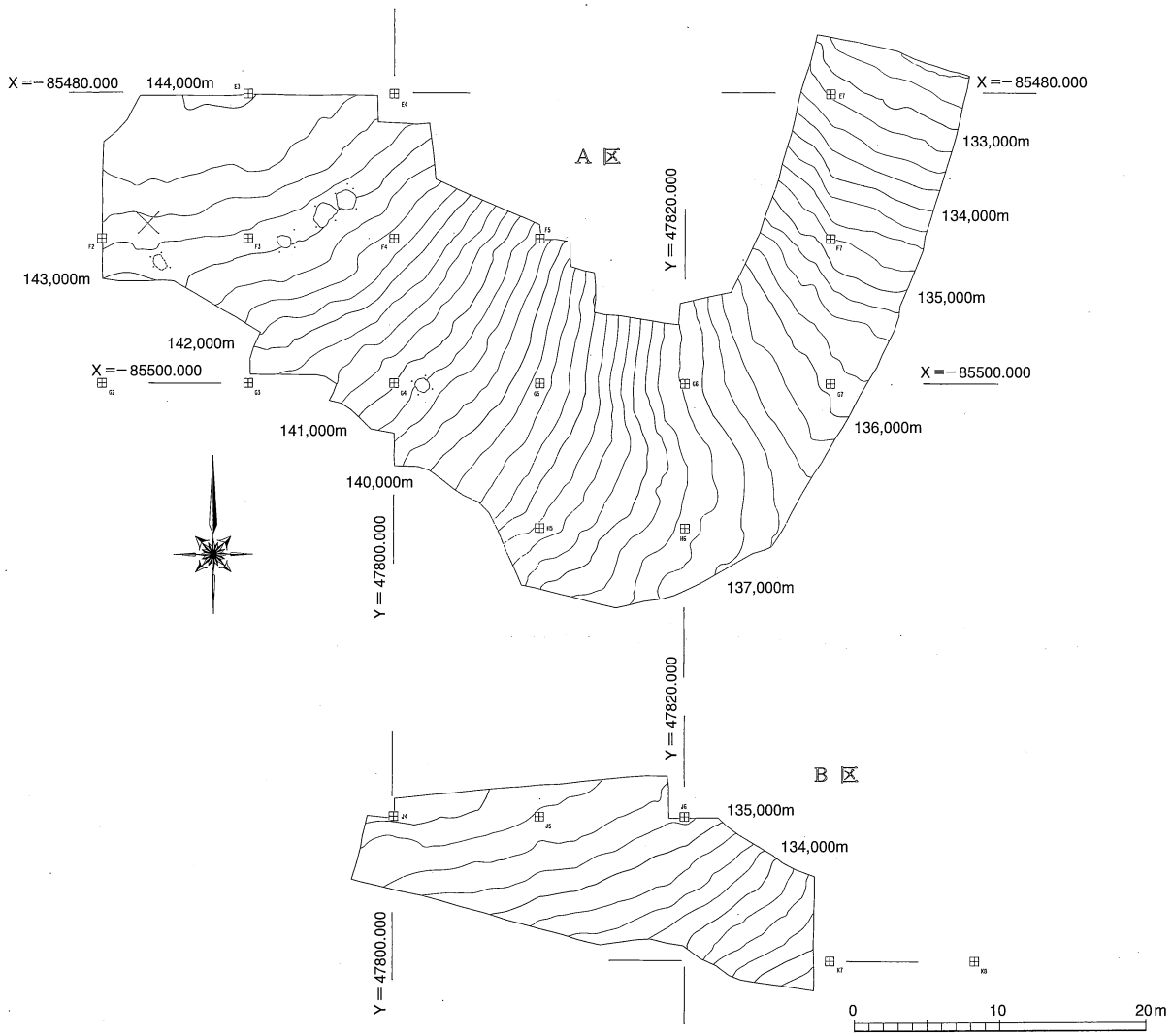
藏座村遺跡の土層堆積状況は，遺跡が緩斜面上に立地しているため安定しておらず，場所によって異なるが，基本層序は以下のようになる。主な遺物・遺構の包含層は，基本層序の第Ⅳ層（弥生時代～近代）と第Ⅶ層（旧石器時代～縄文時代早期）である。また，土取りによって現れた調査区南西側やＡ区の試掘トレンチにおいて，第Ⅷ層以下の土層が確認された。第Ⅷ層以下，灰褐色土・桃褐色土・灰褐色土・桃褐色土・灰褐色土・暗灰色土の順であり，いずれも遺構・遺物は確認されなかった。詳しくは第Ⅳ章第１節「藏座村遺跡の土層とテフラ」に記している。

第Ⅰ層	暗黒褐色土(HUE 5YR1.7/1)。表土。しまりなくボロボロしている。
第Ⅱ層	黒褐色土(HUE 7.5YR 2/1。橙褐色軽石粒を含む。しまりはない。
第Ⅲ層	暗褐色土①(HUE 7.5YR 3/2～2/1)。橙褐色軽石粒を含む。ブロック状の暗オリーブ褐色土を含むことなどから造成土だと考えられる。
第Ⅳ層	黒色土。(HUE 2.5Y 2/1)橙褐色火山灰土を含む。この層から弥生時代の遺物が数多く検出される。
第Ⅴ層	暗黒褐色土(HUE 10YR 3/1～2/1)。径約１～３㎜の暗黄褐色火山灰土が混入している。
第Ⅵ層	暗黄火山灰質土(HUE 10YR 6/8～5/8)。アカホヤ火山灰の二次堆積だと考えられる。
第Ⅶ層	暗褐色土②(HUE 10YR 2/1)。この層から石鏃・縄文土器などの遺物が検出される。旧石器時代～縄文時代早期の包含層だと考えられる。
第Ⅷ層	暗オリーブ褐色土(HUE 5Y 3/2～2/2)。径20㎝未満の礫を含む以外含有物はほとんどなく，かたくしまっている。

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　調査第１面（旧石器時代～縄文時代早期）の調査（第５図～第18図）

調査第１面（基本層序の第Ⅶ層）の調査では，礫群１カ所・集石遺構７基・縄文土器片・石器が確認された。調査第１は，①鬼界カルデラアカホヤ火山灰（約6,400年前）層より下層に位置すること②出土した遺構・遺物が旧石器時代～縄文時代早期に属するものであることから考えると，旧石器時代～縄文時代早期の包含層である。しかし，第Ⅱ章―２で記したように，明らかな基本層序の第Ⅶ層はＡ区西側及びＢ区全体の限られた区域の検出であり，急斜面に位置するＡ区東側では第Ⅳ層～第Ⅶ層が分層できない状況であった。そこで，本節では，一部分層できなかったＡ区東側の調査第２面（基本層序の第Ⅳ層）で出土した旧石器時代～縄文時代早期に属する遺物を調査第１面の中で扱っている。なお，出土層の区別は，後述してある遺物観察表の出土層の項に記している。



第５図　藏座村遺跡第Ⅶ層上面地形図（１／500）

（１）遺　構（第６図～第８図）

■礫群（第６図）

礫群は，Ａ区西側Ｆ２・Ｆ３区を中心に出土した。礫群全体は，粗密の差があり，数群あった可能性もあるが，明瞭ではなく一群として扱う。規模は，北側が削平されているが，長径14ｍ・短径４ｍの帯状を呈し，地形の傾斜に対して直交するように位置する。西側の高所ほど礫の密度が高く，低所ほど礫の密度が粗になっていることから，本来高所に集中していたが流出したものだと考えられる。構成される礫は，３～15㎝程度の赤褐色系凝灰岩製の角礫・亜角礫である。礫群の中から縄文土器片・石器（削器・蛤形剥片・石鏃など）を含むことから縄文時代早期の遺構だと考えられる。また，礫群を外していく過程で，礫群の中から集石遺構が検出された。検出状況より考えると，礫群と集石遺構の時間的前後関係は，同時期もしくは若干礫群が新しいことになる。

■集石遺構（ＳＩ１～ＳＩ７）（第７図・第８図・第１表）

集石遺構は７基確認された。７基の集石遺構は，Ａ区西側で確認され，礫群と位置が重なる。各集石遺構は，赤変した凝灰岩の角礫を主構成礫とし，掘り込みをもったタイプであるが，若干の相違があるので個別に記す。

ＳＩ１（第７図―１）Ｆ２区北側で検出。長径110㎝・短径75㎝・深さ10㎝の不定形で浅めの掘り込みがあるが，明確ではない。構成礫もまばらで，底部の貼石は伴わない。

ＳＩ２（第７図―２）Ｅ３区南側で検出。ＳＩ３と隣接する。長径160㎝・短径125㎝・深さ30㎝の明確な掘り込みがある。礫は密に配されている。底部は15～20㎝程度の大振りな角礫によって貼石がなされている。埋土から炭化物が検出される。

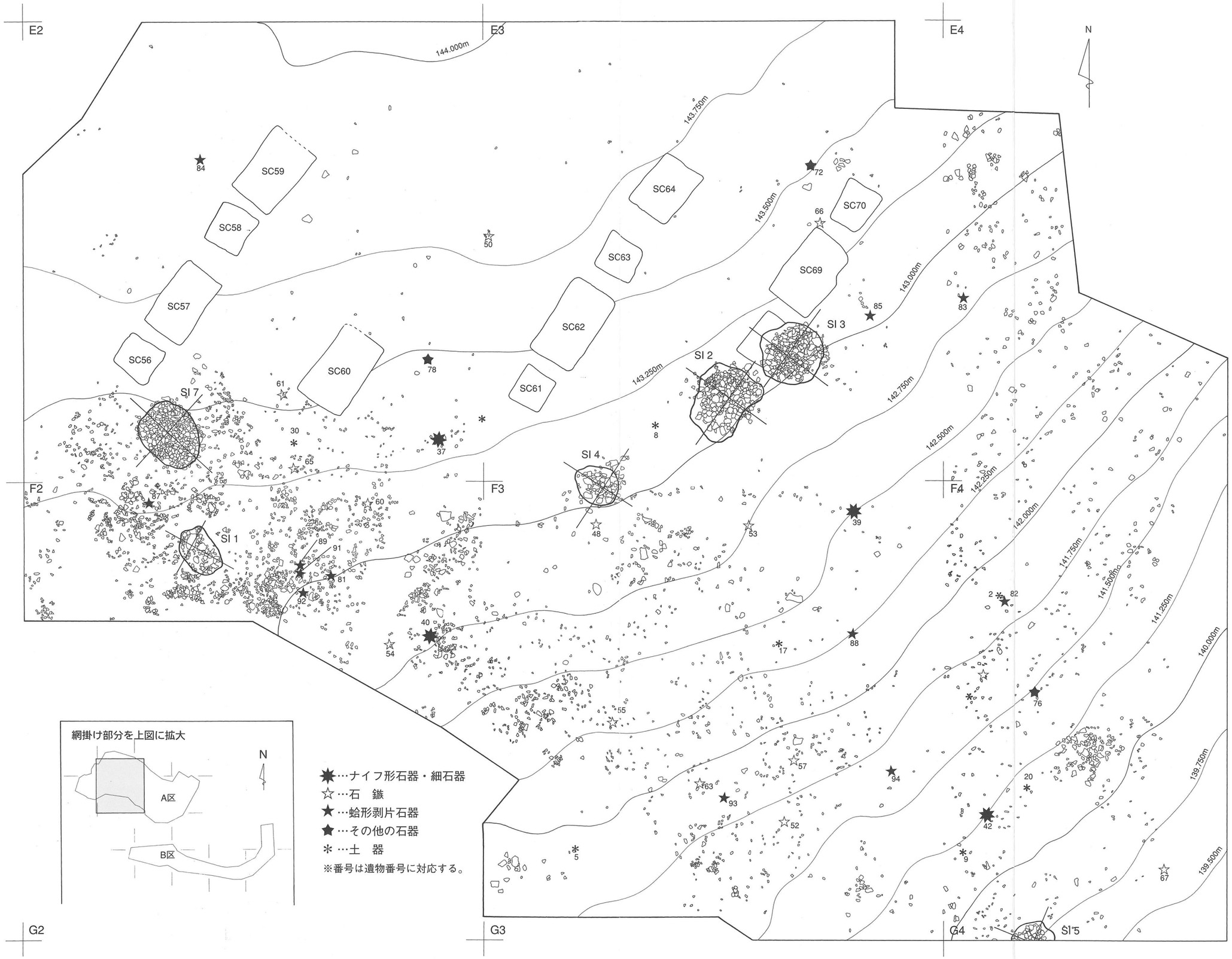
ＳＩ３（第７図―３）Ｅ３区南側で検出。長径150㎝・短径140㎝・深さ40㎝の円形に近い掘り込みがある。礫は密に配されている。ＳＩ２同様，底部は15～20㎝程度の大振りな角礫によって貼石がなされている。

ＳＩ４（第７図―４）Ｆ３区北西隅付近で検出。長径100㎝・短径90㎝・深さ20㎝の卵形で若干浅めの掘り込みをもつ。上部は比較的密に礫が配されているが，底部には礫が配されていない。埋土から炭化物が検出された。

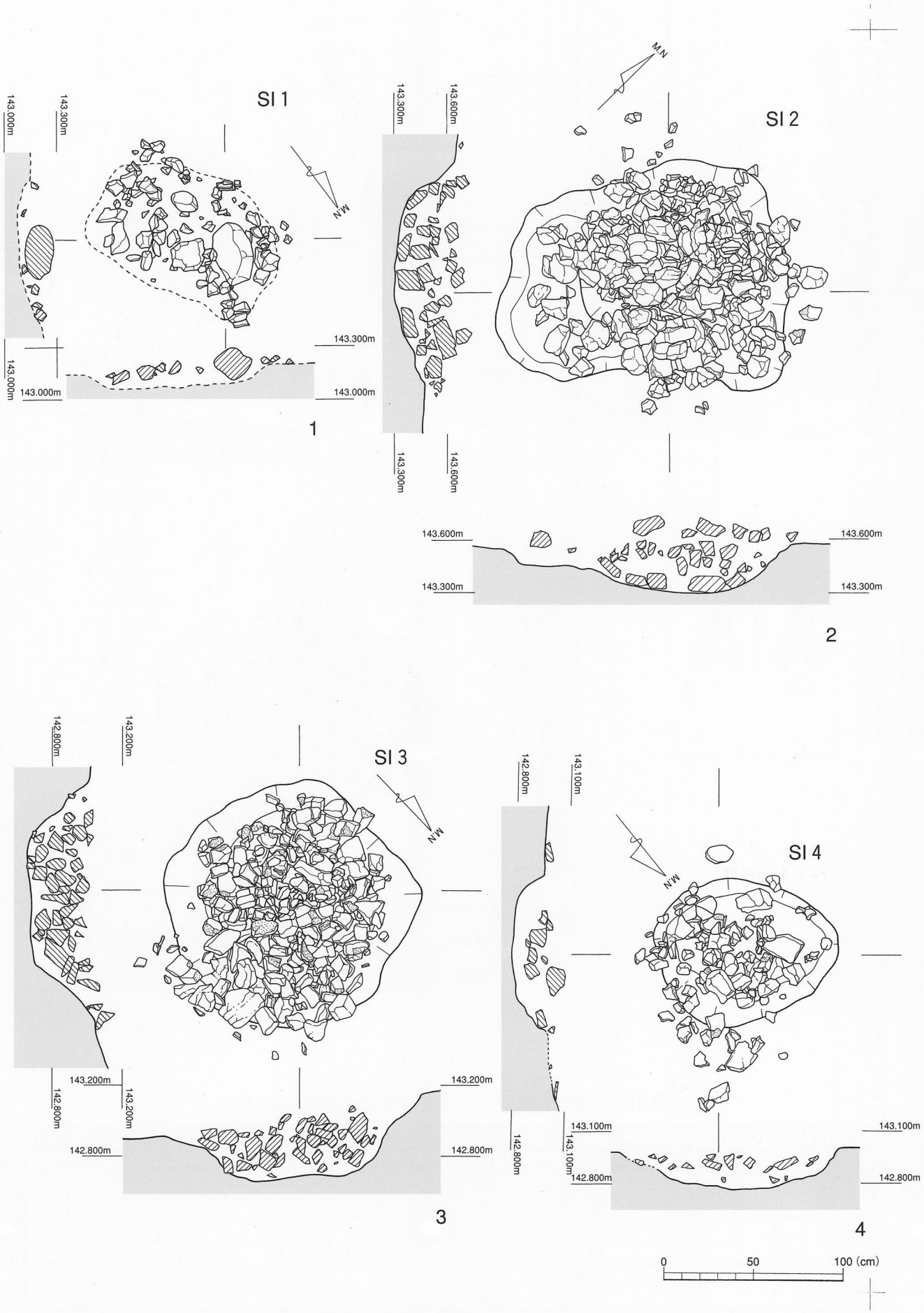
ＳＩ５（第８図―１）Ｇ４区北西隅付近で検出。長径100㎝・短径95㎝・深さ20㎝で円形の掘り込みをもつ。底部には，10～15㎝程度の大振りな角礫が配されている。掘り込み底部からは，貼り付いた形で炭化物が検出された。被熱のためか割れた礫が多いのが特徴的である。礫間から打製石鏃（第８図―１）が出土した。

ＳＩ６（第８図―２）Ｅ２区南西隅付近で検出。長径145㎝・短径120㎝・深さ20㎝で楕円形の掘り込みをもつ。全体的に密に礫が配されている。底部には，10～20㎝程度の大振りな角礫が集中するが，貼石という感じではない。

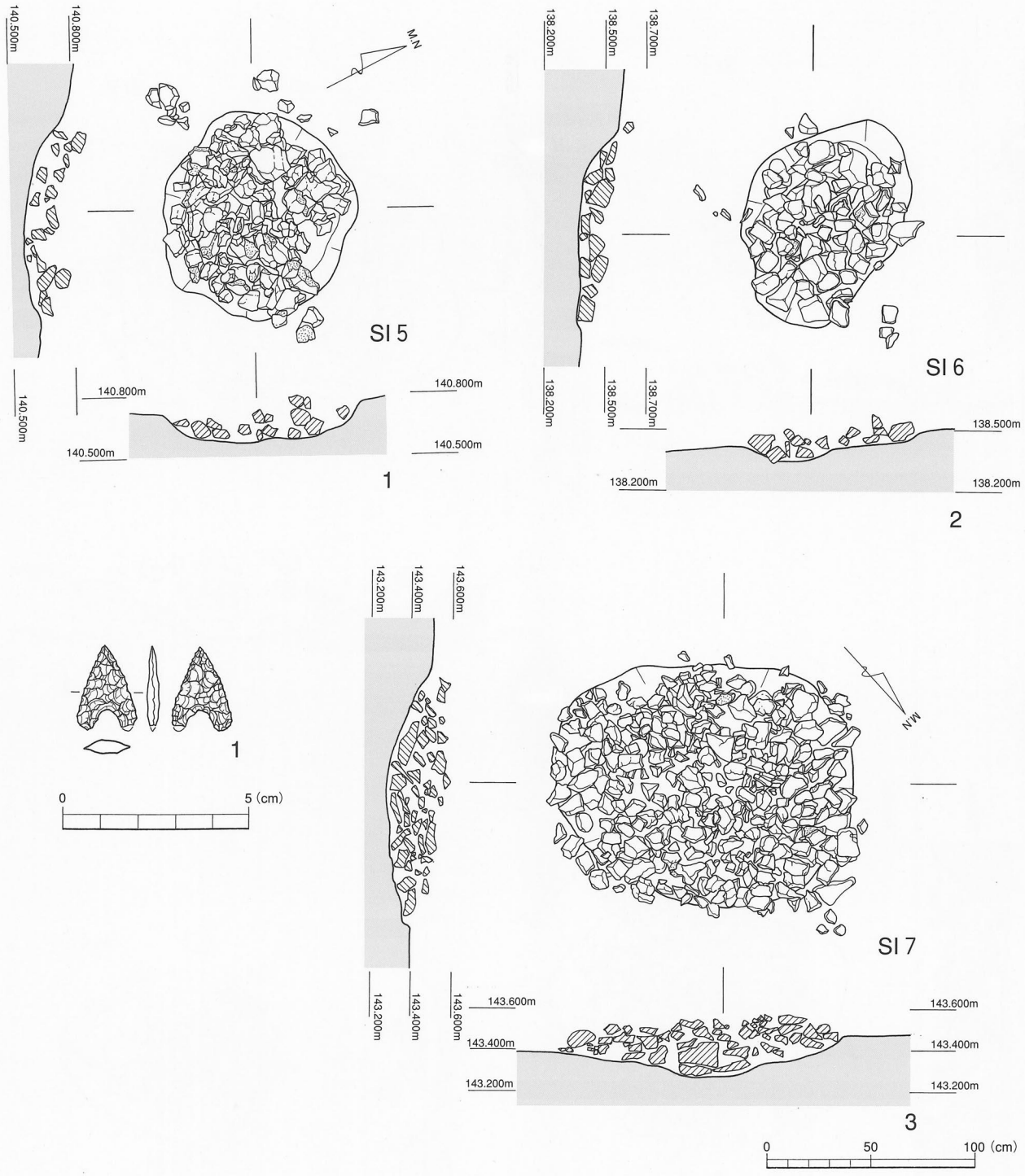
ＳＩ７（第８図―３）調査時の不手際で詳細な位置について記録することができなかったが，Ｆ４区西側で検出された。長径105㎝・短径80㎝・深さ10㎝未満の楕円形で浅い掘り込みをもつ。全体的に



第６図　査第１面 遺構・遺物検出状況図（１／80）



第７図　集石遺構①（１／30）



第８図　集石遺構②（１／30）及び出土遺物（３／５）

集石番号（SI）	出　土　区	構　成　礫	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	掘り込み	底部貼石
S　I　1	F２区	凝灰岩	110	75	10	?	無し
S　I　2	E３区	凝灰岩	160	125	30	有り	有り
S　I　3	E３区	凝灰岩	150	140	20	有り	有り
S　I　4	F３区	凝灰岩	100	90	20	有り	無し
S　I　5	G４区	凝灰岩	100	100	20	有り	有り
S　I　6	E２区	凝灰岩	145	120	20	有り	有り？
S　I　7	F４区	凝灰岩	105	80	10	有り	無し

第１表　集石遺構計測表

10～15㎝程度のやや大振りな角礫・亜角礫が均一的に配されている。浅めの掘り込みと均一的に配された状態から考えて，上部が削平された可能性もある。

（２）遺　物

■縄文早期土器（第９図・第10図・２～36）

縄文時代早期に位置づけられる土器が多数出土した。本遺跡における縄文土器は，少数の上に細片が多く，器形や調整方法などによる分類が困難である。文様を主な着眼点として，第１類～第８類の分類を行った。ここでは，分類の基準と根拠を示し，若干の説明を行う。なお，個々の詳細な情報については，後出の観察表（ｐ50～ｐ51）に記している。

縄文土器　第１類（２・３）

口縁部付近に縦位の貝殻腹縁刺突文を施すグループである。

２は，口縁部付近であり，縦位の貝殻腹縁刺突文を施している。「吉田式土器」に相当する。２は，口縁部であり，外器面に縦位の密なる貝殻腹縁連続刺突文を施している。器壁は厚く，口唇部には丁寧なナデを施している。「中原式土器」の比較的早い段階に相当する。

縄文土器　第２類（４～７）

口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁による横・斜位の貝殻腹縁連続刺突文を施す。「下剥峰式土器」に相当する。

４は，若干内湾気味に立ち上がる口縁部であり，横・斜位の貝殻腹縁を交叉状に組み合わせた連続刺突文を施す。器壁は６㎜程度で比較的薄い。５～７の器壁は，0.9～1.0㎝と若干厚めである。

縄文土器　第３類（８～11）

「円筒形貝殻条痕文」系の土器である。口縁部付近に横方向の貝殻条痕文を施す。「中原式土器」の新しい段階に相当する。丁寧にナデを施し丸みを帯びた口唇部に，直口気する口縁部をもち，器壁が0.8～1.1㎝と厚い。

８・９・11は横方向のみの貝殻条痕文を施す。10は縦・横方向に貝殻条痕文を施す。

縄文土器　第４類（12～22）

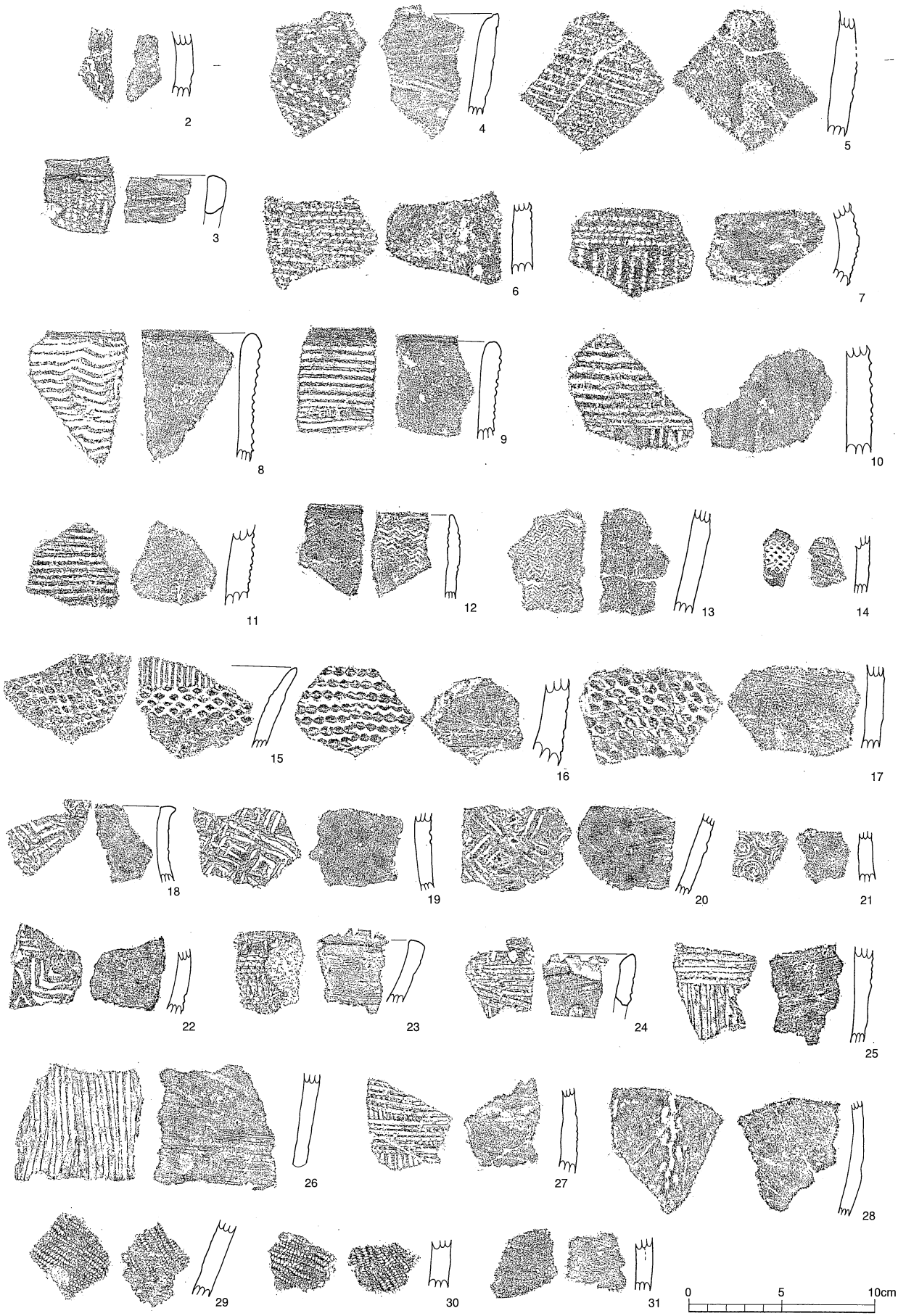
「押型文」である。施文具あるいは施文方法によってさらに４つに細分する。

（ａ）山形押型文（12・13）

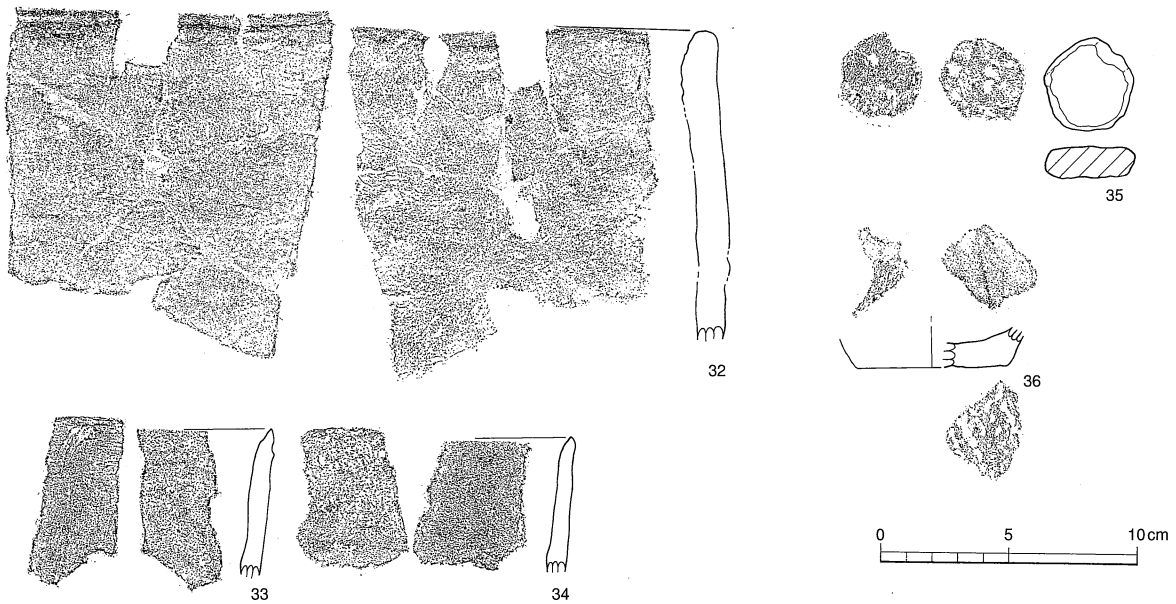
12は，ほんのわずかに内傾する口縁をもち，外器面には横方向回転による帯状の細かい山形文を，内器面には１列に横方向回転による帯状の細かい山形文を施している。「稲荷山式土器」に相当する。13は，細かい山形文が施されているが，風化著しく，不明な点が多い。

（ｂ）楕円形押型文（14～17）

14は，細片であるが，器壁は薄く，外器面に横方向回転による帯状の細かい楕円形文を施している。「稲荷山式土器」に相当する。15は，外反する口縁をもち，外器面には回転による楕円形文を，内器面上部には原体条痕と１列に横方向回転による帯状の楕円形文を施している。「下菅生Ｂ式土器」に相当する。16・17は，丸みを帯びた胴部片で，器壁は厚く，粗い楕円形文が施されている。おそらく「田村式土器」あたりに相当する。



第９図　縄文時代早期土器①（１／３）



第10図　縄文時代早期土器②（１／３）

（ｃ）菱形押型文（18～20・22）

細片４点のみの出土であるが，大きく外反する口縁部と膨らむ胴部は確認できる。原体を横方向回転による菱形文を施している。「手向山式土器」に相当する。

（ｄ）同心円形押型文（21）

１点のみの出土である。21は，細片であるが，わずかに外反する器形がうかがえる。外器面には，４重の同心円の押型文が施されている。「手向山式土器」に相当する。

縄文土器　第５類（23～27）

外器面全体に板状具による縦方向・横方向に条痕を施す。器壁は0.7～1.0㎝と若干薄目である。「轟１式土器」に相当する。23・24は，口縁部であり，口唇部に刻みをもつ。口縁部上部には横・斜方向の条痕を，口縁部から胴部にかけては縦方向の条痕を施す。24・26は，口縁部付近であり，一度縦方向に条痕を施した上から横方向に条痕を施している。

縄文土器　第６類（28～31）

外器面に縄状の回転縄文を施す。28～31は，外器面に単節の縄文を縦方向に回転させている。27は，幅1.2㎝程度の縁取りのない狭い区画に縦方向に回転させた縄文を施している。「塞ノ神式土器」に相当する。29・30は内器面にも同様の縄文を施しているが，30の内器面はナデ調整のみである。

縄文土器　第７類（32～34）

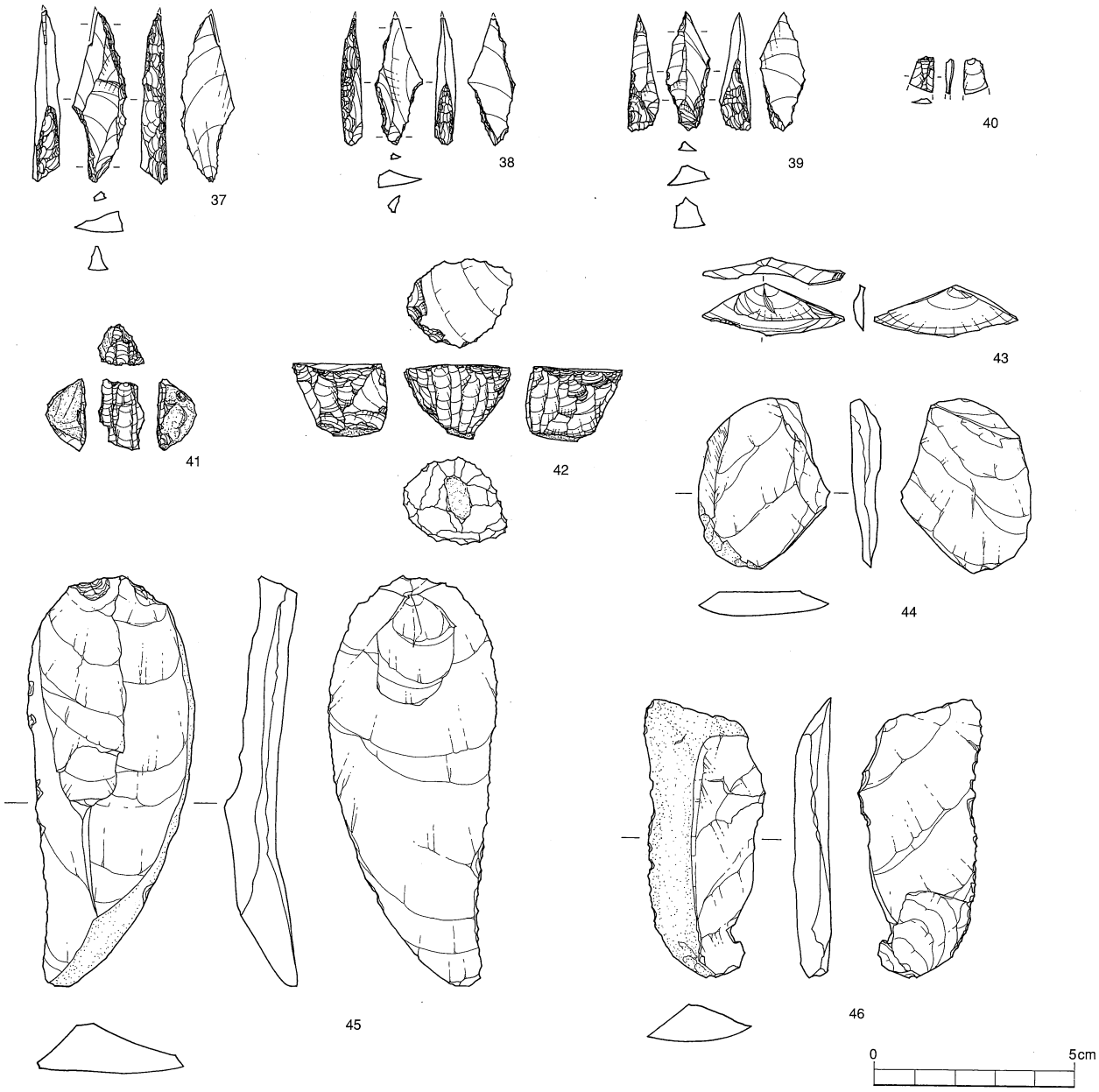
「無文土器」である。32は，若干肥厚させ丸みを帯びた口唇部，外反気味の口縁，わずかに膨らみのある胴部をもつ器形。器壁は10㎜程度で比較的厚い。内外器面にナデ調整を施しているが，特に口唇部周辺は丁寧にナデ調整を施している。33・34は，細く尖った口唇部に，わずかに外反させた口縁部をもつ。器壁は５㎜程度で比較的薄い。

縄文土器　第８類（35・36）

その他，分類が困難なものを一括して扱う。35は円盤状の土器である。円盤状になったのは，意図的なものなのか，風化やローリングによるものなのか判断が難しい。本来土器であったのは間違いないであろう。36は，底部であり，推定径6.0㎝である。風化著しいが，底部に編物か縄目の圧痕が確認できる。

■**石器**（第11図～第18図・37～112）

ここでは，第１調査面（基本層序の第Ⅶ層）出土の石器を主に扱う。前述したとおり，調査第１面である第Ⅶ層は，層の堆積状況が不安定であったために分層が行えず，旧石器時代～縄文時代早期という幅広い時代の遺物が同じ層から出土する結果となった。ここから出土した石器類を時代によって分類することは難しく，一括して扱うことにする。



第11図　旧石器時代～縄文時代早期石器①（３／５）

ナイフ形石器（37～39）

38～40は，いずれも石刃状の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。38・39は，切断の後に刃潰し加工を施している。部分的に対向調整も認められる。41は，主に基部加工を施し，先端部にも二次的加工を施している。

細石刃及び細石刃核（40～42）

41・42は細石刃核である。41は，黒曜石製の小割礫を素材とする。野岳・休場型タイプの細石刃核である。42は，チャート製の剥片か分割礫を素材とする。断面台形を呈する船野型タイプの細石刃核である。40はチャート製細石刃である。欠損しており頭部付近のみの残存であるが，頭部調整が観察される。

剥片（43～46）

43は，横長剥片素材の剥片である。打面調整は観察されないが，二枚の剥離面が構成される稜上から連続される剥片剥離が想定できることから，瀬戸内技法に類する技術的特徴が看取できる。44～46は縦長剥片素材の剥片である。

石鏃（47～68）

石鏃は全部で22点出土した。47・48は，小型二等辺三角タイプの無茎凹基鏃である。48はチャート製で，腹面に基部と片側縁のみの調整を施している。49～60は，側辺の長い二等辺三角形タイプの無茎凹基鏃である。49～56は，基部の抉り込みの深い鍬形鏃の類である。石材はチャート製か黒曜石製である。57は両側辺が極端に長い頁岩製の凹基鏃である。58・59は，他の石鏃と比して大きく，背腹両面に丁寧な鋸歯状の調整を施している。58はチャート製で，59は黒曜石製である。61～65は正三角形タイプの無茎凹基鏃である。いずれも基部の抉り込みの深い鍬形鏃の類である。石材はチャート製か黒曜石製である。65はチャート製で，側縁を若干湾曲させることで錐状に先端を尖らせている。66は，他の石鏃に比べて薄く大きい。脚部が欠損しており形状は不明であるが，五角形に近いものだと考えられる。67はチャート製で，側縁を一度外反させた特殊な形状である。68はチャート製で，他の石鏃と比して調整が不充分であり，石鏃未製品だと考えられる。

尖頭状石器（69～70）

69は，ホルンフェルス製の横長剥片素材で，背面全体と腹面側縁中心に粗い調整を施している。70は，チャート製不定形剥片素材で，背面側縁に丁寧な調整を施している。

抉入状石器（71）

71は，ホルンフェルス製縦長剥片素材で，片側縁に大きく抉りを入れた調整を施すことによって刃部を作り出している。

石核（72）

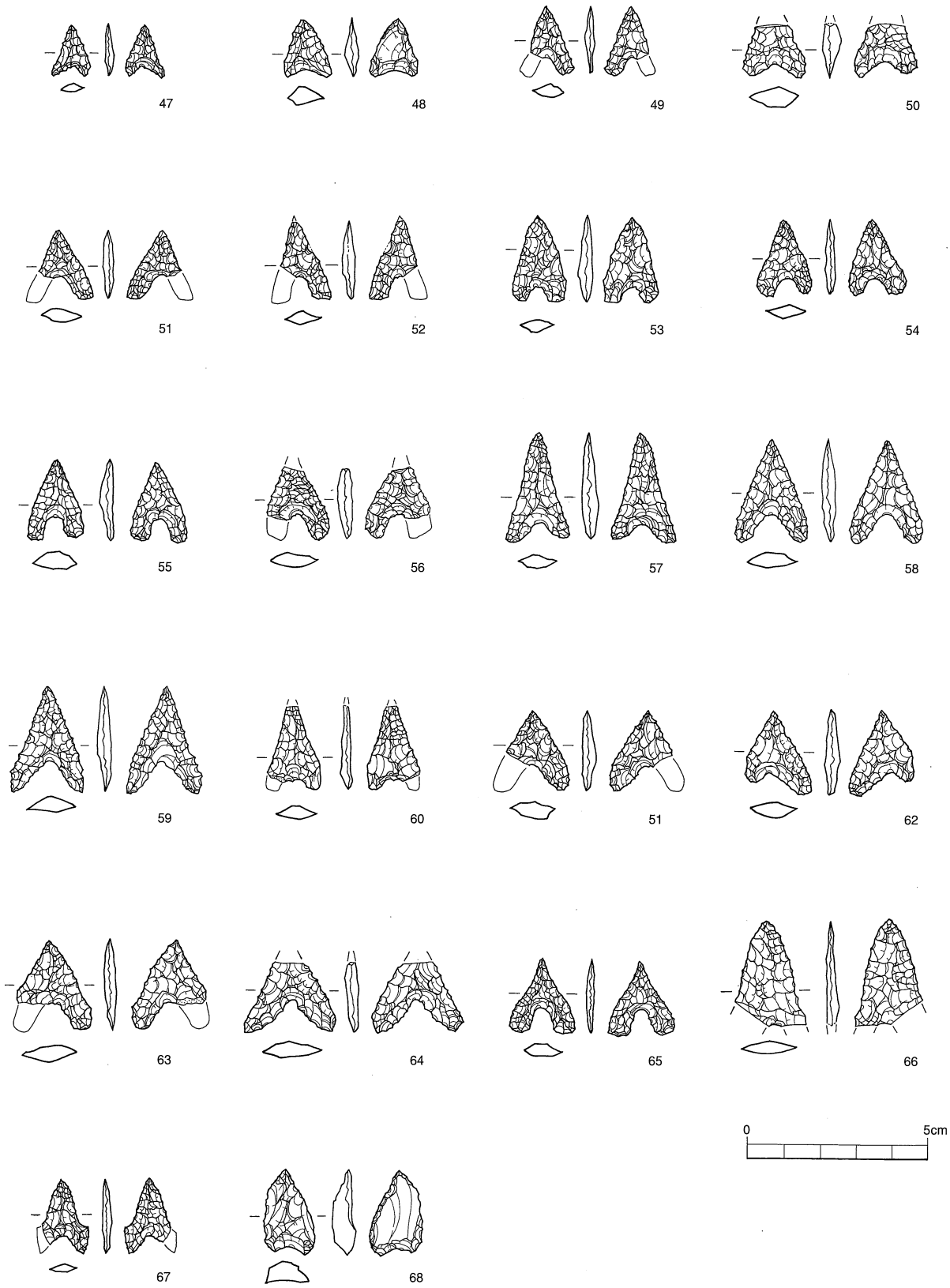
72は，水晶製の粗割礫を素材とした石核である。打面を一面残して，主に打面の周縁から剥いではいるが，若干の打面転移を行っている。

石匙（75）

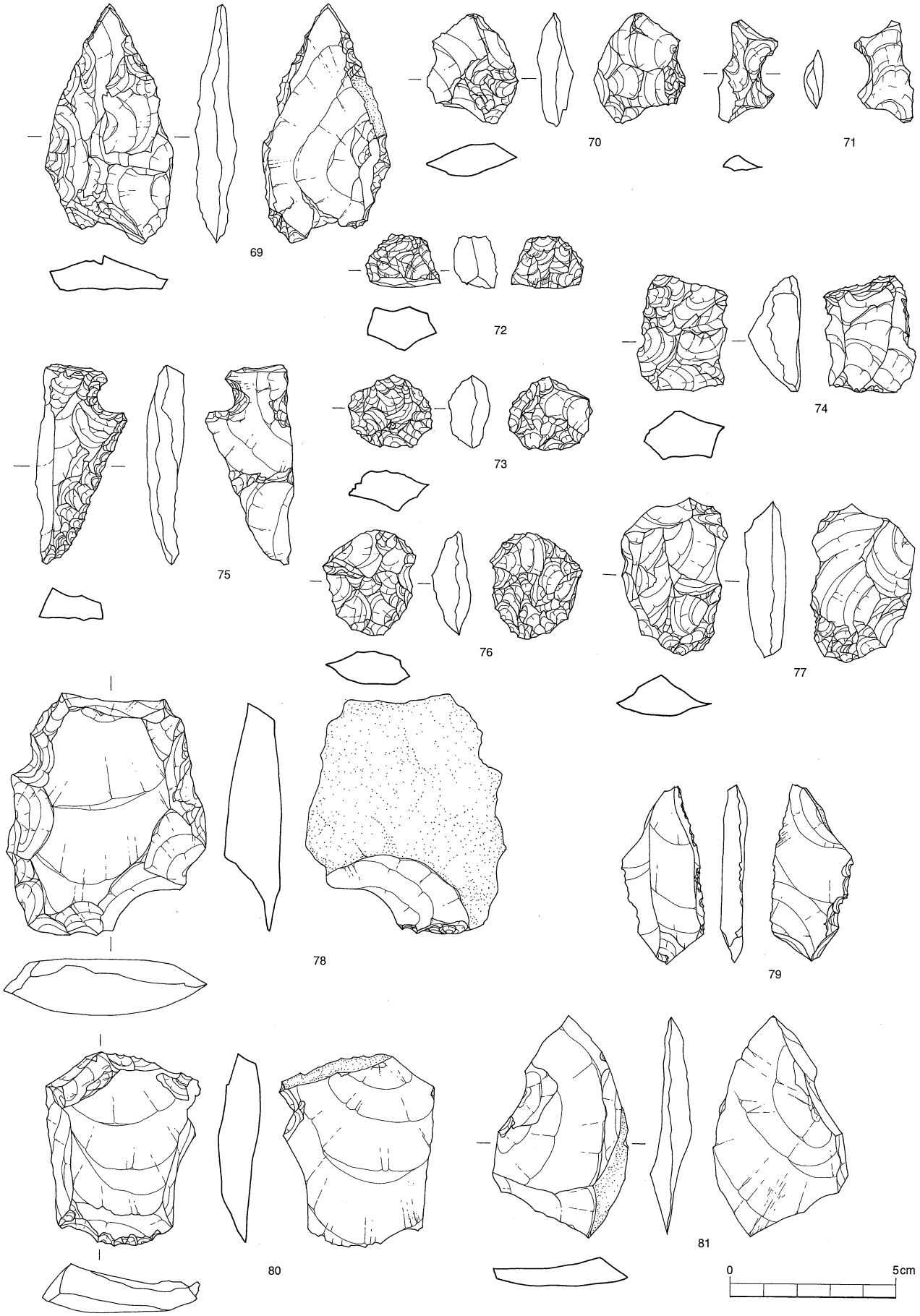
75は，チャート製横長剥片を素材とした石匙である。背面側縁には丁寧な調整が施されているが，腹面は基部のみの調整である。

両面加工石器（73～74・76～77）

４点出土した。いずれもチャート製で不定形の粗割礫を素材としている。76は，大きく求心状に剥離



第12図　旧石器時代～縄文時代早期石器②（３／５）



第13図　旧石器時代～縄文時代早期石器③（３／５）

した後，更に細かい調整を施すことによって鋭利な部分を作り出している。78は，両側縁に向かって剥離を行い，刃部らしき鋭利な部分を作り出している。74・77も粗い調整ながらも鋭利な部分を作出しようとしている。いずれも削器のような用途が想定される。

削器（78～80）

78は砂岩製で，背面には大きく自然面を残し，腹面の周縁には大きな剥離を施すことによって刃部を作出している。79はホルンフェルス製縦長剥片素材で，片側縁には背面から，もう片側縁には腹面から微細な加工を施し，刃部を作出している。・80は安山岩製縦長剥片で，下縁に刃部を作出している。

蛤形剥片石器（81～95）

主に横長剥片を利用して，下縁に鋭利な刃部を設ける一群である（報告書図面では，紙面の関係上，81～95は石器背面上方を左端に配するレイアウトをとる）。鋭利な刃部といっても殆どが微細な剥離である。中には刃部などの加工痕跡及び使用痕跡が認められず，石器として認識できるかどうか疑問の残るものもあるが，ここでは石器として扱う。なお，「蛤形剥片石器」は，①平面が楕円形 ②断面が下方にいくに従って鋭利になっていく　という蛤に似た形態からとった名称であって，藏座村遺跡限定の呼称である。

また，これらの一群は，利用する剥片や刃部の作出方法によって大きくⅠ～Ⅴの５類に分類できる。

Ⅰ類（81～84）…横長剥片を利用し，打点側を上方とする。上縁は打面のままで調整が行われていないため，平面形は楕円形というより三角形に近い。下縁の刃部は湾曲する。

82の下縁には使用痕らしき微細剥離と磨痕跡のようなものが，81・83・84には使用痕らしき微細剥離が確認できる。82・84の上縁には，摘部を意図したかのような若干の調整が施されている。

Ⅱ類（85～87）…円礫の自然面を背面とする剥片を素材とする。打点側を上方とする。Ⅰ類同様，上縁は打面のままで調整が行われていない。円礫の自然面が残るため，下縁の刃部は湾曲する。

85の下縁には加工痕らしき明確な剥離が，86の下縁と側縁には使用痕らしき剥離が確認できる。87の下縁には磨痕跡のようなものが確認できる。

Ⅲ類（88～89）…基本的にはⅡ類と同じであるが，打面自体を作らないが，上縁に若干の調整を施す。円礫の自然面が残るため，平面形は楕円に近い形となる。

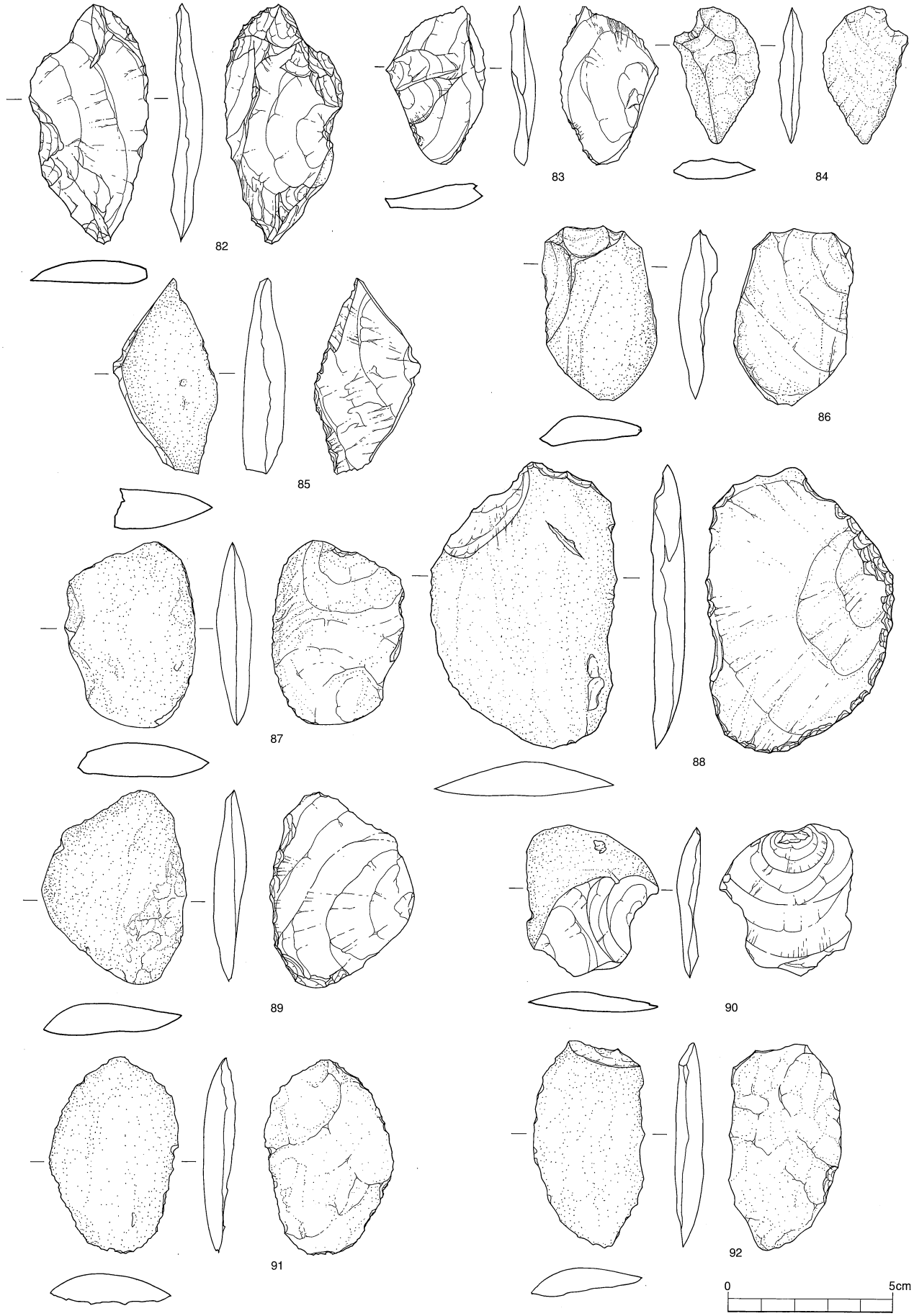
88は，他より比較的大きく，上縁から下縁にかけて加工痕らしき明確な剥離が確認できる。89の下縁には加工痕らしき明確な剥離が確認できる。

Ⅳ類（90～92）…基本的にはⅡ・Ⅲ類と同じであるが，打面自体を作らず，上縁に調整を施すこともない。円礫の自然面が残るため，平面形は楕円形となる。

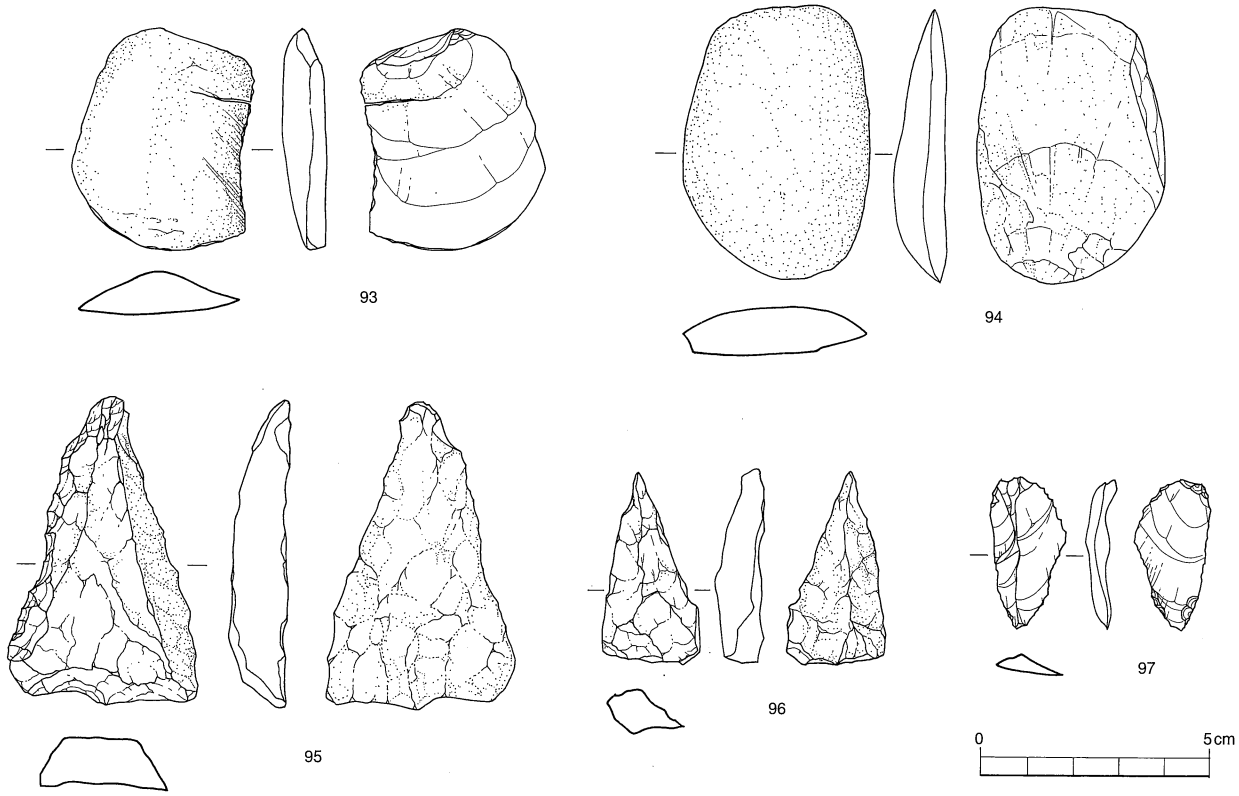
90は，下部が大きく欠損しており詳細がわかりにくいが，打点が上方にあり打面を作出しないのでⅣ類の範疇に入ると考えられる。91・92は下縁に使用痕とも加工痕ともとれるような微細な剥離が確認できる。

Ⅴ類（93・94）…Ⅰ～Ⅳ類と異なり，縦長剥片を素材とする。

93は上縁に打面を設けた後に，剥離を行っている。両側縁ともに鋭利である。94は砂岩製で，打面自体を作らず，上縁に調整を施すこともない。両側縁と下縁ともに鋭い刃部を作出している。93はわずかではあるが使用痕らしき痕跡が確認できる。



第14図　旧石器時代～縄文時代早期石器④（３／５）



第15図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑤（３／５）

二次加工のある剥片（95～97）

使用痕とも微細剥離痕ともとれるような加工痕が認められる剥片が３点出土した。95・96は，砂岩製であり，平面形が二等辺三角形を呈する。ともに二等辺三角形の両斜辺側面に剥離が認められる。97は，チャート製縦長剥片を素材とし，上下端部近くの側縁に微細な剥離が認められる。

磨石（98～101）

使用痕として磨滅痕跡をもつものが４点出土した。いずれも凝灰岩製の楕円形礫である。　98・99は礫の片側面のみに，100は礫の下面のみに，101は側面全体に磨滅痕跡を残す。

敲石（102～107・109）

使用痕として敲打痕跡をもつものが６点出土した。使用石材は，砂岩（104）・流紋岩（105）・凝灰岩（106～107・109）と多種にわたる。更に素材とする礫の形態もバリエーションが多い。102・103は長さ10㎝程度の乳棒形礫を，104は鶏卵形礫を，105は扁平楕円形礫を，106は球形礫を，107・109は扁平円形礫を用いている。

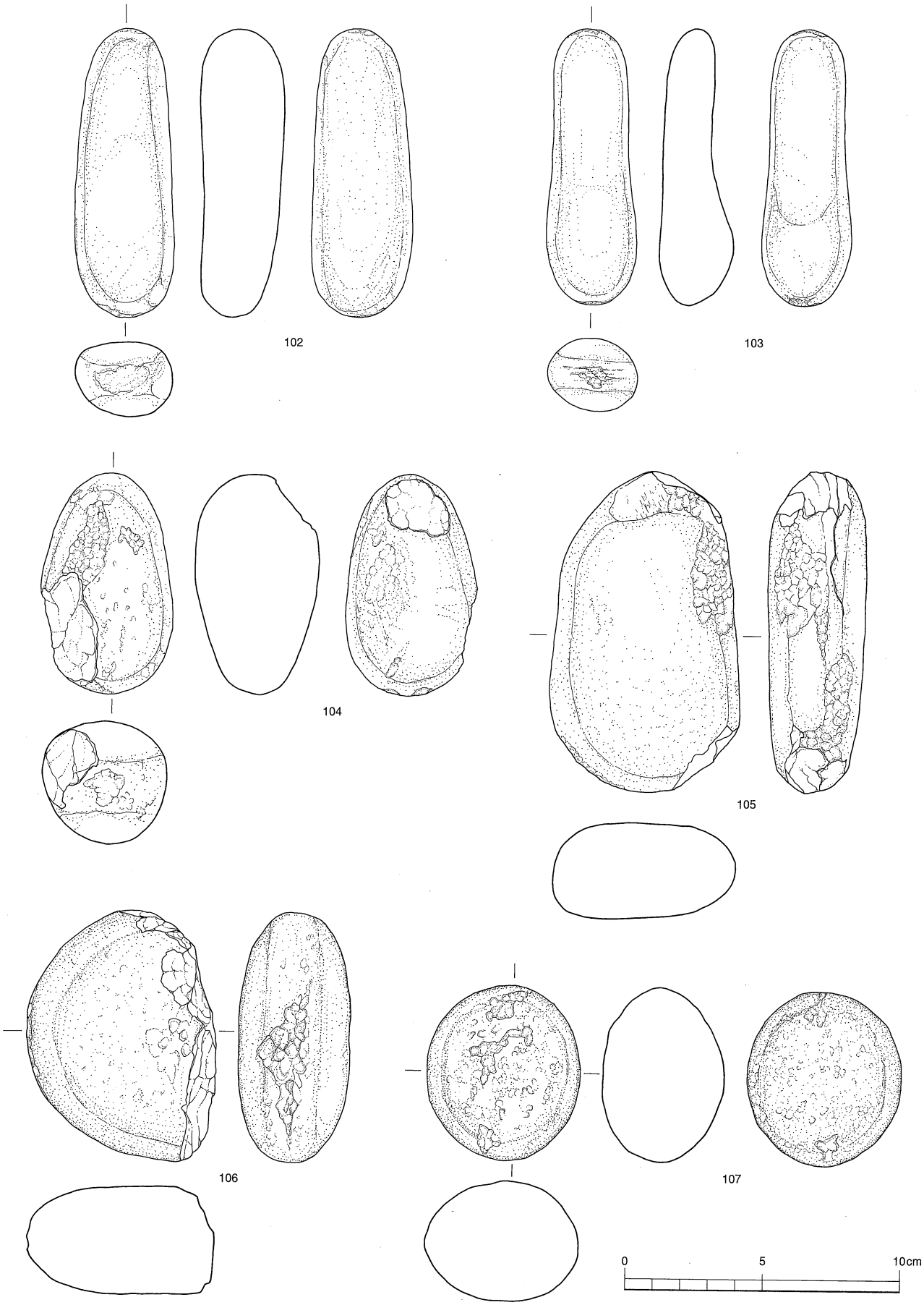
凹石（108・110・111）

敲石と若干重複するが，使用痕として敲打痕による凹部を礫中心に配するものを凹石として扱う。３点出土した。いずれも敲打痕及び磨滅痕が礫中心部以外にも認められる。108は，扁平形の砂岩で，片面中心部及び上下両端に敲打痕が認められる。110は，赤変した扁平円形の凝灰岩で，両面の礫中心に敲打痕，周縁全体に著しい磨滅痕と敲打痕が認められる。111は，扁平楕円形の凝灰岩で，両面の礫中心に敲打痕，両側縁に敲打痕と磨滅痕が認められる。

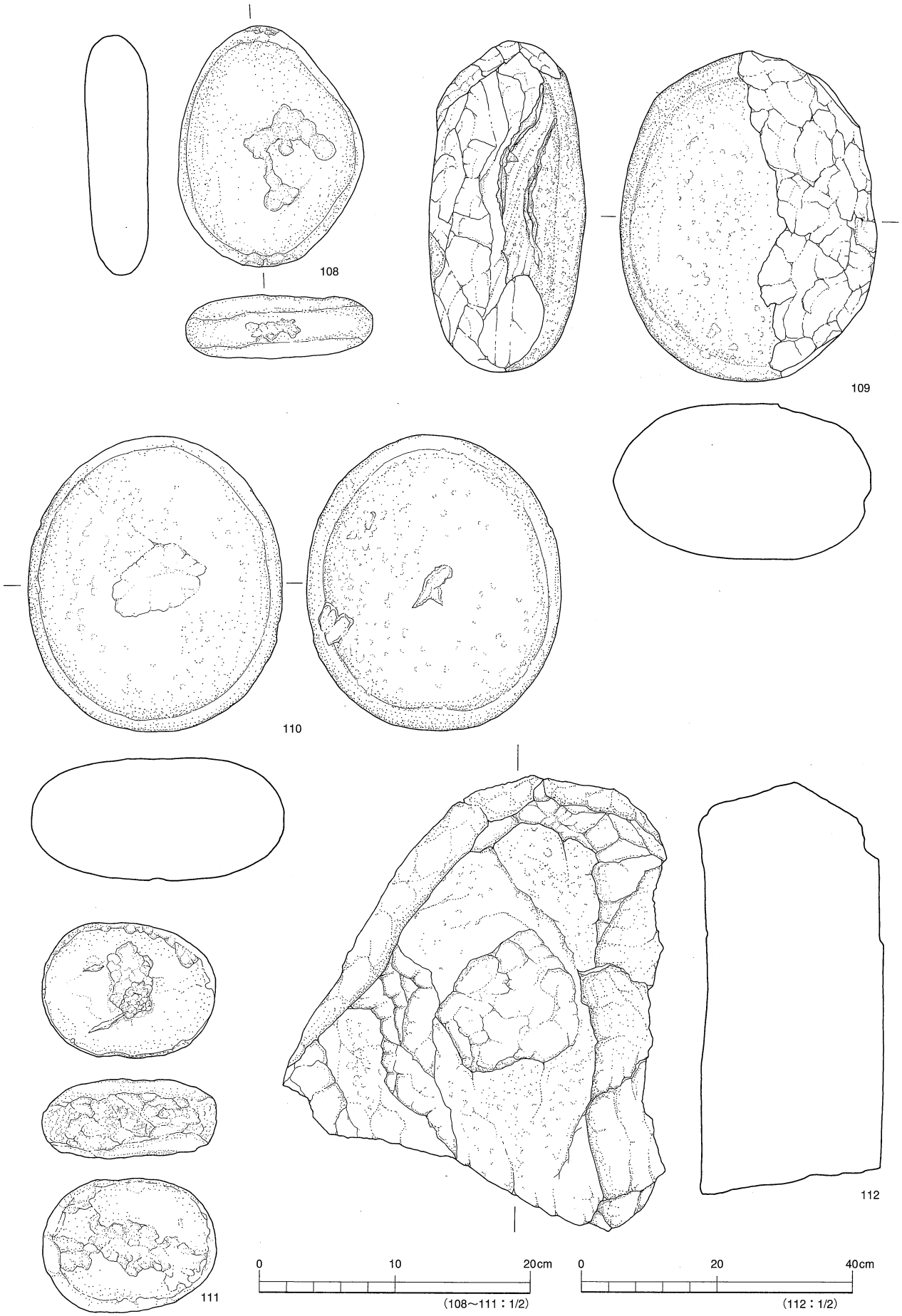
台石（112）

１点出土した。使用石材は，最大長　28.3㎝・最大幅34.1㎝・最大厚14.3㎝・重さ17.4㎏と大型の凝灰岩である。平坦部中央部には，敲打痕跡だと考えられる剥離が径10㎝程度の大きさで確認できる。

第16図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑥（１／２）



第17図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑦（１／２）



第18図　旧石器時代～縄文時代早期石器⑧（１／２・１／４）

第２節　調査第２面（弥生時代～近代）の調査（第21図～第29図）

調査第２面（基本層序の第Ⅳ層）の調査では，竪穴住居跡２基・大型土坑１基・土坑群が検出された。調査第２面は旧石器時代～近代までの非常に幅広い年代の遺物が出土した。しかし，第１節で述べたが，旧石器時代～縄文時代早期は調査第２面であり，調査第２面は弥生時代～近代の文化層であると言える。 本節では，いささか時代が前後するが，遺構→遺物の順で記述を進めることとする。

（１）遺　構

■１号竪穴住居跡（ＳＡ１）（第21図・第22図）

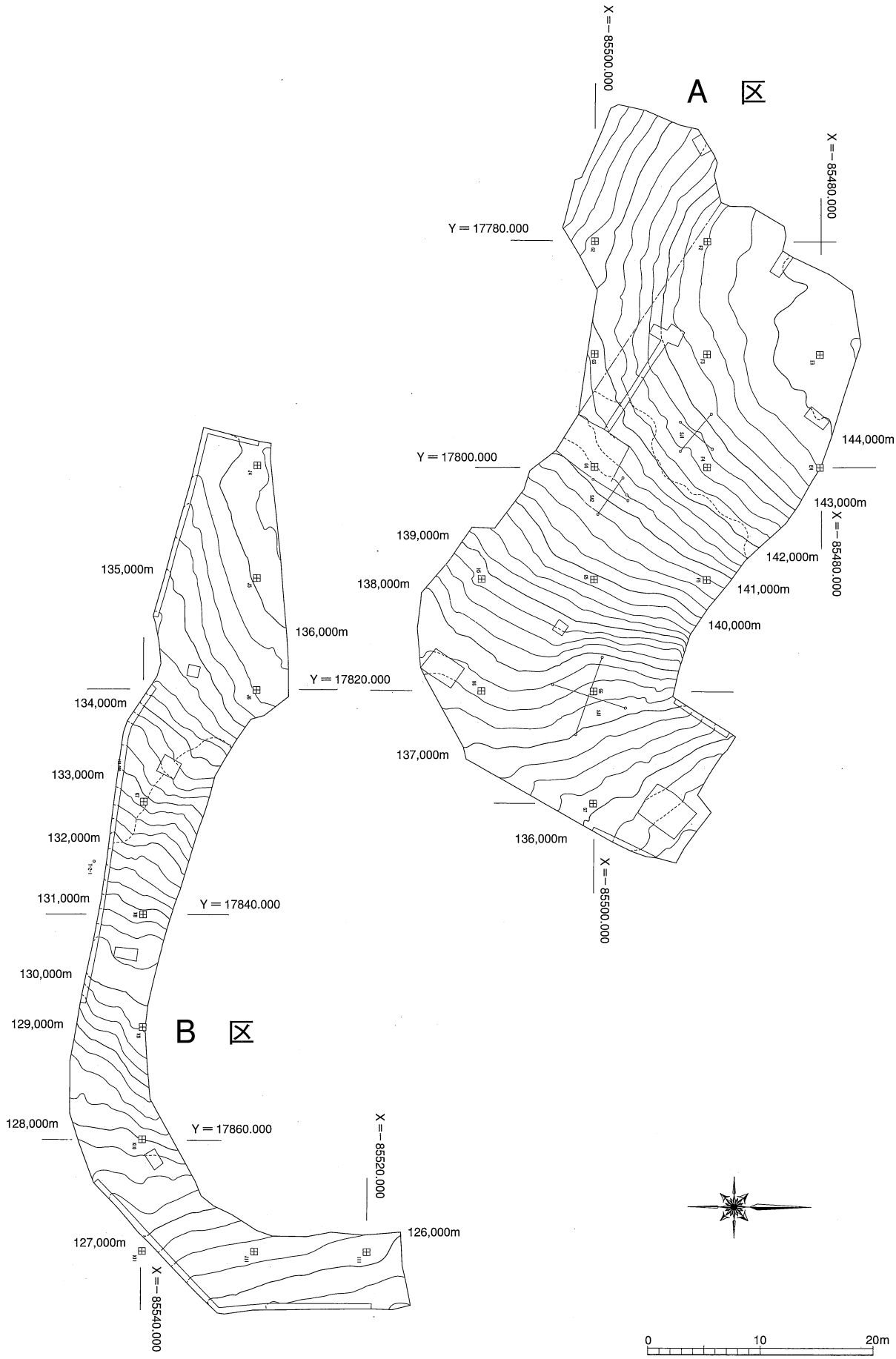
住居跡は，Ｆ５・Ｆ６・Ｇ５・Ｇ６区にまたがっており，急斜面から緩斜面への変換点付近の緩斜面側で検出された。住居跡は，斜面上のため斜面下方が消滅していたり，後世の土坑のため攪乱されたりしていた。検出された住居跡の平面形は，590㎝×500㎝の規模で，本来若干歪んだ長方形に近い形状であったと考えられる。方位はＮ-14°－Ｅである。柱穴は，直径20～30㎝のものが４カ所確認され，対角線上に配列する。西壁中央部には１カ所の突出壁を有する。突出壁は，幅45～60㎝・長さ90㎝で，住居中央部に向かって緩やかに下る。突出壁は，一般的に反対側が対になることが多いが，ここでは１カ所のみの検出であった。消失のために反対側の存在は確認できず，最初から１カ所であったのか不明である。しかし，この住居跡の突出壁は，スロープ状であり，「仕切壁」としての存在よりも，むしろ「入口」などの役割が考えられる。遺物は，弥生土器片が出土した（113～120）。

113は口縁部片である。厚く大きく外反していることから壺の口縁だと考えられる。114～120は胴部片である。114は壺，115～120は甕の胴部だと考えられる。119・120は，胴部下部であり，すぼまりながらもわずかに下部で外反していることから考えて，本遺跡弥生土器分類（p33参照）の甕１類か甕２類であり，中溝式の範疇に入ると考えられる。

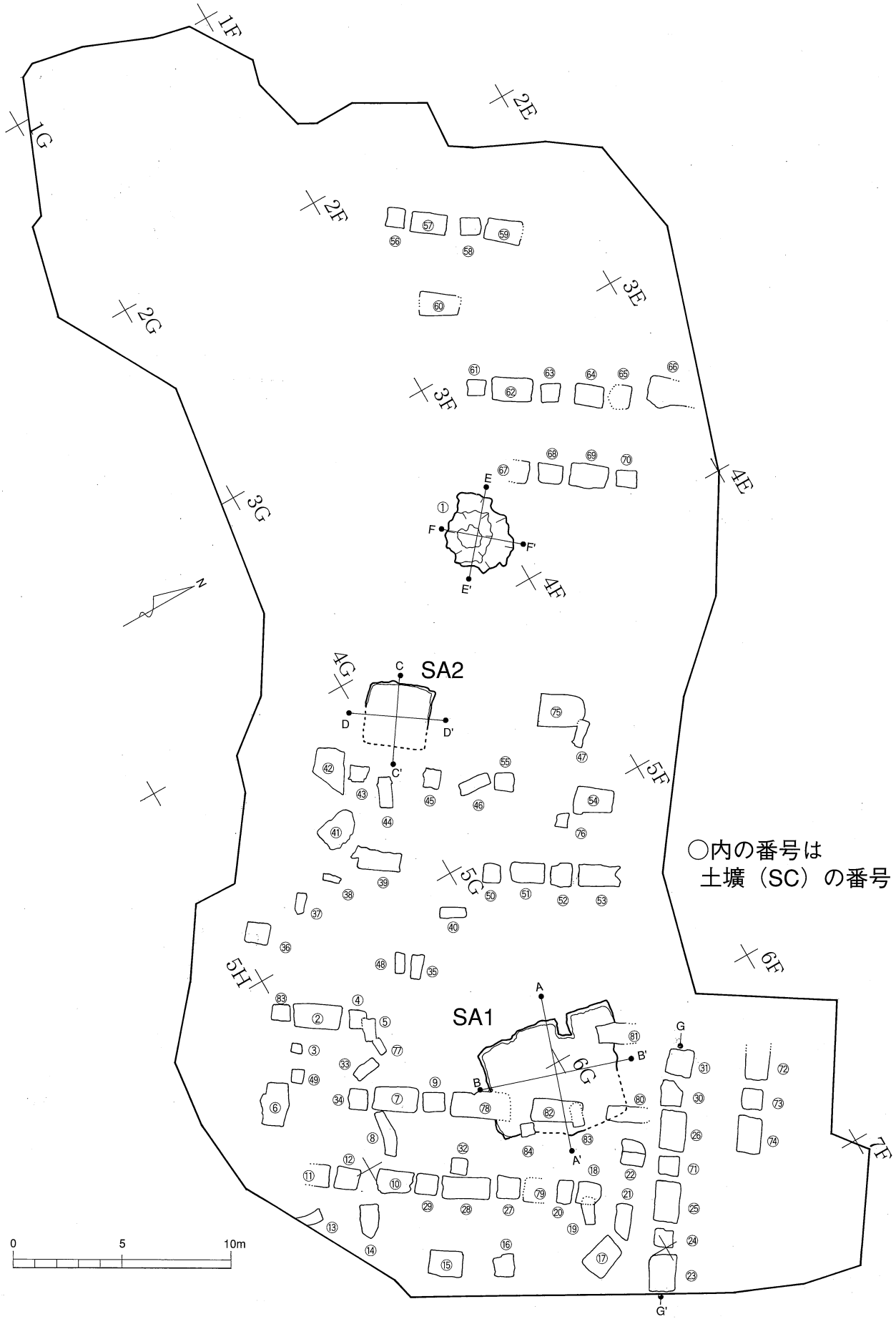
■２号竪穴住居跡（ＳＡ２）（第22図）

Ｆ４区南西隅付近で検出された。住居跡は，ＳＡ１同様急斜面上にあり，大部分が消滅しており，床面付近のみの検出であった。検出された住居跡の平面形は，380㎝×260㎝の規模で，長方形に近い形状であったが，本来正方形に近い形状であったと考えられる。主軸は，全体像がはっきりとしないため不明であるが，Ｎ-35°－Ｅぐらいになりそうである。遺物は弥生土器片が出土した（122）。

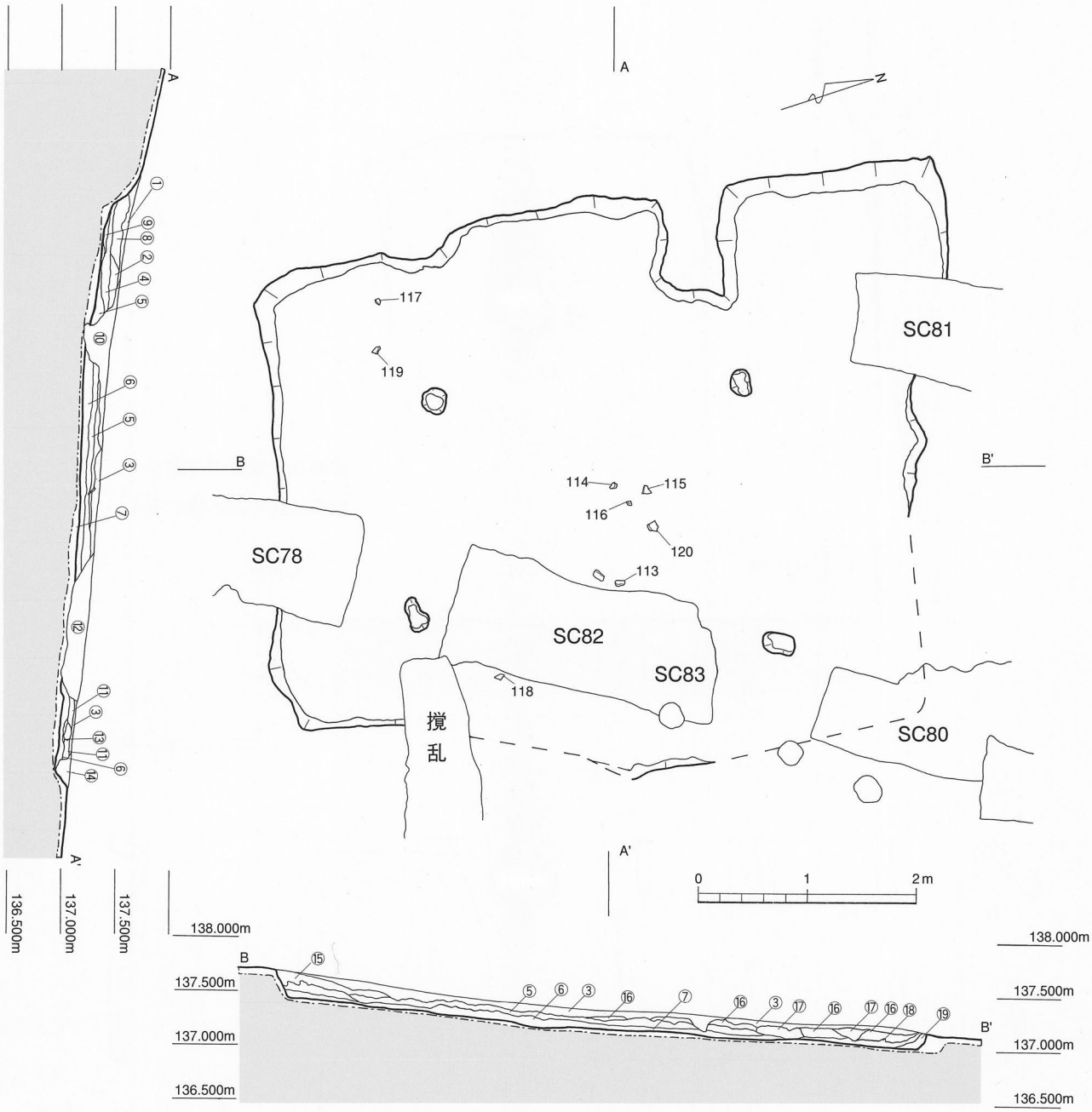
122は，甕の口縁部～胴部片である。住居跡の中央部より破片の状態で多数出土したが，接合すると１つの個体になった。口縁部は，Ｌ字状に屈曲しているが，長く延びている。胴部は大きく膨らみ，口縁部と胴部の最大径はほぼ等しい。本遺跡弥生土器分類（p33参照）の甕１類・甕２類と比べて若干時代が下るが，同じ中溝式土器の範疇に入ると考えられる。



第19図　藏座村遺跡第Ⅳ層上面地形図（1／500）



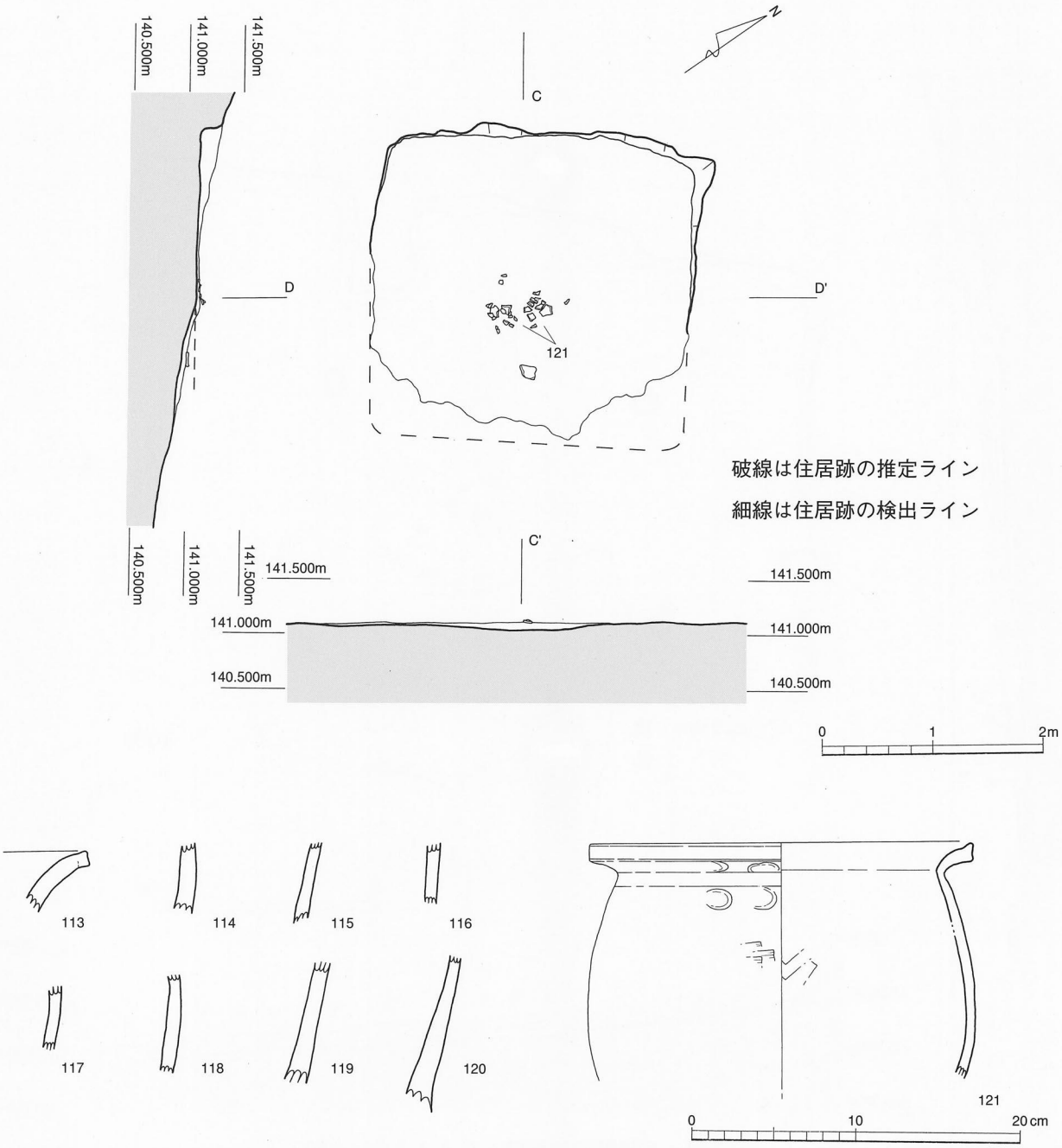
第20図　調査第２面 遺構検出状況図（１／250）



第21図　1号竪穴住居跡（ＳＡ１）（１／60）

【ＳＡ１土層註記】

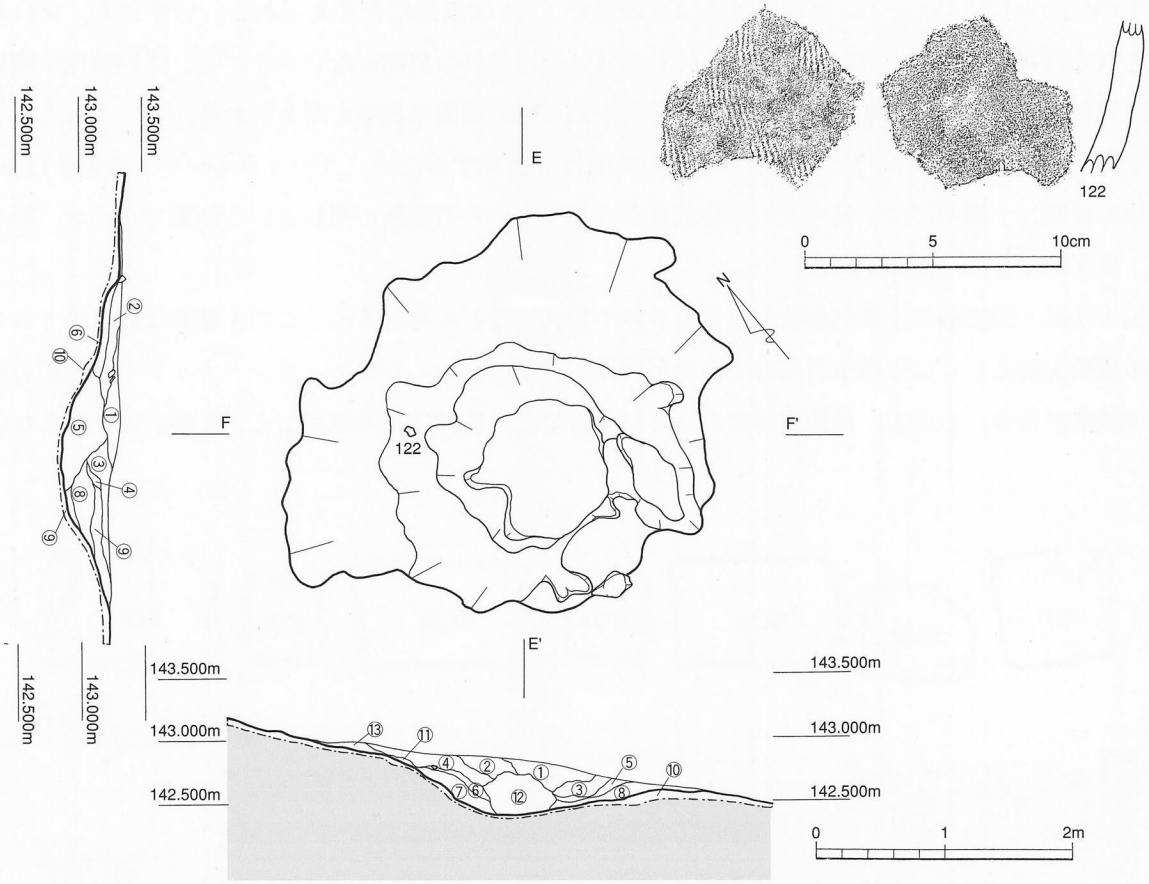
①**暗黒褐色土**…上方からの流入土。全体に径２～３㎜の黄色軽石粒を多く含む（7.5YR3/1）　②**暗褐色土**…わずかに径２～３㎜の黄色軽石粒と径１㎝前後の明褐色土のブロックを含む（2.5Y3/1）　③**黄色火山灰土混暗黒褐色土**…径２～３㎜の黄色軽石粒（アカホヤ火山灰土）を多く含む（5Y3/1）　④**黄色火山灰土混暗褐色土**…ブロック状で硬くしまっている。床面の土だと考えられる。（10YR3/1）　⑤**暗褐色土**…第④層同様，ブロック状で硬くしまっている。（10YR3/3）　⑥**灰黄褐色土**…硬くしまっている。床面の土だと考えられる。（10YR4/2）　⑦**暗灰黄褐色土**…硬くしまっている。第⑥層と似ているが，攪拌された形跡がないことから地山だと考えられる。（2.5Y4/2）　⑧**黒褐色土**…第①層同様上方からの流入土だと考えられる。（7.5YR2/1）　⑨**にぶい黄褐色土**…第⑥層と似ているが，色調が少し明るい。（10YR4/3）　⑩**黄色土混黒色土**…木の根の痕跡だと考えられる。（2.5Y2/1）⑪**黒褐色土**…色調は少し暗めであるが，第⑤層と同様硬くしまっている。（10YR3/1）　⑫**黒色土**…別の遺構（SC68）の埋土である。（10YR2/1）　⑬**黒褐色土**…第⑤層や第⑪層と同様だと考えられるが，少し攪乱している。（10YR2/1）　⑭黒色土…しまりなく柔らかい。第①層・第⑧層同様流入土だと考えられる。（10YR1.7/1）⑮**オリーブ黒色土**…第③層と少し似ているが，黄色軽石粒が少なく黒色が強い。（5Y3/1～5Y2/1）　⑯**黒色土混黄色火山灰土**…黄色火山灰土が主構成土である。（10YR6/8）　⑰**オリーブ黒色土**…第③層・第⑮層と少し似ている。黄色軽石粒が少なく黒色が強い。（5Y2/1～5Y2/2）　⑱**黄褐色土混明褐色土**…黄褐色土と明褐色土のブロックが１：１の割合で入っている。（10YR4/2）　⑲**黒色土**…しまりなく柔らかい。第①層・第⑧層・第⑭層同様流入土だと考えられる。（2.5Y3/1）



第22図　２号竪穴住居跡（ＳＡ２）（１／60）及び竪穴住居跡出土弥生土器（１／４）

■大型土壙（ＳＣ１）（第23図）

Ｆ３区北東側で検出された。240㎝×200㎝程度の不定円形である。最深部は40㎝であり，中心部に灰土らしき灰色系の埋土が入る。埋土に炭化粒を多く含み，灰色系の埋土と併せて考えて火を用いた土壙跡だと考えられる。土壙埋土内より土器片１点（122・第23図左上）が出土した。122は，回転縄文を施した縄文早期土器の胴部片である。しかし，この大型土壙は，埋土に基本層序第Ⅵ層であるアカホヤ火山灰土を含む。このことから考えて，縄文土器片は，後世に流れ込んだ土器であり，遺構の年代を特定し得る遺物ではない。大型土壙は，縄文時代前期以降であるとしか言明することができない。



第23図　大型土壙（SC１）跡（１／60）及び出土土器（１／３）

【大型土壙土層註記】

①**黒褐色土混橙色土**…ブロック状の暗黄褐色土（アカホヤ火山灰土）・黒褐色土・桃灰褐色土から成る人為的な攪乱土。（7.5YR6/6）②**暗黄褐色土混黒褐色土**…主構成土の黒褐色土の中にブロック状の暗黄褐色土（アカホヤ火山灰土）が混じる。（10YR3/3～10YR5/3）③**暗黄褐色土混黒色土**…第②層と似ているが，色調が少し暗い。（2.5Y2/1）④**暗黄灰色土**…全体に径１～３㎜程度の炭化物を多く含む。（2.5Y3/1～4/1）⑤**暗褐色土**…第②層や第③層と似ているが，ブロック状ではなく細粒状で暗黄褐色土が混入している。（10YR3/3）⑥**黒褐色土混暗黄褐色土**…アカホヤ火山灰土の暗黄褐色土を主構成土とする。（5Y4/2）⑦**暗黒褐色土**…全体に径１～３㎜の炭化物を含む。（2.5Y3/2）⑧**黒褐色土**…全体に径１～３㎜の炭化物を多量に含む。第⑦層と類似する。（2.5Y3/1）⑨**暗黒褐色土**…第⑧層と似ているが，炭化物の含有が少ない。（2.5Y4/1）⑩**黒色土**…硬くしまりあり。炭化物も含まず，地山だと考えられる。（5Y2/2）⑪**桃灰褐色土**…大きさが不均等で，しまりなくボロボロしている。灰色の土が混じる。焼土の可能性がある。（5YR6/6）⑫**暗黄褐色土混黒褐色土**…しまりなくボロボロしている。黒褐色土を主構成土とし，２：１の割合で暗黄褐色土（アカホヤ火山灰土）が混じる。（10YR3/3～10YR5/3）⑬**暗桃灰褐色土**…第⑪層と第⑦層が混じった層である。（7.5YR6/6）

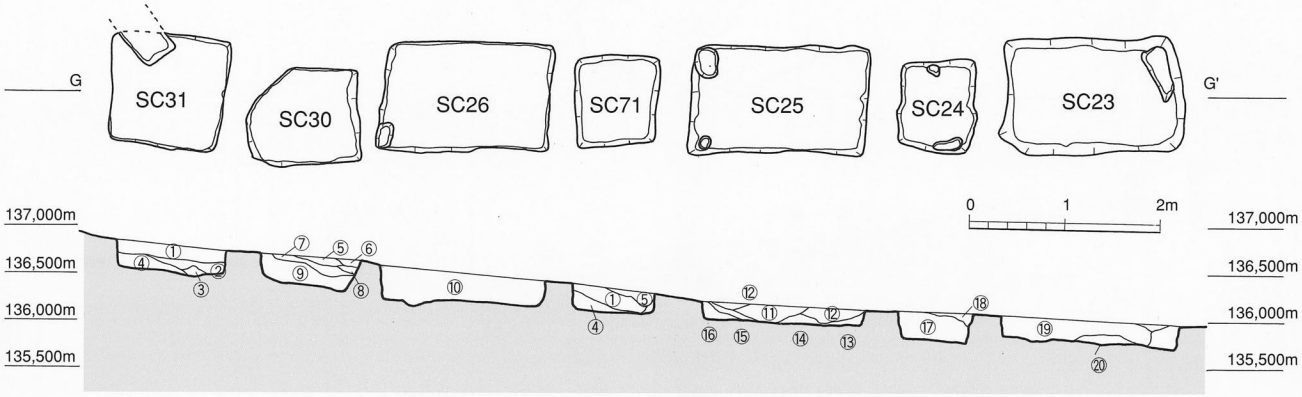
■土壙群（ＳＣ２～ＳＣ84）（第20図・第24図・第25図）

Ａ区全体から無数の土壙群が検出された。確認されただけで83基，未確認のものを含めると100基以上となる。これらの土壙は，Ａ区の傾斜面に沿うような形で，規格されたように整然と格子目状に並ぶ（第20図）。また，土壙には大きく２つの種類がある。１つは，長さ約180㎝・幅100㎝・深さ20㎝前後の長方形タイプ。もう１つは，長さ90㎝・幅90㎝・深さ20㎝前後の方形タイプである。この２つのタイプの土壙が交互に直線的に配置される。土壙に伴う遺物は少なく，ＳＣ25とＳＣ51から煙管の

吸口（123・124）が出土したのみである。123は，ＳＣ51の底部付近から出土した。124は，ＳＣ25の埋土中位から出土した。123は銅製または真鍮製で，124は銀製だと考えられる。いずれも，吸口と雁首を繋ぐ竹製の「羅宇」が残っている。123・124は，補強材の肩部がないタイプで，江戸時代中期以降に位置付けられることから，土壙は，江戸時代中期以降の遺構であると考えられる。

また，土壙内の性格，特に生物遺体有無の可能性を把握するため，リン・カルシウム分析を行った。分析の結果，土壙内には，何らかの生物遺体が存在していた可能性が高いという結果であった。詳しくは，第Ⅳ章第２節に記してある。

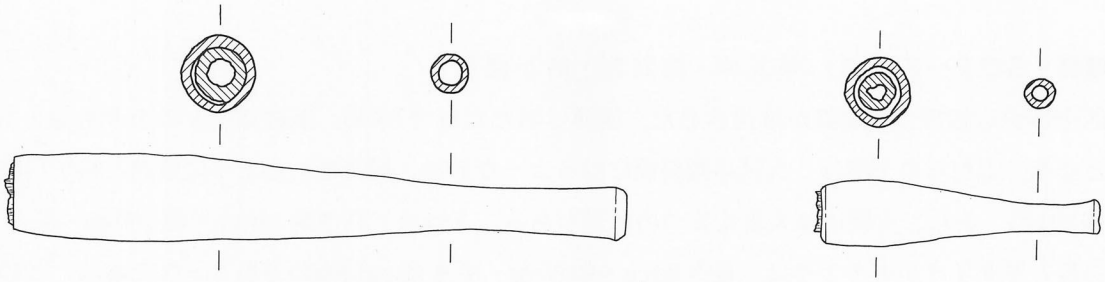
出土状況・調査前の土地利用状況（ミカン畑や杉林）などを考えるに，この土壙群は最近のミカンなどの植樹痕跡もしくは土地改良痕跡である可能性が非常に高い。しかし，リン・カルシウム分析の結果とは齟齬がある。しかも，植樹痕跡であるという仮定には裏付ける証拠がなく，推察の域を越えない。



第24図　土壙群検出状況（SC23～26・SC30～31・SC71）（１／80）

【土壙群の土層註記】

［ＳＣ31］ **①黄褐色土混黒褐色土**…径２㎜前後の黄褐色土（アカホヤ火山灰土）を多量に含む。**②暗褐色土**…径１㎜以下の黄褐色土（アカホヤ火山灰土）を多量に含む。**③黄褐色土**…アカホヤ火山灰土ブロック。**④黒褐色土**…わずかに径１㎜以下の黄褐色土（アカホヤ火山灰土）を含む。［ＳＣ30］ **⑤黒褐色土**…やわらかく含有物がない。表土の流入だと考えられる。**⑥黄褐色土混暗褐色土**…第②層と似ているが，黄褐色土の割合が高い。**⑦黄褐色土混黒褐色土**…第①層と同じ。**⑧暗褐色土**…第②層と同じ。**⑨黒褐色土**…第④層と同じ。［ＳＣ26］ **⑩黄褐色土混黒褐色土**…第①層と同じ。［ＳＣ25］ **⑪黄褐色土混黒褐色土**…第①層と同じ。**⑫黒褐色土**…第④層と同じ。**⑬黄褐色ブロック混黒褐色土**…径７㎝前後の大きな黄褐色土（アカホヤ火山灰土）ブロックを多量に含む。煙管が出土したのはこの層。**⑭黒褐色土**…第④層と同じ。**⑮暗黄褐色土**…径１㎜前後の黄褐色土（アカホヤ火山灰土）の細粒を多量に含む。**⑯黒褐色土**…径１㎜前後の黄褐色土（アカホヤ火山灰土）の細粒をわずかに含む。［ＳＣ24］ **⑰黒褐色土**…第④層と同じ。**⑱褐色土ブロック混黒褐色土**…径２㎝前後の褐色土ブロックを多量に含む。基本層序の第Ⅲ層だと思われる。［ＳＣ23］ **⑲黄褐色土混黒褐色土**…第①層と同じ。**⑳黒桃灰褐色土**…径１～３㎜前後の黄褐色土（アカホヤ火山灰土）の細粒を多量に含む。桃色系が強いのは焼土の可能性がある。



第25図　土壙群出土遺物（１／１）

（２）遺　物（第26図～第29図・125～187）

■弥生土器（第26図～第28図・125～184）

弥生時代中期～後期に位置づけられる土器が多数出土した。本遺跡における弥生土器は，細片や少数のため難しいものもあるが，器種・器形・文様・部位などによる分類が可能である。ここでは，器種と部位を主な着眼点として，第１類～第10類の分類を行った。ここでは，分類の基準と根拠を示し，若干の説明を行う。なお，個々の詳細な情報については，後出の観察表（ｐ51～ｐ54）に記している。

弥生土器　第１類（125～134）

甕Ａ類　口縁が斜方向に折れて外反し，口縁下部に１条の刻目突帯をもつタイプ。

口唇部は，丁寧なナデによって，平坦もしくは凹面状にくぼむ。胴部は大きく２つのタイプがある。（ａ）一度膨らんで緩やかにすぼんでいくタイプ（125・126）と，（ｂ）口縁部から底部にかけて膨らまず緩やかにすぼんでいくタイプ（127・128・129）がある。刻目は，いずれも縦位であるが，大きく端正なもの（123・124・132）・細かく端正なもの（127・129・132・133）・細かく不端正なもの（128・130・131）がある。「中溝式」の範疇に入ると考えられる。

弥生土器　第２類（135～139）

甕Ｂ類。口縁が斜方向に折れて外反し，口縁下部に突帯をもたないタイプ。

口唇部は，丁寧なナデによって，平坦もしくは凹線状にくぼむ。胴部は，全体に細かいハケ目を施し，口縁部から底部にかけて膨らまず緩やかにすぼんでいく形態である。底部は，若干張り出しており，上げ底（139）と平底（135）の２タイプがある。突帯をもたないが，器形などから「中溝式」の範疇に入ると考えられる。

弥生土器　第３類（140）

甕Ｃ類　「く」の字口縁で，肩部に２条の刻目のない突帯をもつタイプ。１点のみの出土である。

弥生土器　第４類（141～151）

特定できない甕の口縁部片を一括して扱う。

（ａ）短く強く外反するタイプ（141～145）。

141～145の口唇部は，丁寧なナデによって，平坦もしくは凹面状にくぼむ。胴部と口縁部の境に明瞭な稜線をもつ。甕Ａ類・甕Ｂ類の口縁部だと考えられる。

（ｂ）緩やかに外反するタイプ（146～148）。

146～148は，緩やかに外反する口縁部である。４ａ類のように胴部と口縁部の境に明瞭な稜線をもたない。同じく甕Ａ類・甕Ｂ類の口縁部だと考えられる。

（ｃ）明確な稜線をもたず，Ｓ字を描くように外反するタイプ。（149）

149は，大きくのび，緩やかに外反する口縁部である。外面に丁寧なハケ目を施している。他の口縁部と様相が異なる。

（ｄ）口縁径の小さく短いタイプ（150・151）。

弥生土器　第５類（152～160）

特定できない甕の胴部片を一括して扱う。さらに２つに細分される。

（ａ）多条突帯文をもつタイプ。おそらく甕Ｃ類か壺の胴部片である。（152～156）

156は，他に比べて突帯の大きさが大きい。他系統の土器が想定される。

（ｂ）突帯文をもたないタイプ。おそらく甕Ｂ類の胴部片である。（157～159）

157は，胴部下半であり，底部にむかってわずかに外反しながらもすぼまっていくタイプである。おそらく甕Ｂ類の胴部であろう。

弥生土器　第６類（160～174）

特定できない甕の底部片を一括して扱う。さらに４つに細分される。

（ａ）外反するもの（160～164）。

160～162は上底で，163・164は平底である。おそらく甕Ａ類か甕Ｂ類の底部である。

（ｂ）僅かに外反するもの（165・166）。

165・166はともに平底である。おそらく甕Ａ～Ｃ類の底部である。

（ｃ）外反しないもの（167～173）。

167～173は，小さい底径から大きく開きながら直線的に立ち上がる。おそらく甕Ｃ類か壺の底部である。

（ｄ）脚台状になるもの（174）。

174は，底径が小さく，わずかに内湾しながら立ち上がる。おそらく鉢の底部だと考えられる。

弥生土器　第７類（175～177）

短頸壺である。

175・176は，直立気味に口縁が立ち上がる。175は，外反気味に口縁が立ち上がる。いずれも，口縁部外面には丁寧なハケ目を施す。

弥生土器　第８類（178～180）

広口壺である。

178は，胴部中位が最大径の広口壺である。口縁部は斜方向にのびた後に水平に広がる。底部は平底である。179は，円形浮文をもつ口縁部片である。形状は，178同様，斜方向にのびた後に水平に広がる。

弥生土器　第９類（181・182）

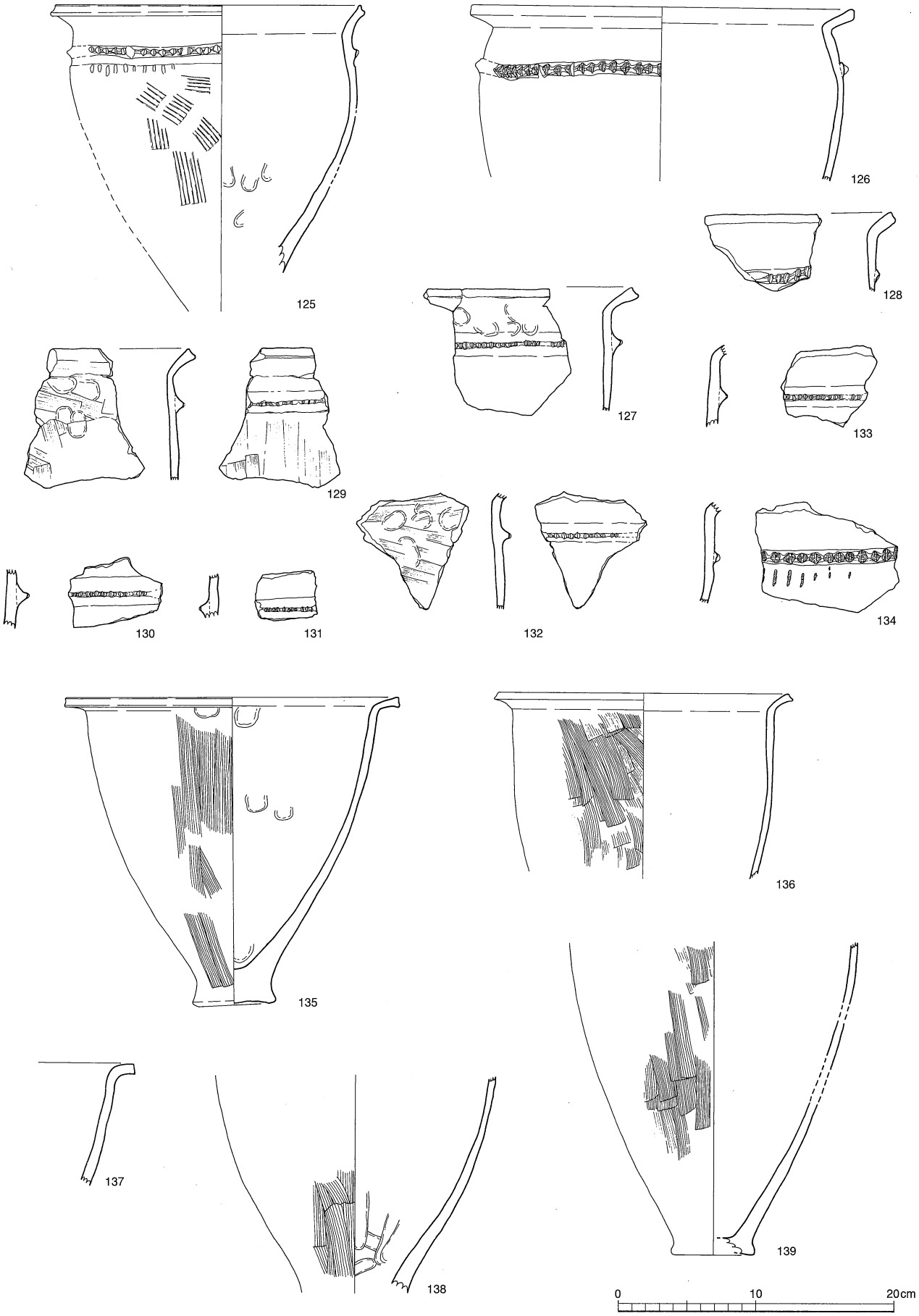
二重口縁壺である。

181は，短くわずかに外反する一次口縁に，肩部が張り，直行気味の二次口縁をもつ。口縁外面には，若干粗雑であるが，はっきりとした１条の櫛描波状文を施す。182は，181同様一次口縁から肩部のプロポーションと１条の櫛描波状文をもつが，二次口縁の角度が若干直立気味である。

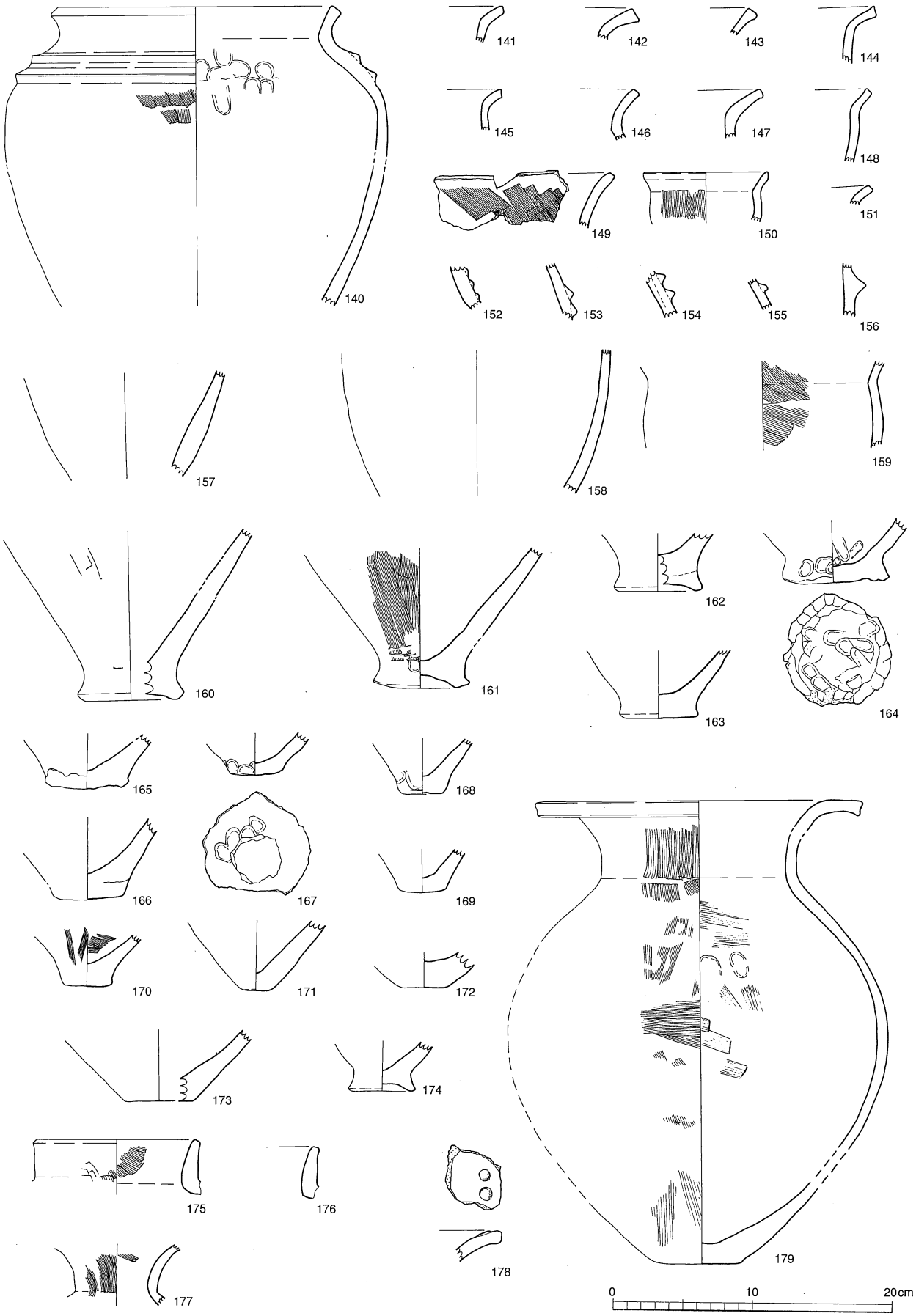
弥生土器　第10類（183・184）

その他の器種を一括して扱う。（高坏・ミニチュア土器）

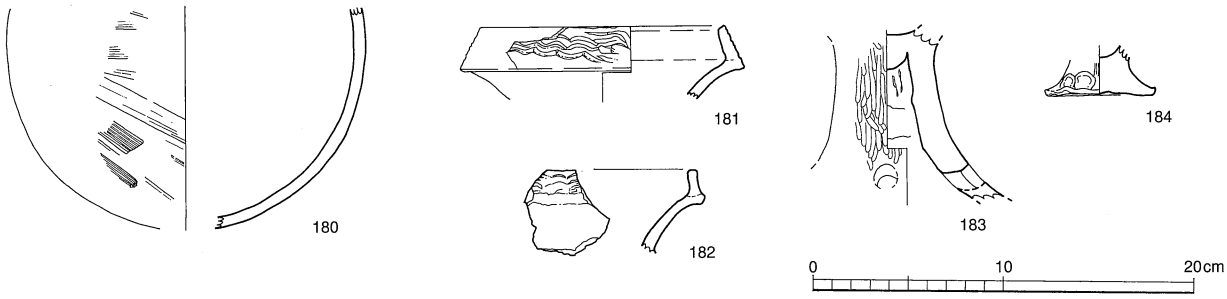
183は高坏の脚部である。直線的な受部から脚部にかけて緩やかに広がる。外面全体にはミガキが施されている。脚部には，径１㎝程の円形透かしが２カ所確認できる。透かしの間隔から，本来三方透かしであったと考えられる。受部の面積は広く，一部残る坏の底部が平坦であることから，坏部の形状はコップ状であった可能性がある。



第26図　弥生時代土器①（１／４）



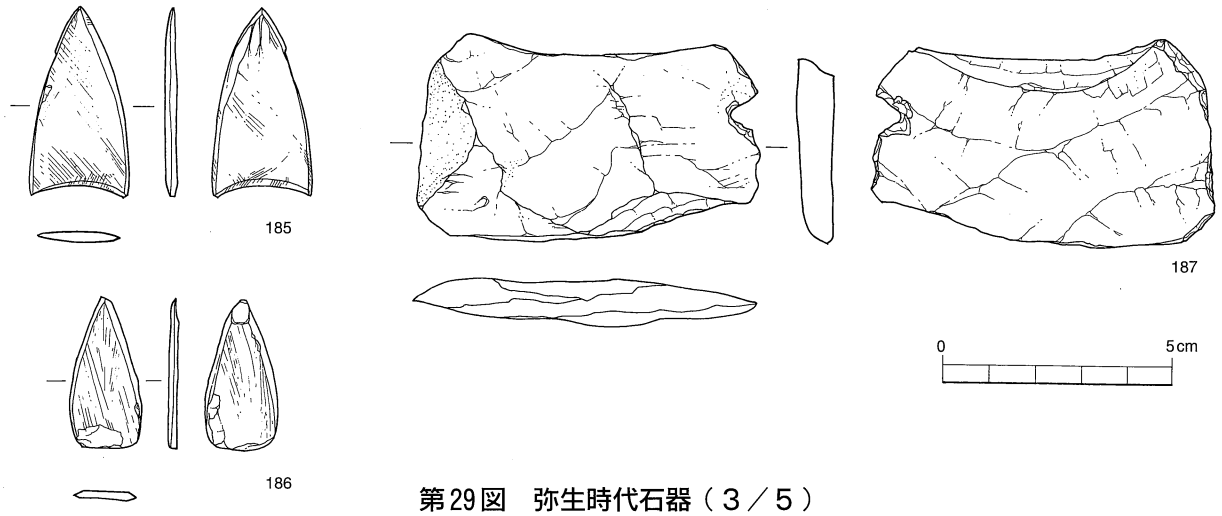
第27図　弥生時代土器②（１／４）



第28図　弥生時代土器③（１／４）

■石器（第27図・185～187）

185・186は，頁岩製の磨製石鏃である。185の基部は平基であり，186の基部は凹基である。187は，ホルンフェルス製打製石庖丁の破片だと考えられる。半分近く欠損しているが，右側に穿孔をもつ。本来長方形に近い形状であったと考えられる。



第29図　弥生時代石器（３／５）

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　藏座村遺跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

九州地方川南町市域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、霧島など多くの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層が検出された藏座村遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、Ａ区深掘トレンチおよびＢ区南壁の２地点である。

２．土層の層序

（１）Ａ区深掘トレンチ

Ａ区深掘トレンチでは、下位より暗灰色土（層厚10㎝以上）、暗灰色土をブロック状に含む灰褐色土（層厚14㎝）、桃褐色土（層厚21㎝）、灰褐色土（層厚12㎝）、桃褐色土（層厚10㎝）が認められる。これらの土層は側方への連続が良くなく、別の土層をブロック状に含む部分もあることから、地すべりなどの斜面堆積物の可能性が高いと思われる。さらにその上位には、下位より亜角礫混じり灰褐色土（層厚９㎝，角礫の最大径24㎜）、暗灰褐色土（層厚９㎝）、黒褐色土（層厚15㎝）が認められる（図１）。

（２）Ｂ区南壁

Ｂ区南壁では、下位より褐色土（層厚５㎝以上）、暗褐色土（層厚10㎝）、若干色調が明るい黒褐色土（層厚12㎝）、黒褐色土（層厚16㎝）、黒色土（層厚16㎝）、黒褐色土（層厚５㎝）、橙色細粒火山灰層をブロック状に含む橙褐色土（層厚13㎝）、橙色細粒火山灰混じり黒褐色土（層厚10㎝）、黒褐色土（層厚13㎝）、褐色土粒子混じり暗褐色土（層厚15㎝）、炭化物混じり暗褐色土（層厚12㎝）、暗褐色土（層厚13㎝）が認められる（図２）。

３．テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

Ａ区深掘トレンチおよびＢ区南壁において、基本的に厚さ５㎝ごとに採取された試料のうち、５㎝おきの試料25点を対象にテフラ検出成分析を行い、示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

１）試料15gを秤量。

２）超音波洗浄により泥分を除去。

3）80°Cで恒温乾燥。

4）分析篩により、1/4-1/8㎜の粒子を篩別。

5）実体顕微鏡によりテフラ粒子の特徴や量を観察。

（2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。A区深掘トレンチでは、軽石やスコリア（色調が黒っぽい軽石）は検出されなかった。一方、火山ガラスは、試料17以上の試料から検出された。試料17から試料9にかけては、透明のバブル型（平板状）ガラスが、ごく少量ずつ含まれている。試料7以上からは、バブル型や軽石型ガラスが比較的多く検出される。試料5より上位の試料には、透明なバブル型のほかに、ごく少量の淡褐色バブル型ガラスも認められる。

B区南壁では、試料17に細粒の白色軽石（最大径1.1㎜）がごく少量含まれている。試料12以上からは、細粒の暗褐色スコリアが検出され、とくに試料12から試料6にかけて、比較的多くのスコリア（最大径1.1㎜）が認められる。火山ガラスは、いずれの試料からも検出される。試料16にとくに多く含まれており、その形態は、バブル型や淡褐色である。これらのことから、この地点では試料16付近と試料12付近にテフラの降灰層準があると考えられる。

4．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

示標テフラとの同定精度を向上させるために、A区深掘トレンチおよびB区南壁から採取された試料のうち、3点について温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率の測定を行うことになった。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。

A区深掘トレンチの試料17に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.496-1.498である。重鉱物としては、斜方輝石がごくわずかに含まれる程度である。また、試料11に含まれる火山ガラスの屈折率（n）も、1.496-1.498である。重鉱物としては、やはり斜方輝石がごくわずかに含まれる程度である。

B区南壁の試料12に含まれるスコリアの火山ガラスについては、屈折率を測定することができなかった。ただし、試料中に含まれるバブル型ガラスの火山ガラスの屈折率（n）は、1.509-1.512である。また、重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率（γ）は、1.705-1.710である。

5．考察－示標テフラとの同定とその層位について

本遺跡で認められた地層のうち、試料18から10については、前述のように地すべりなど斜面堆積物の可能性が考えられる。この土層中に含まれる火山ガラスについては、その形態や色調さらに屈折率などから、9～9.5万年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界葛原テフラ（K-Tz，Nagaoka，1988，町田ほか，1983，Machida，1999）に由来すると考えられる。その上位の試料7に含まれる火山ガラスについ

ては、淡褐色のバブル型ガラスがほとんど認められないことから、その特徴から約2.4～2.5万年前*1に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，池田ほか，1995）と考えられる。ただし、その堆積層準を示すようなとくに顕著なテフラの濃集層準は認められなかった。これらのことを合わせて考慮すると、地すべりなどにより移動した土層は、K-Tzを含む土層であり、その層位は上位の土層が浸食により失われていない限り、ATより上位でK-Ahより下位にあるものと思われる。

B区南壁の試料16付近に降灰層準があると考えられるテフラについては、層相や火山ガラスの特徴などから、約6,300年前*1に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に同定される。また、試料12付近に降灰層準があるテフラについては、スコリアの特徴や斜方輝石の屈折率などから、10～13世紀に霧島火山群高千穂火山から噴出した高原スコリア（THS，井ノ上，1988，早田，1997*2）と考えられる。

6．小結

藏座村遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、鬼界葛原テフラ（K-Tz，約9～9.5万年前、姶良Tn火山灰（AT，2.4～2.5万年前*1）、鬼界アカホヤ火山灰（約6,300年前*1）、高原スコリア（THS，10～13世紀）などの示標テフラを検出することができた。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代.

*2　早田（1997）では「Ot5」と記載されているが，校正上の誤りがあり，正確にはOt6である.

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定ーテフロクロノロジーの基礎的研究．第　四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法ー研究対象別分析法」，　p.138-148.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による１４Ｃ年代．第四紀研究，34，p.377-379.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-41.

Machida，H.（1999）Quaternary widespread tehra catalog in and around Japan:recentprogress.
Quat. Res. 38，p.194-201.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰ー姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰．第四紀研究，　17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・長岡信治（1983）広域テフラによる南関東と南九州の後期更新世海成段丘の対比と編　年．日本第四紀学会講演要旨集，no.13，p.45-46．

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79-83．

Nagaoka, S. (1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geogr.Rept.Tokyo Metropol.Univ., 23, p.49-122.

早田　勉（1997）風土と自然環境．宮崎県史通史編，p.3-77．

表1　テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
A区深掘トレンチ	1	—	—	—	++	bw〉pm	透明，淡褐
	3	—	—	—	++	bw〉pm	透明〉淡褐
	5	—	—	—	++	bw〉pm	透明〉淡褐
	7	—	—	—	++	bw〉pm	透明
	9	—	—	—	+	bw	透明
	11	—	—	—	+	bw	透明
	13	—	—	—	+	bw	透明
	15	—	—	—	+	bw	透明
	17	—	—	—	+	bw	透明
	19	—	—	—	—	—	—
B区南壁	2	+	暗褐	1.1	++	bw〉pm	透明，淡褐
	4	+	暗褐	0.8	++	bw〉pm	透明，淡褐
	6	++	暗褐	1.1	++	bw〉pm	透明，淡褐
	8	++	暗褐	1.1	++	bw〉pm	透明，淡褐
	10	++	暗褐	1.0	++	bw〉pm	透明，淡褐
	12	++	暗褐	1.1	++	bw〉pm	透明，淡褐
	14	—	—	—	+++	bw〉pm	透明，淡褐
	16	—	—	—	++++	bw〉pm	透明，淡褐
	17	+	白	1.1	++	bw〉pm	透明〉淡褐
	18	—	—	—	++	bw〉pm	透明〉淡褐
	20	—	—	—	++	bw〉pm	透明
	22	—	—	—	++	bw〉pm	透明
	24	—	—	—	++	bw〉pm	透明
	26	—	—	—	++	bw〉pm	透明
	28	—	—	—	++	bw〉pm	透明

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，—：認められない．最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型

表2　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）	重鉱物	斜方輝石（γ）
A区深掘トレンチ	11	1.496-1.498	(opx)	-
	17	1.496-1.498	(opx)	-
B区南壁	12	1.509-1.512	opx〉cpx	1.705-1.710

屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石．()は，量が少ないことを示す．

第２節　藏座村遺跡におけるリン・カルシウム分析

株式会社 古環境研究所

１．はじめに

藏座村遺跡の発掘調査では、用途不明の土坑が多数検出された。ここでは、土坑の性格を確認することを目的としてリン・カルシウム分析を行った。

２．試料

分析試料は、SC-71、SC-72、SC-73、SC-74、遺構外などから採取された計21点である。試料の詳細を図１に示す。

３．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

１）試料を絶乾（105℃・24時間）

２）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕

３）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/　でプレスして錠剤試料を作成

４）測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

Ｘ線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、Ｘ線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

４．分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表１に示し、リン酸（P_2O_5）とカルシウム（CaO）の含量を図１に示す。

５．考察

土壌中に含まれるリン酸やカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は通常0.1～0.5%程度、耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺構外の試料など）との対比を行う必要がある。なお、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して水に難溶性の化合物となるため、水の作用により流出することは考えにくい（竹追、1993）。

分析の結果、土坑埋土のリン酸含量は、SC-71では0.65～1.75%（平均1.12%）、SC-72では0.83～0.86%（平均0.85%）、SC-73では1.07～1.37%（平均1.22%）、SC-74では0.81～1.24%（平均1.02%）であり、比較試料として採取された遺構外（遺構検出面）の0.42%、土坑底（地山）の0.46～0.56%（平均0.51%）と比較して明らかに高い値である。とくに、SC-71東部の下層では1.75%とかなり高い値であり、比較試料の３倍以上にもなっている。

カルシウム含量は、比較試料と同程度の試料が多いが、SC-71中央部の下層と最下層では2.74%と

2.02%、SC-73中央部の下層では2.85%とかなり高い値であり、比較試料の0.44～0.97%と比較して２倍以上にもなっている。リン酸含量とカルシウム含量の間には明瞭な比例関係は認められないが、カルシウムは一般に溶解性が大きいことから（竹追、1993)、土壌中でカルシウムが拡散・移動した可能性が考えられる。

以上のことから、藏座村遺跡で検出された土坑内には、リン酸やカルシウムを多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられる。

文献

竹追紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法２，研究対象別分析法．東京大学出版会，p.38-45.

表１　宮崎県、蔵座村遺跡における蛍光Ｘ線分析結果

単位：wt(%)

原子No.	化学式	地点・試料	SC-71										
			中央部			東部		西部		南部		北部	
			上層	下層	最下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
11	Na_2O		0.75	0.54	0.52	0.56	0.46	0.52	0.44	0.50	0.61	0.56	0.54
12	MgO		0.60	0.65	0.87	0.60	0.48	0.65	0.57	0.54	0.68	0.57	0.48
13	Al_2O_3		25.90	22.73	26.25	23.92	23.89	25.40	24.77	24.23	24.21	26.32	23.98
14	SiO_2		55.59	57.41	54.02	58.52	58.29	56.92	58.29	57.78	57.16	56.43	58.44
15	P_2O_5		1.49	1.19	0.65	0.89	1.75	1.02	0.96	1.30	1.15	0.90	1.02
16	SO_3		0.90	0.70	0.36	1.18	0.80	1.11	0.95	1.03	0.76	1.08	0.83
19	K_2O		0.85	0.77	1.04	0.73	0.67	0.75	0.73	0.77	0.83	0.79	0.74
20	CaO		0.77	2.74	2.02	0.52	0.96	0.64	0.67	0.64	1.30	0.56	1.17
22	TiO_2		1.61	1.62	1.69	1.61	1.51	1.62	1.51	1.59	1.56	1.58	1.58
23	V_2O_5		0.03	0.05	0.05	0.04	0.03	0.04	0.04	0.05	0.04	0.03	0.05
25	MnO		0.33	0.37	0.35	0.32	0.37	0.36	0.32	0.37	0.37	0.32	0.33
26	Fe_2O_3		11.04	11.05	12.04	10.90	10.60	10.78	10.55	11.02	11.15	10.69	10.62
35	Br		0.09	0.12	0.10	0.14	0.12	0.12	0.12	0.13	0.11	0.10	0.12
40	ZrO_2		0.07	0.07	0.05	0.07	0.06	0.07	0.08	0.06	0.07	0.06	0.08

単位：wt(%)

原子No.	化学式	地点・試料	SC-72		SC-73		SC-74		比較試料			
			中央部		中央部		中央部		遺構外		SC-71	SC-20
			上層	下層	上層	下層	上層	下層	検出面	表土	底(地山)	底(地山)
11	Na_2O		0.77	0.79	0.43	0.54	0.59	0.69	0.90	0.44	0.43	0.24
12	MgO		0.65	0.65	0.63	0.74	0.55	0.40	0.55	0.75	1.31	1.39
13	Al_2O_3		24.94	24.98	24.96	23.83	24.68	24.06	26.79	25.96	28.99	29.93
14	SiO_2		56.04	57.19	57.37	56.42	56.30	58.26	55.63	52.68	50.93	50.83
15	P_2O_5		0.86	0.83	1.37	1.07	0.81	1.24	0.42	1.27	0.46	0.56
16	SO_3		0.60	1.03	1.00	0.77	0.72	1.00	1.56	0.64	0.33	0.44
19	K_2O		0.80	0.76	0.67	0.71	0.85	0.75	0.91	0.85	1.34	1.26
20	CaO		1.07	0.60	0.67	2.85	1.52	0.67	0.64	0.97	0.94	0.44
22	TiO_2		1.81	1.66	1.59	1.61	1.75	1.56	1.57	2.22	1.72	1.71
23	V_2O_5		0.06	0.04	0.05	0.04	0.04	0.03	0.05	0.05	0.07	0.08
25	MnO		0.29	0.31	0.34	0.40	0.33	0.30	0.28	0.25	0.35	0.34
26	Fe_2O_3		11.94	10.98	10.73	10.84	11.67	10.87	10.53	13.77	13.04	12.68
35	Br		0.09	0.11	0.13	0.13	0.10	0.10	0.09	0.06	0.06	0.05
40	ZrO_2		0.06	0.07	0.07	0.06	0.06	0.07	0.08	0.07	0.04	0.05

第Ⅴ章　まとめ

藏座村遺跡は，旧石器～近現代にかけての遺跡である。遺跡は，傾斜地に位置し，地滑りなどによって不安定な堆積状況を呈し，検出された遺構・遺物の年代的な位置付けが困難であった。ここでは，遺構・遺物の検討を行いつつ，調査の成果や課題についての若干の整理を行うこととする。

1　旧石器時代の遺物

前述しているように，旧石器時代に属すると考えられる遺物と縄文時代早期に属すると考えられる遺物・遺構が混同してアカホヤ火山灰の二次堆積層（本遺跡基本層序の第Ⅵ層）下の調査第１面（暗褐色土層・本遺跡基本層序の第Ⅶ層）中より出土した。この状況で旧石器時代に属すると考えられる遺構・遺物は，ナイフ形石器・剥片・細石刃・細石刃核の遺物のみである。

ナイフ形石器は３点出土した（37～39）。３点のナイフ形石器は，いずれも頁岩製縦長剥片を素材とし，比較的細やかなリタッチにより整形されている共通点をもち，時間的一括性は高いと考えられる。厳密な時期比定は難しいが，姶良Ｔｎ火山灰（以下「ＡＴ」とする）下位に位置付けられる駒方古屋遺跡第１地点（大分県大野郡大野町・文献１）や百枝遺跡Ｃ地区第Ⅲ文化層（大分県大野郡三重町・文献２），ＡＴ上位に位置付けられる片田遺跡（宮崎県延岡市・文献３）と形態的に類似しており，ＡＴ降灰前後あたりの時期が考えられる。

剥片（43）は，頁岩製横長剥片である。形態的特徴からみて，瀬戸内技法の翼状剥片に類似しており，瀬戸内技法に関連するものであると考えられる。瀬戸内技法に関連する剥片だとすれば，ＡＴ上位に位置付けられ，ナイフ形石器とは時期が異なるであろう。なお，瀬戸内技法関連の技法は，宮崎県内でも確認されている（文献４）。藏座村遺跡周辺では，表採資料として通山遺跡（児湯郡川南町大字平田・文献５）・水谷原遺跡（児湯郡高鍋町・文献５），調査例として持田中尾遺跡（児湯郡高鍋町・文献６）などが挙げられる。細石刃核は２点出土した（41・42）。41は野岳休場型・42は船野型細石刃核である。

2　縄文時代早期の遺構・遺物

第Ⅶ層中より，縄文時代早期の遺構・遺物が検出された。

（１）礫群と集石遺構の前後関係

遺構としては，集石遺構と礫群が検出された。いずれもＡ区西側に分布し，かなり高い割合で凝灰岩を主構成礫とする共通点をもつ。礫群検出中に礫集中区域を掘り下げると集石遺構であるという状況であり，礫群と集石遺構は，同時期か礫群がわずかに早い時期であると推測できる。更に共通の構成礫・分布域・検出状況から考えて，礫群と集石遺構はほぼ同時期であると考えられる。具体的な論拠に乏しく推測の域をでないが，同時期であるとすれば，礫群は，集石遺構の準備礫及び廃棄礫の「集積」であり，そしてその「集積」が傾斜に沿って散逸したと考えることができる。

礫群と集石遺構は，周辺の多くの遺跡で確認され，前後関係について問題となっている。今回の調査において，この両遺構の前後関係については，検出時状況のみが論拠の拠所であり，推測の域を出ない。

今後，両遺構構成礫の比較分析などにより両遺構の前後関係等が検討できるよう，整理方法・調査方法など検討の余地があり課題として残った。

（２）出土縄文時代早期の土器

調査第１面（第Ⅶ層）及び調査第２面（第Ⅳ層）中より，縄文土器類が出土した。多くは縄文時代早期に属する土器類であり，個数こそ少ないが，貝殻文系（本遺跡の縄文土器第１・２類）・円筒形貝殻条痕文系（本遺跡の縄文土器第３類）・押型文系（本遺跡の縄文土器第４類）・条痕文系（本遺跡の第５類）など様々なヴァリエイションをもつ。

第１類は，同じ縦位の貝殻刺突文であるが，器壁の厚さが異なり，完全な刺突と押引気味の刺突という刺突方法も異なる。吉田式と早い段階の中原式だと考えられ，縄文時代早期前半に位置付けられる。第２類は，貝殻腹縁による刺突文を交叉状に配し，新東晃一氏（文献７）の設定する「下剥峰式土器」の範疇に入る。第２類は，第１類と同じ縄文時代早期に属するが，若干新しい時期に位置付けられる。第３類は，横施文のみの条痕文と横施文と縦施文の複合の条痕文があり，木崎康弘氏（文献８）の設定する「中原式土器」，特に新しい段階のⅣ～Ⅴ式の範疇に入ると考えられる。

第４類は押型文である。東九州における押型文の編年序列は，概ね「川原田式土器」→「稲荷山式土器」→「早水台式土器」→「下菅生Ｂ式土器」→「田村式土器」→「ヤトコロ式土器」→「手向山式土器」である（文献９）。本遺跡では，「稲荷山式土器」・「下菅生Ｂ式土器」・「田村式土器」・「手向山式土器」に型式比定できる土器が出土し，ある程度の時間差があると考えられる。

第５類は，波状口縁をもち，外面が板状工具によって施文された条痕系の土器である。高橋信武氏（文献10）の設定する「轟１式土器」であり，縄文時代早期末に位置付けられている。第６類は「塞ノ神式土器」だと考えられる。

このように，藏座村遺跡では，貝殻文系・円筒形貝殻条痕文系・押型文系・条痕文系と複数の土器系列が混在し複雑な様相を呈しているが，縄文時代早期前半～早期末にかけての範疇には収まると考えられる。層位的把握が困難であったため，各類の共伴関係・編年的序列など不明な点が多い。しかし，各類を検討した結果，ある程度の時間差をもちながらも，部分的には共伴関係をもつと考えられる。

（３） 蛤形剥片石器について

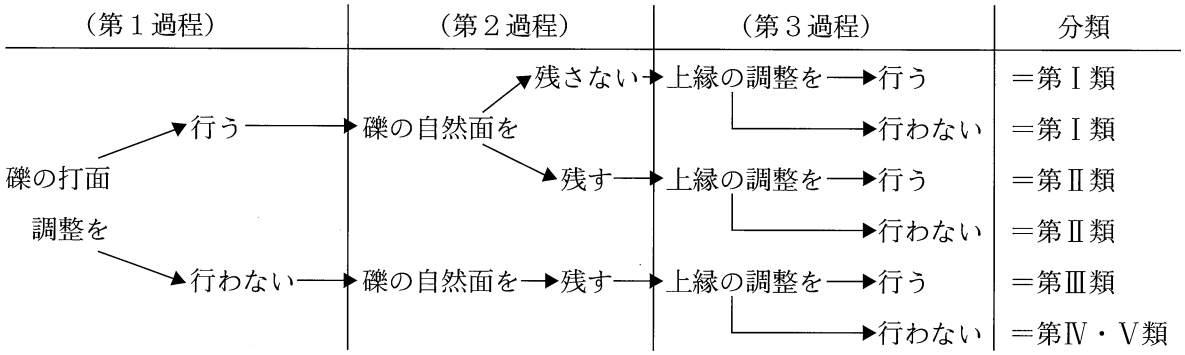
調査第１面（第Ⅶ層）中，礫群中または礫群周辺より縄文時代早期に属する多くの剥片石器が検出された。これらの剥片石器は，幅4.3～8.9㎝（平均5.9㎝）・長さ3.0～5.7㎝（平均4.0㎝），平面楕円形・断面細柳葉形で，蛤のような形態を呈することより本遺跡では「蛤形剥片石器」と呼称することにした。

前述したが，これらは，明確な加工痕をもつものが少なく，石器と認識できないようなものが多い。しかし，①使用痕らしき微細な剥離や磨滅痕が確認できるものは多い。②用いられる石材は，礫群の主構成礫が凝灰岩であることに対し，砂岩・頁岩・ホルンフェルスといった堆積岩の類であり，人為的な選択が介在している。これら①②の事象により，こうした剥片類を積極的に石器として扱うこととする。

本遺跡では，形態によって大きく第Ⅰ類～第Ⅴ類に分類した（ｐ20参照）。一見同じように見えるが，

剥片の作出過程が若干異なるようである。下記にその分類基準を図示しておく。

これら蛤形剥片石器と類似した剥片石器を，宮田栄二氏が「鎌形剥片石器」として取り扱っている。（文献11）。宮田氏は，「鎌形剥片石器」の特徴を「素材は大型から中型の剥片であり，剥片の鋭利な



蛤形剥片石器の分類

直線状の縁辺をそのまま刃部とする。そのため刃部には二次加工は施されない。刃部以外の背縁や側縁部は粗い剥離により整形される。」としている。この特徴と比較して，大きさ・背縁と側部調整の有無など若干の相違点はあるが，類似点は多い。更に，鎌形剥片石器は縄文時代早期に位置付けられているという点も共通する。

機能については，不明であるが，形態・大きさ・刃部のない上縁に調整が施されていることより，削器に近い使用方法が考えられる。しかし，宮田栄二氏は，「鎌形剥片石器」（文献11）において，刃部形態（補強目的の二次加工がない）と他の形態的類似性（縄文時代晩期の石鎌形石器や石庖丁形石器）より，植物性の柔らかい物を対象物としている。蛤形剥片石器において，使用痕と考えられる微細剥離と擦痕は，対象物が硬い物とも柔らかい物とも判じ難く，断言を避けたい。しかし，蛤形剥片石器は，鎌形剥片石器と類似した点が多く，今後綿密な比較検討を重ねていく必要があろう。

また，蛤形剥片石器は，製品と考えられるものばかりで，石核らしき堆積岩系の円礫は確認できなかった。これは，藏座村遺跡が蛤形剥片石器の消費地であり，製作地は別に存在することを示唆するのではなかろうか。

3　弥生時代の遺構・遺物

藏座村遺跡調査第２面の第Ⅳ層中から，竪穴住居跡２軒と弥生時代に属する土器群が検出された。

（１）出土弥生時代土器（特に中型甕）について

藏座村遺跡からは，ある程度時期が纏まった形での土器群が，遺構内外より検出された。

出土量的にみた場合，最も顕著なのが中型甕である。中型甕（藏座村遺跡弥生土器第１類・第２類ほか）は，斜方向に外反する口縁部・凹面状の口唇部・口縁部直下には縦位刻目をもつ１条の突帯（第２類はもたない）・若干張り出す底部を特徴とする。第１類は，中溝遺跡（宮崎県宮崎郡佐土原町・文献12）を指標とするいわゆる「中溝式土器」（文献13・文献14）の範疇に入ると考えられる。

類似する中溝式土器は，周辺の新田原遺跡４号・６号住居跡（児湯郡新富町・文献15），銀代ヶ迫遺跡11号・24号住居跡（児湯郡新富町・文献16），堂地東遺跡５号・７号住居跡（宮崎市・文献17），椎屋形第１遺跡１号住居跡（宮崎市・文献18）などで，良好な遺構一括資料として出土しており，乗畑光

博氏（文献14）によって編年的な考察が行われている。藏座村遺跡出土の中型甕は，刻目突帯をもつ第１類・無突帯の第２類とも，形態的特徴からみて，堂地東５号や新田原４号・６号住居跡などに近いと考えられる。これは桑畑編年の中溝１段階から２段階の古様式（弥生時代中期後半～中期末）にあたる。

出土土器全体の様相は，良好な遺構一括資料が出土しておらず述べることは難しいが，ある程度の傾向が看取できる。遺跡の特徴としては，他の遺跡で共伴している事の多い下城式系甕が存在しないことと，第２類である無突帯甕の存在が挙げられる。これは，堂地東５号や新田原４号・６号と比べて，土器型式の形態的特徴が類似しており時期的には近いのではあるが，中溝式系甕と下城式系甕が比較的早い段階に交替するという現象を示すのではなかろうか。

（２）竪穴住居跡の時期について

竪穴住居跡は２軒検出された。いずれも弥生土器片が出土したが，量的に少なく，良好な一括資料とは言えない。１号竪穴住居跡（ＳＡ１）は，細片ではあるが口縁（113）及び胴部下半（119・120）の形態から，本遺跡弥生土器分類の第１類と第２類に入ると考えられる。よって弥生時代中期後半～中期末の年代が与えられる。２号竪穴住居跡（ＳＡ２）は，１点（121）のみの出土である。口縁及び胴部形態から若干時代が下ると考えられ，弥生時代後期初頭ぐらいの年代が与えられる。

【参考文献】

文献１　別府大学付属博物館1987『駒方古屋遺跡第２次・第３次発掘調査報告書』

文献２　三重町教育委員会1985「百枝遺跡Ｃ地区」『大分県三重町百枝遺跡発掘調査報告書８』

文献３　延岡市教育委員会1990「片田遺跡（概報）」『延岡市文化財調査報告書』第５集

文献４　中・四国旧石器文化談話会1994「資料編　九州地方」『瀬戸内技法とその時代』

文献５　高鍋町教育委員会1982『持田中尾遺跡』

文献６　茂山護・大野寅夫－1977「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第３号　宮崎考古学会

文献７　新東晃一1989「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観１』小学館

文献８　木崎康弘1998「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会

文献９　坂本嘉弘1998「東九州の押型文研究の現状と課題」『九州の押型文土器－論攷編－』九州縄文研究会

文献10　高橋信武1988「轟式土器再考」『考古学雑誌』75-1考古学協会

文献11　宮田栄二1991「鎌形剥片石器」『南九州縄文通信№４』南九州縄文研究会

文献12　石川恒太郎1972『佐土原町中溝遺跡調査報告書』宮崎県道路公社

文献13　田中茂1975「宮崎県出土の丹彩袋状口縁壺形土器について」『研究紀要№３』宮崎県総合博物館

文献14　乗畑光博2000「中溝式土器の検討」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会

文献15　新富町教育委員会1986「新田原遺跡 瀬戸口遺跡 蔵園地下式横穴墓」『新富町文化財調査報告書』第４集

文献16　新富町教育委員会1992「八幡上遺跡 七又木遺跡 銀代ヶ迫遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集

文献17　宮崎県教育委員会1985「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集

文献18　宮崎市教育委員会1996「椎屋形第１遺跡　椎屋形第２遺跡　上の原遺跡」『県営農地保全整備事業時屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

遺物番号	種別	器種部位	器種部位	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
2	縄文土器	深鉢胴部	下層				ナデ・貝殻腹縁による縦位の刺突文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	2㎜程の灰色粒・1㎜以下の乳白色粒を多く含む	
3	縄文土器	深鉢口縁部	下層SI6				貝殻腹縁による押引気味の刺突文	口唇部付近は丁寧なナデ・ナデ	黄灰	暗灰黄	1㎜以下の浅黄色粒と雲母を含む	
4	縄文土器	深鉢口縁部	上層				ナデの後半裁竹管による横・斜方向の刺突文	風化気味・条痕の後ナデ	灰褐	にぶい褐	1㎜以下の乳白色を多く,無色透明光沢粒を少し含む	
5	縄文土器	深鉢胴部	下層G3区				貝殻腹縁による斜方向の刺突文	ナデ・指頭痕あり	橙	灰黄褐	1～2㎜程の乳白色と無色透明光沢粒を含む	
6	縄文土器	深鉢胴部	上層				貝殻腹縁による横方向の刺突文	ナデ	にぶい橙	灰褐	1～2㎜程の乳白色と無色透明光沢粒を含む	
7	縄文土器	深鉢胴部	下層トレンチA				貝殻腹縁による縦・横方向の刺突文	丁寧なナデ・一部指押さえ	にぶい黄橙	灰黄橙	2㎜程の無色透明光沢粒,1㎜程の灰白色と黒色光沢粒を含む	
8	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	下層F3区				貝殻腹縁による横方向の条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	2.5㎜以下の浅灰白色と無色透明光沢粒を含む	
9	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	下層G4区				貝殻腹縁による横方向の条痕文・縦→横の順で貝殻腹縁による条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	3㎜以下の白色と黒色光沢粒,1.5㎜以下の透明光沢粒を含む	
10	縄文土器	深鉢胴部	下層G4区				貝殻腹縁による横方向の条痕文・貝殻腹縁による縦方向の条痕文	丁寧なナデ	浅黄	にぶい黄褐	2㎜以下の浅黄色と灰白色透明粒を多く含む	
11	縄文土器	深鉢胴部	確認トレンチ7内				貝殻腹縁による横方向の条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	5㎜以下の黒褐色粒,3㎜以下の白色と黒色柱状光沢粒,2㎜以下の透明光沢粒を含む	
12	縄文土器	深鉢口縁部	下層SI3付近				横方向の山形押型文	横方向の山形押型文・ナデ	にぶい赤褐	灰褐	2㎜程の赤茶色,0.5㎜以下の無色透明光沢粒を含む	
13	縄文土器	深鉢胴部	下層SI3				山形押型文	ナデ	にぶい赤褐	暗褐	1㎜以下の無色透明光沢粒と浅黄色粒を含む	
14	縄文土器	深鉢胴部	仮－1				菱形押型文	粗いナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	0.5㎜以下の無色透明光沢粒と灰白色粒を含む	
15	縄文土器	深鉢胴部	下層F2区				楕円形押型文	口唇部付近に縦位の短沈線と楕円形押型文	にぶい赤褐	にぶい褐	1㎜以下の灰白を多く,3～4㎜程の灰色と乳白色粒を少し含む	
16	縄文土器	深鉢胴部	仮－2				楕円形押型文	ナデ	にぶい赤褐	灰褐	2.5㎜以下の無色透明光沢粒,1㎜以下の浅橙色粒を含む	
17	縄文土器	深鉢胴部	下層G3区				楕円形押型文	ナデの後に指ナデ・指頭痕あり	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1㎜以下の灰白と褐色粒,4㎜以下の灰色と乳白色粒を含む	
18	縄文土器	深鉢口縁部	上層				ナデ・菱形押型文・口唇部は丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	2㎜程の浅黄色粒,1㎜以下の灰褐色粒を含む	
19	縄文土器	深鉢胴部	下層H4区				菱形押型文	丁寧なナデ	橙	橙	2～3㎜程の浅黄色と灰褐色粒,0.5㎜程の無色透明光沢粒を含む	
20	縄文土器	深鉢胴部	下層G4区				菱形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	2㎜以下の浅黄色粒,1㎜以下の灰褐色と無色透明光沢粒を含む	
21	縄文土器	深鉢胴部	下層G5区				同心円押型文	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	1.5㎜以下の灰白色,浅黄色,雲母粒を含む	
22	縄文土器	深鉢胴部	上層SA-3				菱形押型文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の乳白色粒を多く含む	

第2表　出土土器観察表　①

遺物番号	種別	器種部位	器種部位	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
23	縄文土器	深鉢口縁部	下層E4区				貝殻腹縁による横・縦方向の条痕文・口唇部には刻目	ナデ	灰褐	にぶい赤褐	1～3㎜の灰白色,1.5㎜以下の黒色光沢と無色透明光沢粒を含む	
24	縄文土器	深鉢口縁部	上層				貝殻腹縁による横・斜方向の条痕文・口唇部には刻目・穿孔あり	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	2.5㎜程の灰白色粒,1.5㎜以下の灰褐色粒,0.5㎜以下の無色透明光沢粒を含む	
25	縄文土器	深鉢胴部	上層SA-2				縦・横方向の条痕	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	2㎜以下の乳白色粒・1～6㎜程度のにぶい黒色光沢粒を含む	
26	縄文土器	深鉢胴部	排土中				工具による縦方向の微隆起線状の条痕文・穿孔あり	工具による横方向のナデ	橙	にぶい橙	2㎜以下の灰白色粒を多く,2㎜程の黒色と褐色粒を少し含む	
27	縄文土器	深鉢胴部	下層G6区				貝殻腹縁による縦→横の順での条痕文	工具による横方向のナデ	明赤褐	にぶい褐	3㎜以下の黒色,灰色,乳白色粒を多く含む	
28	縄文土器	深鉢胴部	上層				狭い区画に縦方向の回転縄文	ナデ	暗灰黄	黒	3.5㎜程の暗褐色粒,1.5㎜以下の無色透明と浅黄色粒を含む	内面に煤付着
29	縄文土器	深鉢胴部	下層F2区				斜方向の撚糸文	斜方向の撚糸文・工具によるナデ	にぶい褐	暗褐	2㎜以下の赤橙色と褐色粒,0.5㎜以下の浅黄色粒を含む	
30	縄文土器	深鉢胴部	下層F2区				斜方向の撚糸文	縦・斜方向の撚糸文・工具によるナデ	にぶい赤褐	明赤褐	1㎜程の褐色粒,1㎜以下の無色透明光沢粒を含む	
31	縄文土器	深鉢胴部	下層SI6				斜方向の回転縄文	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2.5㎜程の暗赤褐色粒,0.5㎜以下の浅黄色粒を含む	
32	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	下層E4区				ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	3.5㎜以下の浅黄色,2㎜以下の灰褐色,褐色,無色透明粒を含む	
33	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	下層G4区				ナデ	ナデ	暗褐	にぶい赤褐	2㎜程の灰褐色と浅黄褐色,1㎜以下の無色透明光沢粒を含む	
34	縄文土器	深鉢口縁部～胴部	上層				ナデ	ナデ・指頭痕あり	褐	にぶい黄褐	1～2㎜程の茶褐色,1㎜程の黒色光沢yと無色透明光沢粒を含む	
35	縄文土器	円盤形土製品？	下層G5区			1.25	調整不明	調整不明	にぶい赤褐	にぶい黄橙	3㎜程の乳白色粒を少し,1㎜以下の灰白色粒を多く含む	円盤形を意図して作られたのか磨滅過程でなったのかは不明
36	縄文土器	深鉢底部	表土中		6.0		底部は組織痕あり	指ナデ	にぶい黄橙	褐灰	2㎜程の褐色粒,1㎜以下の浅黄色と無色透明光沢粒を含む	
113	弥生土器	壺口縁部	上層SA-1				ハケ目の後指による縦方向のナデ	横ナデの後ナデ調整	にぶい黄橙	橙	2.5㎜以下の赤褐色粒・灰褐色粒・1㎜以下の無色透明光沢粒を含む	黒変あり
114	弥生土器	甕胴部	上層SA-1				ハケ目	斜方向のナデ	黄褐	にぶい黄	1㎜以下の浅黄色粒・灰褐色粒を含む	
115	弥生土器	甕胴部	上層SA-1				ハケ目	風化によりわかりにくいがナデだと考えられる	暗灰黄	淡黄	2.5㎜程の灰白色粒・1㎜以下の褐色粒	外面に煤付着
116	弥生土器	甕底部付近	上層SA-1				縦方向のハケ目の後ナデ	横方向のハケ目・ナデ	明黄褐	暗褐	2㎜以下の茶赤色粒・0.5㎜以下の灰褐色粒と無色透明粒を含む	
117	弥生土器	甕胴部	上層SA-1				縦方向のハケ目の後ナデと考えられる	横方向のハケ目の後ナデ	黒褐	灰白	2㎜以下の灰褐色粒・1㎜以下の浅橙色粒・0.5㎜以下の浅黄色粒を含む	煤付着のため外面調整は不明瞭
118	弥生土器	甕胴部	上層SA-1				ハケ目の後にナデ	斜方向のハケ目の後に指ナデ	黒	灰黄	2㎜程の灰白色と褐色粒・1㎜以下の浅黄色粒	外面全体に煤付着
119	弥生土器	甕胴部	上層SA-1				縦方向のハケ目	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	2㎜位の浅橙褐色粒・1㎜位の灰褐色粒と灰白色粒を含む	煤付着のため外面調整は不明瞭

第3表　出土土器観察表　②

遺物番号	種別	器種部位	器種部位	法量(cm) 口径	底径	器高	手法・調整・文様ほか 外面	内面	色調 外面	内面	胎土の特徴	備考
120	弥生土器	甕胴部	SA1				縦方向のハケ目の後にナデ調整か？	ナデ	灰黄橙	黒褐	1～2㎜程の乳白色と褐色粒を含む	内外面に煤付着
121	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層SA-2	(22.9)			縦方向のハケ目の後に指ナデ・頸部に指頭痕あり	斜方向の工具ナデもしくはハケ目	にぶい橙・灰褐	にぶい橙	2.5㎜程の灰白色粒と褐色粒を多く含む	外面に煤付着
122	縄文土器	深鉢胴部	上層SC1				ナデの後,斜方向の短い回転縄文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	2㎜以下の浅黄色粒,1㎜以下の無色透明光沢粒を含む	大型土坑埋土内出土
125	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層	19.5			口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後指ナデ	ナデ・ハケ目の後指ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	0.5～2.0㎜の茶褐色粒を含む	
126	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層	28.0			口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。	ナデ	浅黄	浅黄	0.5～1.5㎜の茶褐色粒を含む	内外面に煤付着
127	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデと指ナデを施す	丁寧なナデ・ところどころ指頭痕あり	にぶい黄・黒褐	灰黄	2.5㎜以下の浅黄色粒・灰褐色粒を含む	外面に煤付着
128	弥生土器	甕胴部	表土中				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ナデ・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	工具による横ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	2㎜程の浅黄色と赤褐色粒を多く含む	
129	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	斜方向のハケ目・ところどころに指頭痕あり	灰黄褐	にぶい黄橙	1.5㎜以下の灰白色粒・茶褐色粒・5㎜程の石粒を含む	外面に煤付着
130	弥生土器	甕胴部	上層				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ	工具による横ナデの後ナデ	にぶい黄	にぶい黄	2㎜以下の灰色と暗褐色粒を多く含む	外面に煤付着
131	弥生土器	甕胴部	上層				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ	工具による横ナデの後ナデ	浅黄橙	浅黄	0.5～2.0㎜の茶褐色,灰白色,白色透明粒を含む	
132	弥生土器	甕頸部～胴部	上層				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	斜方向のハケ目・ところどころに指頭痕あり	にぶい黄橙	灰黄橙	1㎜程の灰褐色粒と茶褐色粒と浅黄色粒を含む	
133	弥生土器	甕胴部	上層				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	2㎜程の浅赤色と褐灰色,1㎜以下の灰褐色粒を含む	
134	弥生土器	甕頸部～胴部	上層				口縁部下に縦位の刻みをもつ1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ	横ナデ・ナデ	浅黄	浅黄	2㎜以下の茶褐色と灰褐色粒を多く含む	外面に煤付着
135	弥生土器	甕口縁部～底部	上層	24.0	6.1	22.0	縦と斜方向にハケ目・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰黄褐	灰黄	1.5㎜以下の灰褐色粒と茶褐色粒を含む	煤付着のため外面調整は不明瞭
136	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層	21.0			斜方向のハケ目	ナデ・口縁部付近に工具痕によるナデナデ	にぶい黄橙	浅黄橙・にぶい黄橙	0.5～3㎜の褐灰色粒とにぶい橙色粒を含む	
137	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層				縦・斜方向のハケ目・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	丁寧なナデ	浅黄	浅黄	2㎜～2.5㎜程の灰白色粒を含む	外面に煤付着
138	弥生土器	甕胴部～底部	上層				斜・縦方向のハケ目	丁寧なナデ	にぶい橙・にぶい黄橙	黄灰	2㎜以下の茶褐色粒と灰褐色粒,浅黄色粒,赤褐色粒を含む	内外面に煤付着
139	弥生土器	甕口縁部～底部	上層	18.7	6.0	27.5	縦と斜方向にハケ目・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	丁寧なナデ・指おさえ	にぶい黄褐・褐灰	にぶい黄橙	3㎜以下の灰白色粒と褐色粒を多く含む	外面に煤付着
140	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層	21.5			口縁部下に2条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ	横・斜方向の工具ナデもしくはハケ目	灰黄・黒褐	灰黄・黄灰・黒	2㎜以下の灰褐色粒と無色透明粒・1㎜以下の浅黄色粒と無色透明光沢粒を多く含む	内外面に煤付着
141	弥生土器	甕口縁部	上層				ナデ・横ナデの後ナデ	横ナデ	橙	にぶい橙	1㎜以下の灰色粒と灰白色粒・2㎜程の黒色の柱状粒を含む	内外面に煤付着
142	弥生土器	甕口縁部	上層				横ナデ・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰色粒と褐色粒・5㎜程の灰白色粒を含む	外面に煤付着

第4表　出土土器観察表　③

遺物番号	種別	器種部位	器種部位	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
143	弥生土器	甕口縁部	上層				工具による横ナデの後ナデ・口唇部は丁寧なナデ	工具による横ナデの後ナデ	黄灰・黒	暗灰黄	1.5㎜以下の浅黄色粒と褐灰色粒・無色透明粒を含む	外面に煤付着
144	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層				工具によるナデ・口唇部付近は凹面状に丁寧なナデ	丁寧な横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	1㎜以下の灰色と褐色粒を多く含む	内面に煤付着
145	弥生土器	甕口縁部	確認トレンチ8内				工具による横ナデ・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	口縁部付近は工具による横ナデ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の褐色粒を含む	
146	弥生土器	壺口縁部	上層				ハケ目・口縁部付近は横ナデ	横ナデ	浅黄橙・にぶい褐	にぶい橙	1㎜以下の灰色粒と灰白色粒・褐色粒を含む	
147	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層				風化によって不明であるが，ナデが施されているようである。	ナデ	浅黄	浅黄	2.5㎜以下の茶褐色と灰褐色粒，1㎜程の無色透明光沢粒を少量含む	
148	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層				風化しているがハケ目だと考えられる。口唇部は凹面状に丁寧なナデ	ナデ	橙	橙	0.5㎜～1㎜程の茶褐色粒と灰白色粒を含む	外面に煤付着
149	弥生土器	壺口縁部	上層				斜方向のハケ目・ハケ目の後に横ナデ	風化気味・横方向のハケ目?	橙・にぶい赤褐	にぶい赤褐	2㎜以下の灰色と灰白色と褐色粒を多く含む	
150	弥生土器	甕口縁部～胴部	上層	8.9			縦・斜方向のハケ目・口唇部付近は横方向のナデ	ナデ・口縁部付近は横方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2.5㎜以下の灰白色粒，1.5㎜以下の赤褐色粒を含む	
151	弥生土器	甕口縁部	上層				工具による横ナデの後ナデ	工具による横ナデ	灰黄	黒褐	1㎜以下の赤褐色粒・灰褐色粒・無色透明光沢粒	外面に煤付着
152	弥生土器	壺頸部～胴部	上層				丁寧なナデ・3条の突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	3㎜以下の灰白色と0.5㎜以下の無色透明光沢粒を含む	
153	弥生土器	壺頸部～胴部	上層				丁寧なナデ・2条の突帯	ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	2.5㎜以下の灰白色粒を多く含む	
154	弥生土器	壺頸部～胴部	A区表土中				丁寧なナデ・2条の突帯	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	2㎜以下の浅黄色粒を多く含む	
155	弥生土器	壺頸部～胴部	上層				丁寧なナデ・1条の突帯	ナデ	灰褐	橙	1㎜以下の灰白色，茶褐色粒を含む	
156	弥生土器	甕胴部	上層				口縁部下1条の突帯をもつ。ハケ目の後ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	2.5㎜以下の茶褐色・白色透明粒を含む	
157	弥生土器	甕胴部～底部付近	確認トレンチ8内				縦・斜方向のナデ	縦・横・斜方向のナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	1㎜以下の無色透明光沢粒，2.5㎜以下の灰白色と浅黄橙と褐灰粒を含む	内面に煤付着
158	弥生土器	甕胴部	確認トレンチ8内				縦・横方向にナデ	縦方向のナデ	灰褐	にぶい橙	1㎜以下の灰白色粒，2㎜以下の赤褐色と黒褐色粒を含む	外面に煤付着
159	弥生土器	壺頸部～胴部	上層				風化して不明であるが，主に縦方向のナデ	斜方向のハケ目	にぶい橙	橙・にぶい黄橙	2㎜以下の灰白色，灰色，褐色粒を多く含む	内外面に煤付着
160	弥生土器	甕底部	上層		7.6		風化著しいが斜方向のハケ目・底部付近は丁寧なナデ	ナデ・底部付近は指ナデ	灰黄橙	暗灰黄	2㎜以下の灰褐色粒と無色光沢粒，1～3㎜の浅黄褐色粒	
161	弥生土器	甕胴部～底部	上層		8.0		縦方向のハケ目・指頭痕あり・ナデ	ナデ	浅黄	黄灰	2㎜以下の褐色，灰白色粒を多く含む	
162	弥生土器	甕底部	上層		6.3		丁寧なナデ	ナデ	浅黄	淡黄	2㎜以下の赤褐色粒を含む	
163	弥生土器	甕底部	上層		5.7		ナデ・指ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜程度の砂粒を含む	

第5表　出土土器観察表　④

遺物番号	種別	器種部位	器種部位	法量（cm）			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
164	弥生土器	甕底部	上層		7.6		ナデ・指頭痕あり・指ナデ	ナデ・指押さえ・指ナデ	灰黄	灰黄	2㎜以下の灰白色，褐色，無色光沢粒を含む	
165	弥生土器	甕底部	上層		6.0		ナデ	ナデ	にぶい褐	黄灰	3㎜程の浅黄色粒，1～2㎜程の灰白色粒を多く含む	内面に煤付着
166	弥生土器	壺底部	上層		5.0		風化によって調整不明	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	5～7㎜の灰白色粒を少し含む	内面に煤付着
167	弥生土器	壺底部	上層		3.7		指ナデ・指頭痕あり	指ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜程の乳白色と褐色粒，無色光沢粒を含む	内外面に煤付着
168	弥生土器	壺底部	確認トレンチ8内		3.3		ナデ・指頭痕あり	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	3㎜以下の灰白色と1.5㎜以下の無色透明光沢と褐色と灰色粒を含む	
169	弥生土器	甕底部	上層		3.8		風化していて調整不明	風化していて調整不明	浅黄橙	浅黄橙	1～2㎜の灰色粒を少し含む	
170	弥生土器	甕底部	上層		3.0		ハケ目	ハケ目	にぶい橙	にぶい橙	1㎜程の灰色，5㎜程の褐色，1㎜程の黒色ガラス粒を少し含む	外面に煤付着
171	弥生土器	壺底部	確認トレンチ8内		2.3		縦方向のナデ	ナデ・指頭痕あり	にぶい黄褐	黒褐	2.5㎜以下の褐色と灰白色，1㎜以下の光沢粒を含む	
172	弥生土器	壺底部	上層		3.6		ナデ	ナデ	黒褐	灰黄	5㎜程度の浅黄褐色，2㎜程の灰褐色，1㎜以下の浅黄色と透明光沢粒を含む	外面に煤付着
173	弥生土器	壺底部	上層		(5.1)		ナデ	ナデ	黒褐	灰黄	2㎜程の灰色と褐色粒を多く含む	
174	弥生土器	壺底部	上層		4.8		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～2㎜程の褐色，半透明粒を含む	
175	弥生土器	壺口縁部～頸部	上層	12.0			横ナデ・斜方向へのハケ目の後ナデ	斜方向のハケ目・ナデ	明黄褐	黄褐	0.5～1㎜の白色と灰白色粒を含む	一部煤付着
176	弥生土器	壺口縁部～頸部	上層				横ナデの後ナデ	斜方向のハケ目・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5～1㎜の白色と灰白色粒を含む	
177	弥生土器	壺頸部	上層				縦方向のハケ目	不定方向のハケ目の後ナデ	橙	明赤褐	2㎜以下の灰色と灰白色粒を含む	
178	弥生土器	壺口縁部	上層				ナデ	工具による横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜以下の灰色と褐色粒を多く，2㎜程の灰白色粒を少し含む	円形浮文あり
179	弥生土器	壺口縁部～底部	上層	23.4	6.3	34.5	ハケ目の後にナデ・口唇部は凹面状に丁寧なナデ	横・斜方向のナデ・ところどころに指頭痕あり	にぶい黄橙・灰黄	にぶい黄橙・灰黄	1.5～2.5㎜程茶褐色粒・3㎜程の白色粒・1㎜程の灰褐色粒を含む	
180	弥生土器	壺胴部～底部	上層				ハケ目の後にナデ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	1～3㎜の灰白色と褐色粒を多く含む	
181	弥生土器	壺口縁部	上層	12.2			横ナデの後横方向の櫛描波状文・横ナデ・斜方向のナデ	横ナデ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜程の灰白色粒と黒色光沢粒，無色透明光沢粒を・3㎜程の灰褐色粒含む	二重口縁壺
182	弥生土器	壺口縁部	上層				横方向の櫛描波状文・ナデ(風化気味)	ナデ(風化気味)	明赤褐	橙	3㎜以下の灰白色粒と浅暗褐色粒・1㎜以下の灰褐色粒を含む	二重口縁壺
183	弥生土器	高坏脚部	確認トレンチ8内				縦方向のミガキ・穿孔あり	ナデ・穿孔あり	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1～2㎜の灰色，浅黄橙，褐灰粒，無色透明光沢粒，5㎜以下の灰白色粒を含む	
184	弥生土器	ミニチュア土器底部	上層		5.8		指頭痕・ハケ目	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜程の石粒を含む	

第6表　出土土器観察表　⑤

番号	器種	石材	出土位置			注記番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考
			区	層	グリッド						
1	石鏃	頁岩	A	下	SI5	1	2.3	1.6	0.4	1.0	
37	ナイフ形石器	頁岩	A	下	F2	97	4.3	1.45	0.6	3.4	
38	ナイフ形石器	頁岩	A	下	SI7	2	3.3	1.2	0.5	1.6	
39	ナイフ形石器	頁岩	A	下	G3	125	3.0	1.25	0.8	2	
40	細石刃	チャート	A	下	G2	34	8.5	6.5	0.2	0.1	
41	細石刃核	チャート	A	上		715	1.6	1.05	1.2	1.6	
42	細石刃核	チャート	A	下	G4	65	2.0	2.45	2.3	12.2	
43	剥片	頁岩	A	下	G2	9	1.3	3.6	0.6	1.7	
44	剥片	頁岩	A	下	SI1	3	4.4	3.3	0.8	10.0	
45	剥片	頁岩	A	上	G	5	7.1	3.1	1.0	20.6	
46	剥片	頁岩		上		11	10.3	4.2	1.8	46.3	
47	石鏃	黒曜石	A	下	G4	139	1.4	1.2	0.3	0.3	
48	石鏃	チャート	A	下	G3	99	1.6	1.3	0.5	0.7	
49	石鏃	黒曜石	A	下	一括		1.9	1.2	0.4	0.4	
50	石鏃	チャート	A	下	F3	11	1.5	1.7	0.5	1.2	
51	石鏃	チャート	A	下	G4	43	1.9	1.6	0.4	0.6	
52	石鏃	チャート	A	下	G3	169	2.2	1.4	0.4	0.6	
53	石鏃	チャート	A	下	G3	116	2.4	1.5	0.4	1.2	
54	石鏃	チャート	A	下	G2	33	2.1	1.6	0.4	0.8	
55	石鏃	チャート	A	下	G3	25	2.3	1.6	0.5	1.2	
56	石鏃	チャート	A	下	G5	1	2.0	1.8	0.5	1.2	
57	石鏃	頁岩	A	下	G3	163	3.1	1.8	0.4	1.4	
58	石鏃	チャート	A	下	G	5	2.9	2.0	0.4	1.7	
59	石鏃	黒曜石		上		804	3.0	2.1	0.5	1.2	
60	石鏃	チャート	A	下	G2	44	2.4	1.5	0.3	1.1	
61	石鏃	チャート	A	下	F2	55	2.3	1.7	0.5	1.2	
62	石鏃	黒曜石	A	下	F4	一括	2.4	1.8	0.5	1.1	
63	石鏃	黒曜石	A	下	G3	14	2.5	2.0	0.5	1.3	
64	石鏃	黒曜石		上			1.9	2.5	0.5	1.3	BEトレンチ
65	石鏃	チャート	A	下	F2	86	2.1	1.9	0.4	0.9	
66	石鏃	チャート	A	下	F3	40	2.9	1.9	0.4	1.8	
67	石鏃	チャート	A	下	G4	126	2.1	1.3	0.3	0.6	
68	石鏃	黒曜石	A	下	F2	69	2.4	1.5	0.7	1.5	
69	尖頭状石器	頁岩	A	下	G4	152	7.3	3.9	1.3	28	
70	尖頭状石器	チャート		上		589	3.4	2.8	1.1	8.3	
71	抉入状石器	安山岩		上		191	1.9	3.1	0.6	1.9	
72	石核	水晶	A	下	F3	32	1.6	2.2	1.3	4.9	
73	両面加工剥片	チャート	A	下	H4	44	1.2	2.6	1.3	6.1	
74	両面加工剥片	チャート	A	上	排土中		3.5	2.7	1.6	14.5	
75	石匙	チャート	A	下	G6	1	6.1	2.8	1.1	14	
76	両面加工剥片	チャート	A	下	G4	51	3.2	2.8	11.5	9.3	
77	両面加工剥片	チャート	A	下	F3	45	4.8	3.1	1.3	17.5	
78	削器	ホルンフェルス	A	下	F2	39	7.4	6.1	1.7	88.7	

第7表　出土石器・その他の遺物観察表　①

番号	器種	石材	出土位置 区	出土位置 層	出土位置 グリッド	注記番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	備考
79	削器	頁岩		上		90	5.4	2.5	0.9	8.5	
80	削器	ホルンフェルス		上		437	5.9	4.7	1.5	39.9	
81	蛤形剥片石器	泥岩	A	下	G2	31	4.2	6.9	1.3	20.3	
82	蛤形剥片石器	ホルンフェルス	A	下	G4	37	3.6	7.3	8.5	21.3	
83	蛤形剥片石器	頁岩	A	下	E4	19	3.0	4.9	0.8	9	
84	蛤形剥片石器	ホルンフェルス	A	下	F2	26	2.6	4.3	0.7	5.8	
85	蛤形剥片石器	頁岩	A	下	F3	48	3.2	6.0	1.3	22.9	
86	蛤形剥片石器	ホルンフェルス		上		308	3.6	5.3	1.1	15.6	
87	蛤形剥片石器	ホルンフェルス	A	下	G2	1	4.0	5.7	1.1	27.1	
88	蛤形剥片石器	ホルンフェルス	A	下	G3	137	5.7	8.9	1.2	54.4	
89	蛤形剥片石器	ホルンフェルス	A	下	G2	30	4.4	5.9	1.0	25.1	
90	蛤形剥片石器	泥岩	A	下	H4	28	4.1	4.7	0.7	11.5	
91	蛤形剥片石器	砂岩	A	下	G2	29	4.0	6.1	1.0	19.9	
92	蛤形剥片石器	砂岩	A	下	G2	28	3.5	6.3	0.9	18.7	
93	蛤形剥片石器	砂岩	A	下	G3	174	4.0	4.4	1.0	19.9	
94	蛤形剥片石器	ホルンフェルス	A	下	G3	161	4.1	6.1	1.1	36.4	
95	二次加工剥片	凝灰岩	A	上	SA1	1	6.8	4.2	1.3	30.2	
96	二次加工剥片	凝灰岩	A	下	H4	11	4.2	2.2	1.1	7.8	
97	二次加工剥片	チャート	A	下	H5	1	3.3	1.8	0.7	2.1	
98	磨石	凝灰岩	A	上	表土中	—	9.5	8.0	5.4	618.9	
99	磨石	砂岩	A	下	—	31	11.2	7.9	5.3	712.7	
100	磨石	凝灰岩	—	—	表採	—	9.8	8.0	6.7	795.7	
101	磨石	凝灰岩	A	上	排土中	—	10.5	9.7	6.8	1077.3	
102	敲石	砂岩	A	上	—	434	10.6	3.7	3.1	184.7	
103	敲石	ホルンフェルス	A	下	G5	105	10.1	3.3	2.7	121.0	
104	敲石	砂岩	A	上	表土中	—	8.1	4.8	4.6	182.2	
105	敲石	砂岩	A	上	排土中	—	11.8	6.9	3.5	412.1	
106	敲石	凝灰岩	A	上	—	315	9.1	6.9	4.1	374.1	
107	敲石	凝灰岩	A	—	トレンチ	—	6.4	5.6	4.4	200.2	
108	敲石	砂岩	A	下	G2	11	8.9	6.9	2.4	189.2	
109	敲石	凝灰岩	A	下	F2	46	12.2	9.6	5.8	967.3	
110	凹石	凝灰岩	—	—	表採	—	11.0	9.3	4.6	757.6	
111	凹石	砂岩	A	上	—	455	6.4	5.0	3.0	143.1	
112	台石	凝灰岩	A	下	H4	—	28.3	34.1	14.3	17,400	
186	磨製石鏃	頁岩		上		363	3.3	1.6	0.3	1.4	
187	磨製石鏃	頁岩	A	—	排土中		5.2	2.2	0.3	2.6	
188	石庖丁	ホルンフェルス	A	上	—	99	4.7	7.6	1.0	40.9	

番号	器種	素材	出土位置 区	出土位置 層	出土位置 グリッド	注記番号	最大長(cm)	最大径(cm)	重さ(g)	備考
123	煙管（吸口部）	銅製か真鍮製？	A	上	SC51	—	8.1	1.0	11.1	竹製の羅宇が残る
124	煙管（吸口部）	銀製？	A	上	SC25	—	3.6	0.9	2.1	竹製の羅宇が残る

第8表　出土石器・その他の遺物観察表　②

図版1

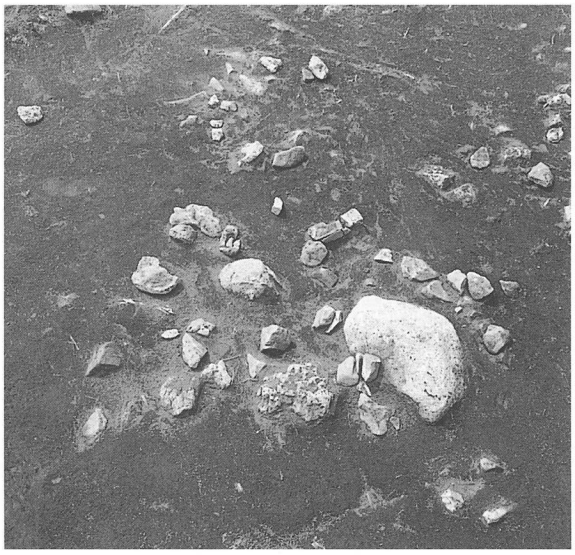
藏座村遺跡遠景

図版2

①調査区全景（第Ⅶ層上面検出時）

②Ａ区西側第Ⅶ層上面検出状況

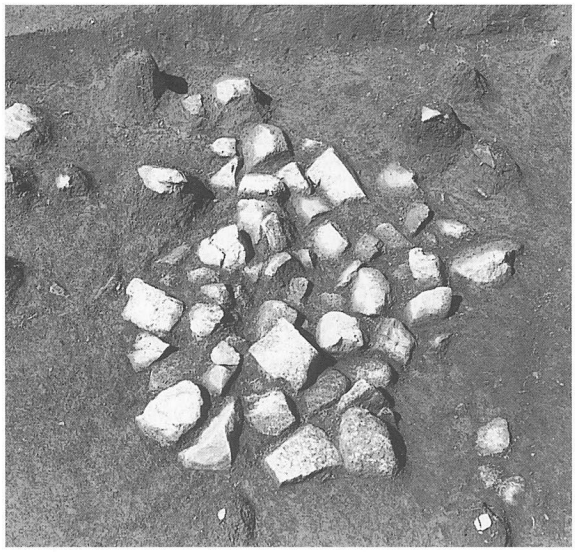
①Ａ区西側第Ⅶ層上面検出状況



②ＳＩ１検出状況（北東側から）

③ＳＩ２検出状況（北東側から）

④ＳＩ２検出状況（南側から）

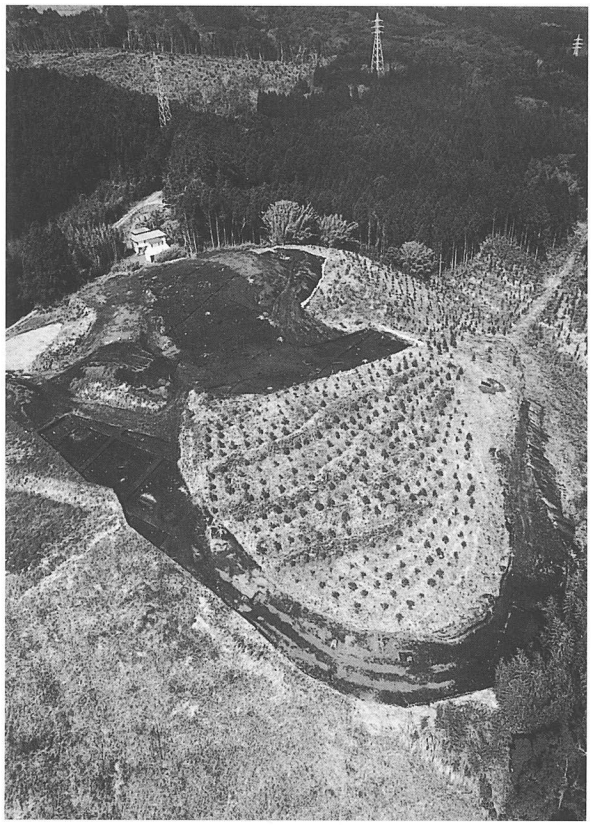


⑤ＳＩ５検出状況（上側から）

⑥ＳＩ８検出状況（東側から）

図版4

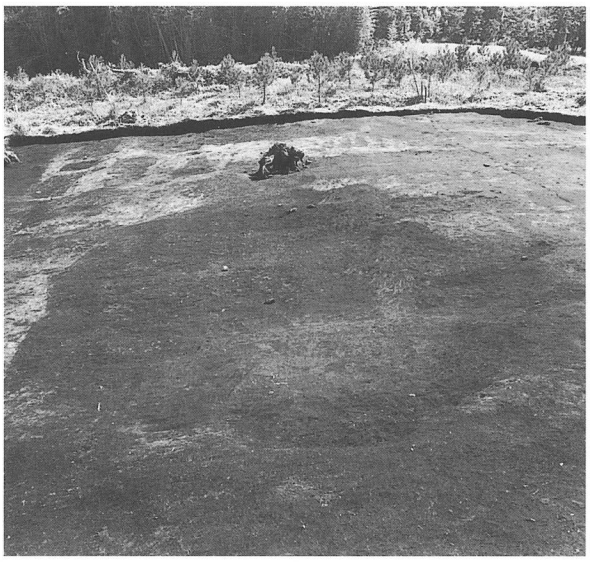
①調査区全景（第Ⅳ層上面検出時）



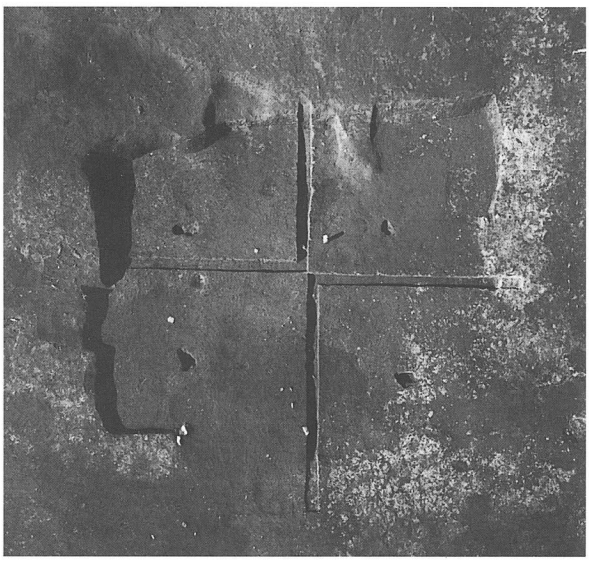
②調査区全景（東側から）

③土層堆積状況（B区南面）

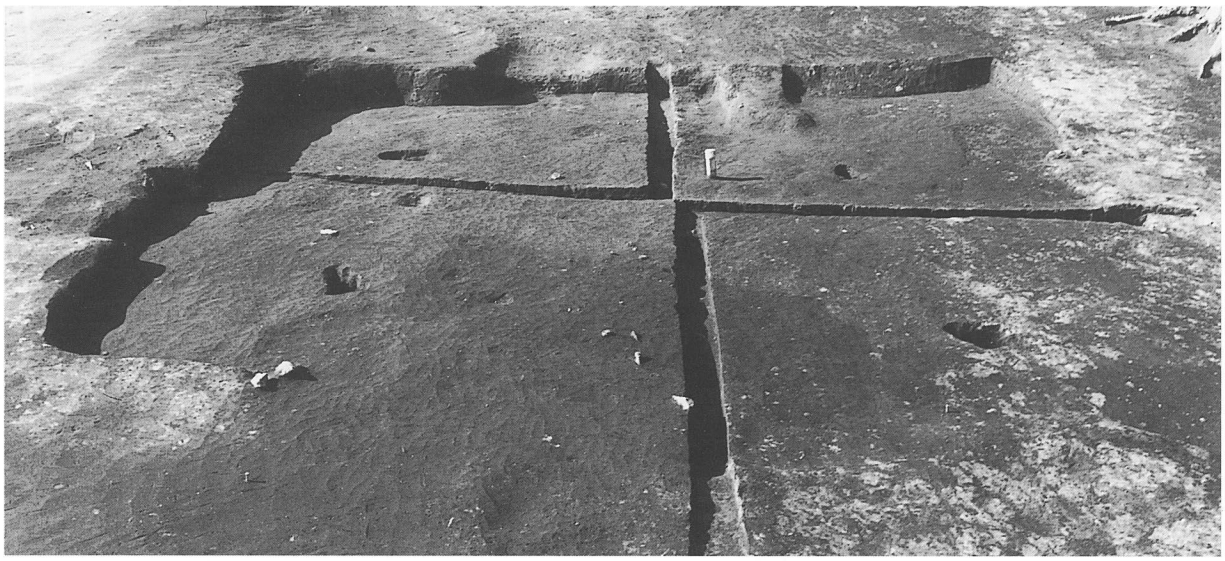
①A区全景（第Ⅳ層上面検出時）



②1号竪穴住居跡（SA1）



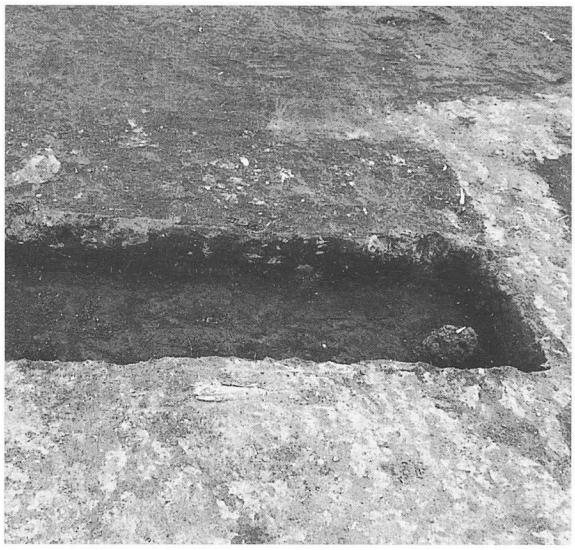
③1号竪穴住居跡（SA1）（上から）



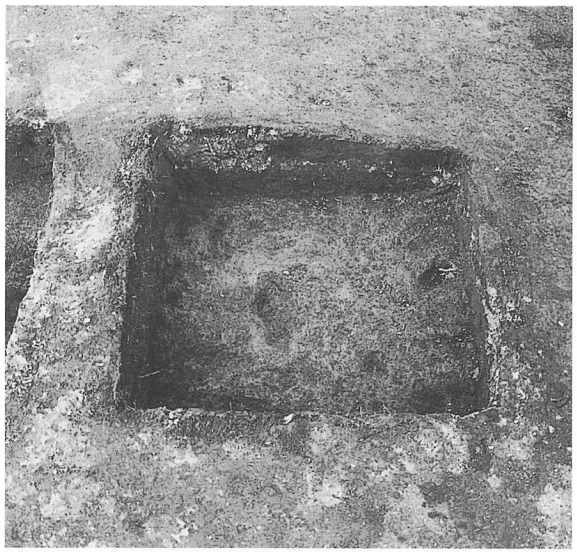
④1号竪穴住居跡（SA1）（東側から）

図版6

①土壙群と１号竪穴住居跡

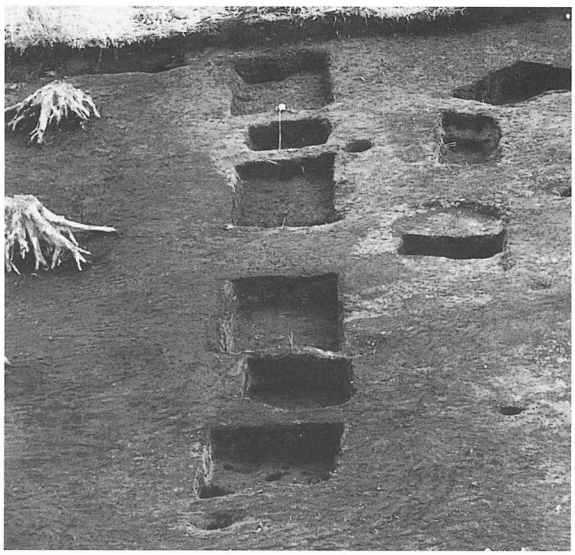


②25号土壙（ＳＣ51）土層断面



③27号土壙（ＳＣ27）

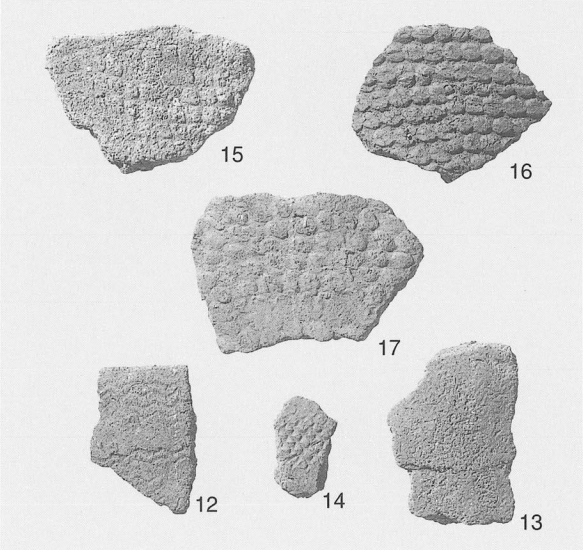
④26号土壙（ＳＣ26）



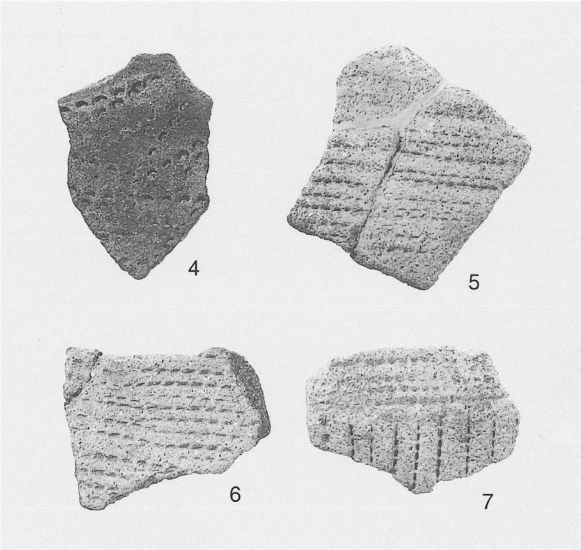
⑤土壙群（ＳＣ31・30・26・25・24・23）

⑥１号大型土壙（ＳＣ１）

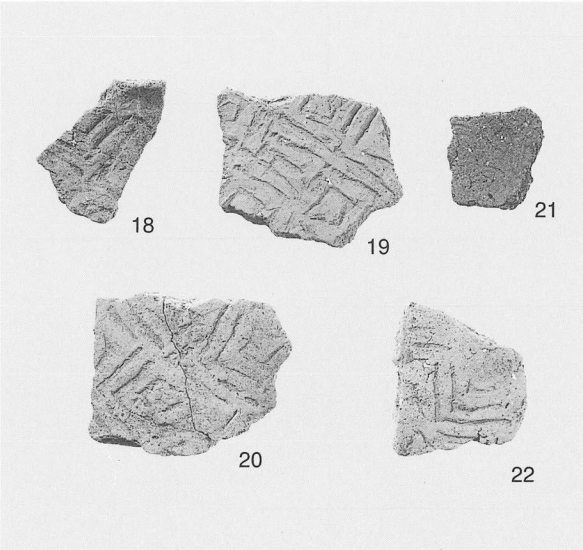
①出土縄文土器（第１類）



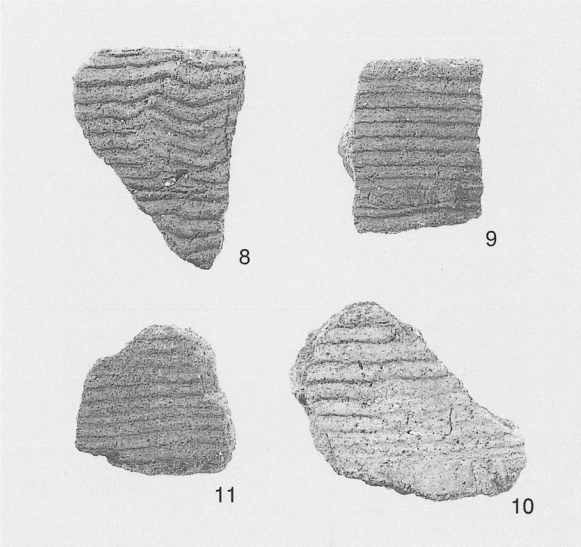
④出土縄文土器（第４ａ・４ｂ類）



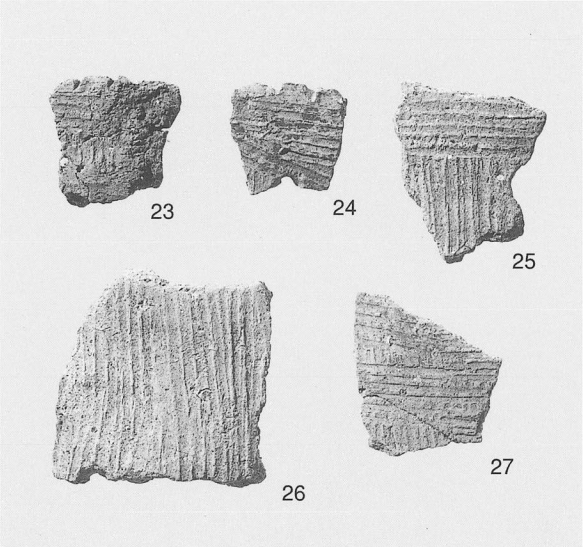
②出土縄文土器（第２類）



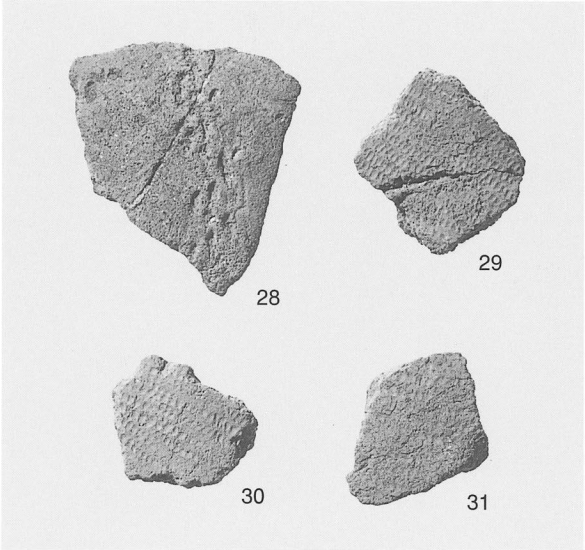
⑤出土縄文土器（第４ｃ・４ｄ類）



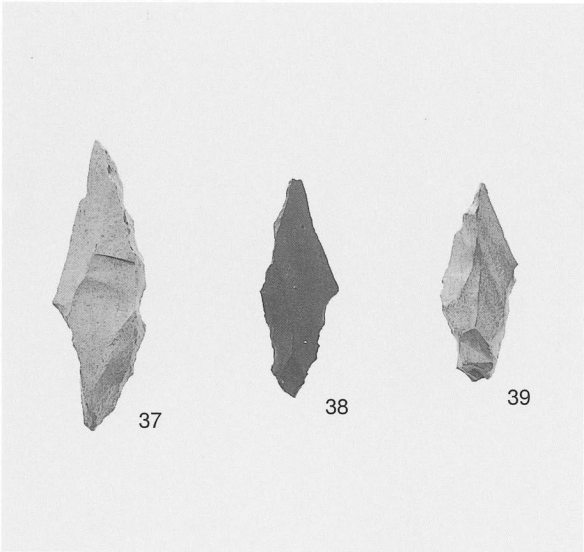
③出土縄文土器（第３類）



⑥出土縄文土器（第５類）

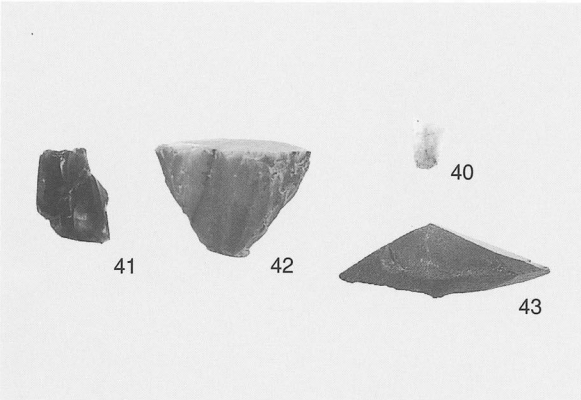


①出土縄文土器（第６類）

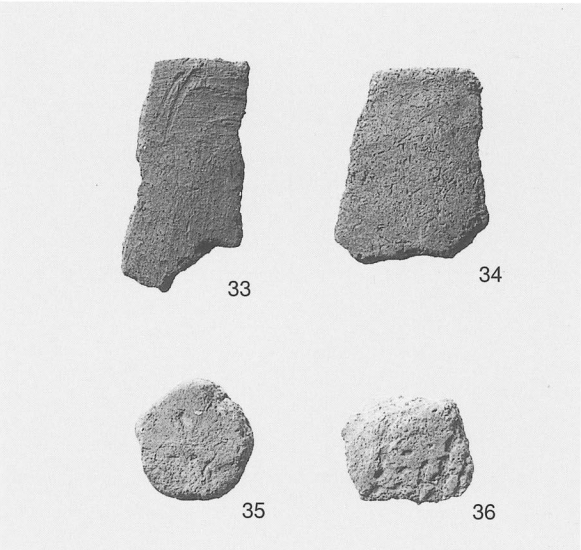


④出土石器（ナイフ形石器）

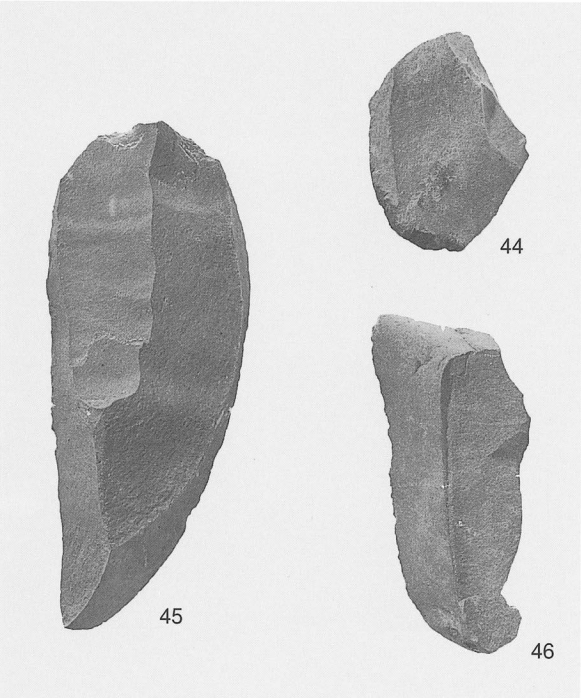
②出土縄文土器（第７類①）



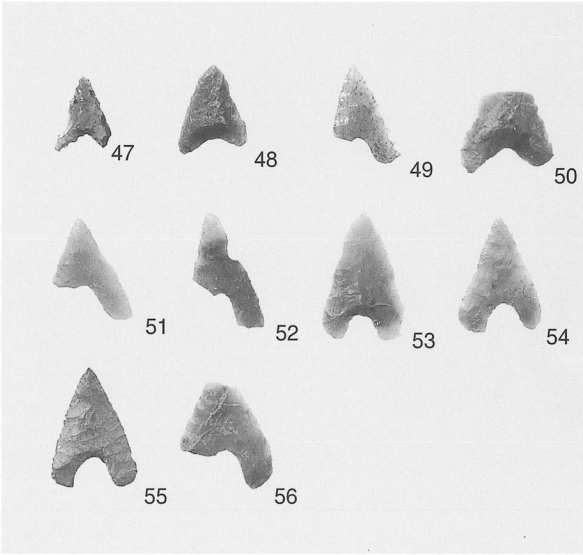
⑤出土石器（細石核・細石刃・剥片）



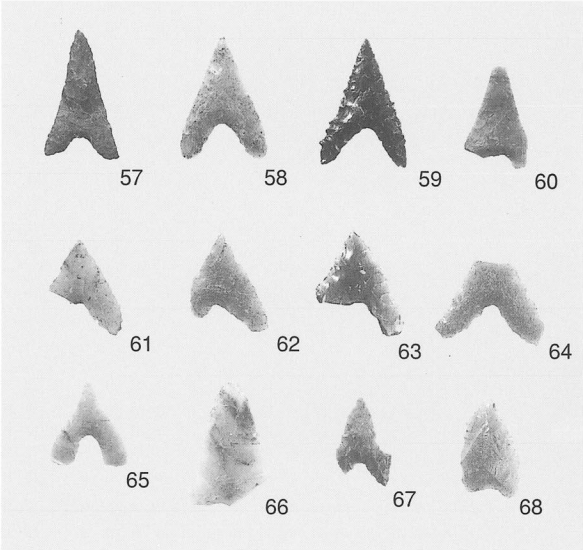
③出土縄文土器（第７類②・第８類）



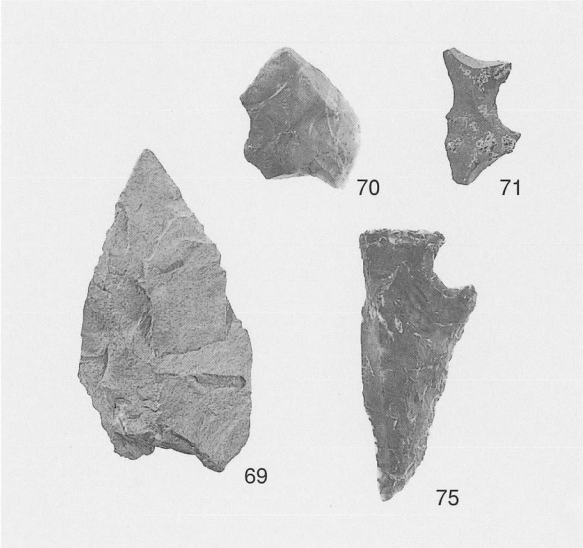
⑥出土石器（剥片）



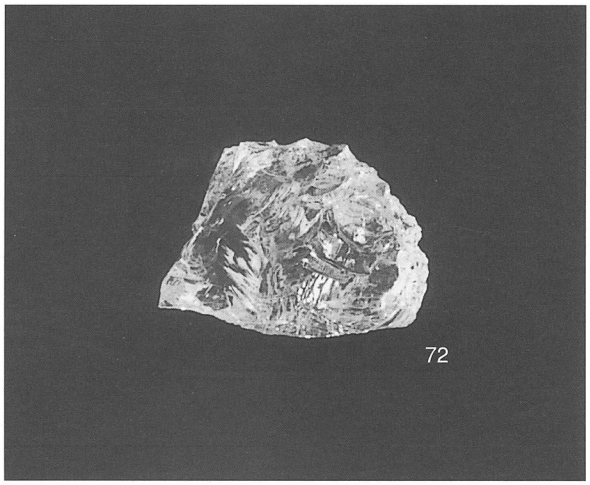
①出土石器（石鏃①）



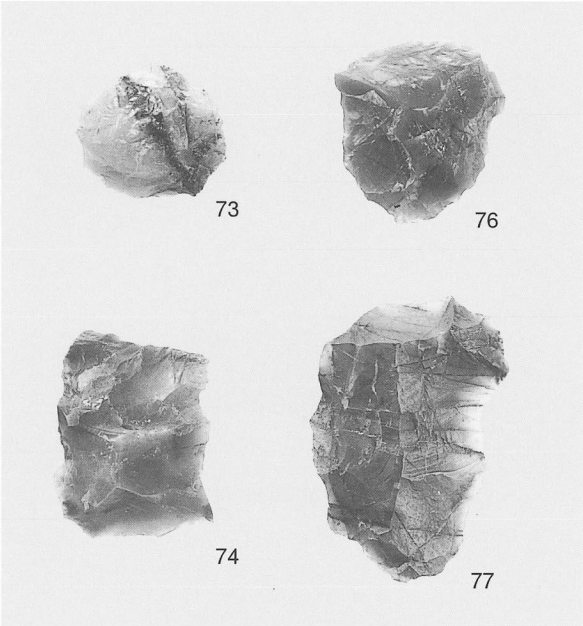
②出土石器（石鏃②）



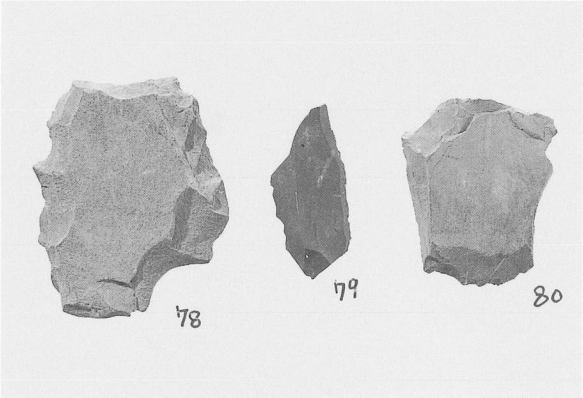
③出土石器（尖頭状石器・抉入状石器・石匙）



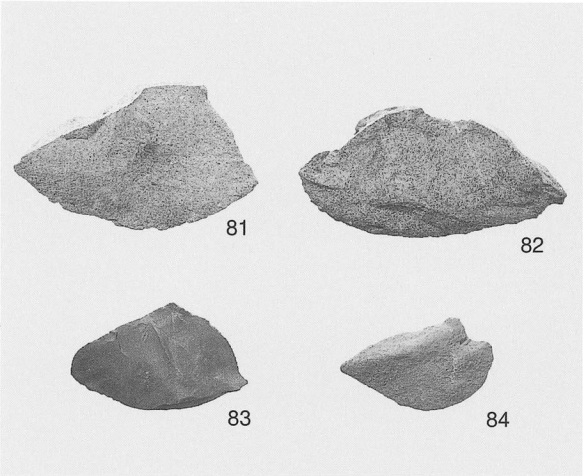
④出土石器（石核）



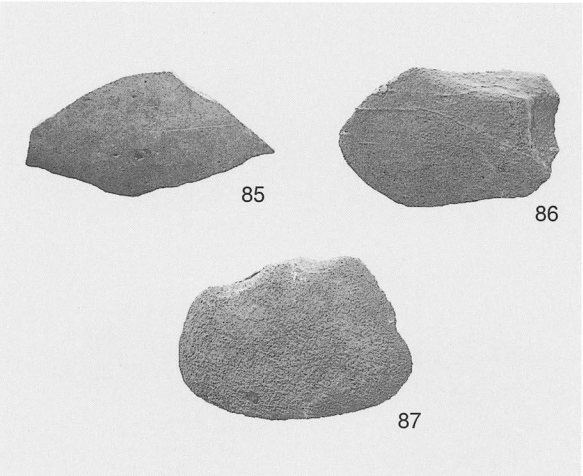
⑤出土石器（両面加工石器）



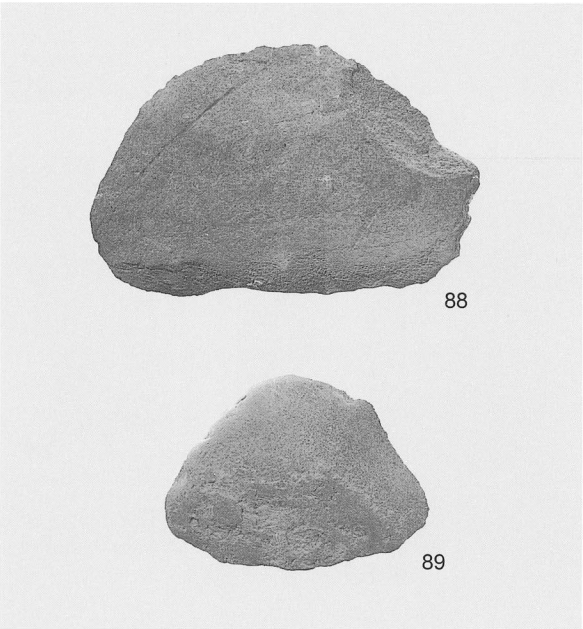
⑥出土石器（削器）



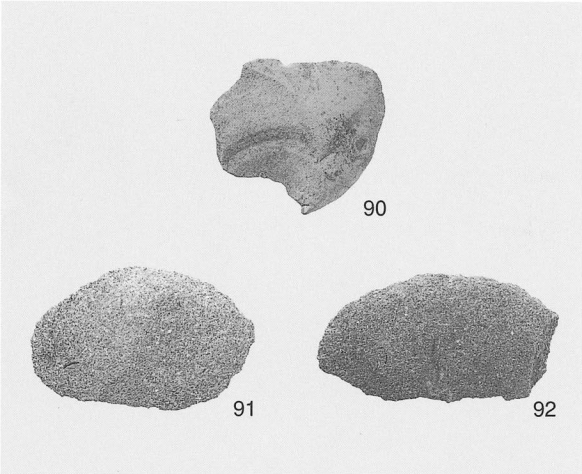
①出土石器（蛤状剥片石器Ⅰ類）



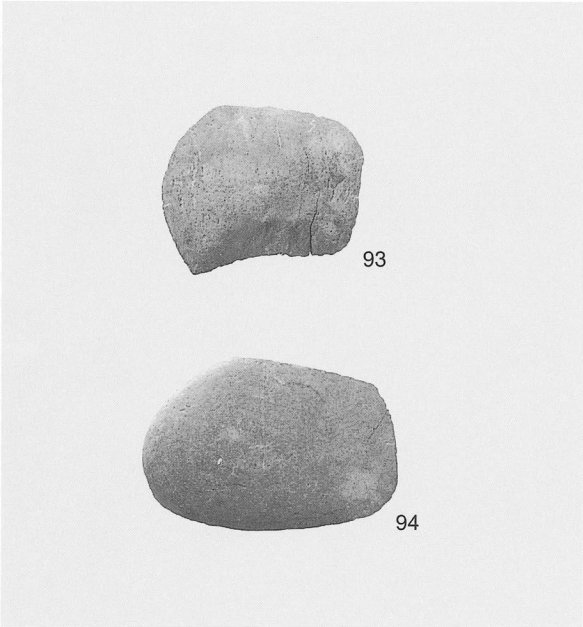
②出土石器（蛤状剥片石器Ⅱ類）



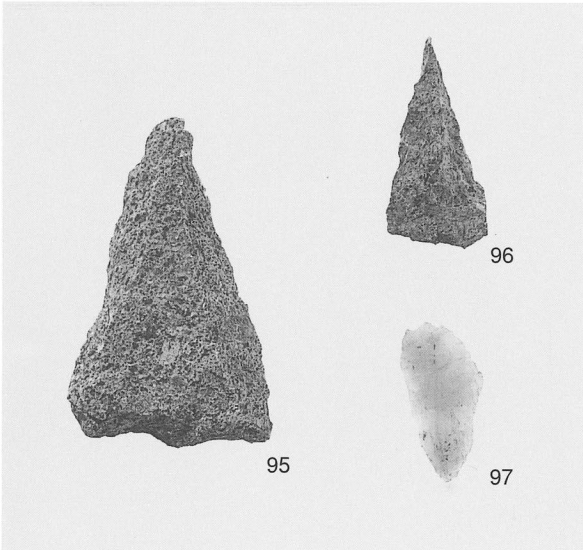
③出土石器（蛤状剥片石器Ⅲ類）



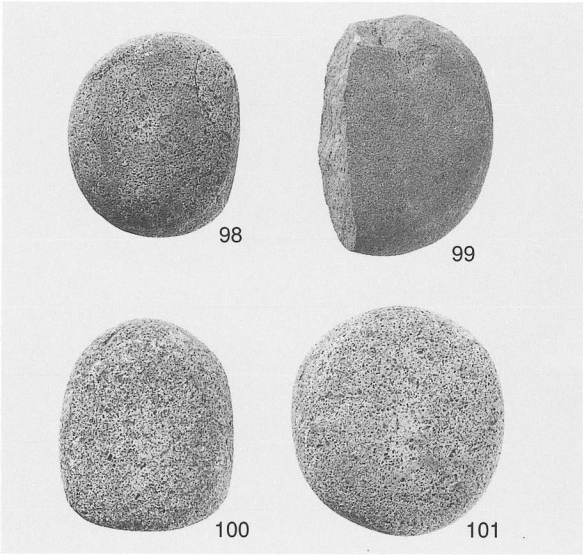
④出土石器（蛤状剥片石器Ⅳ類）



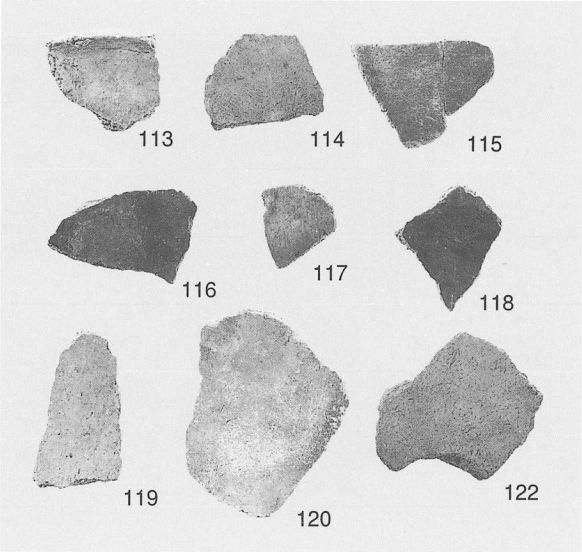
⑤出土石器（蛤状剥片石器Ⅴ類）



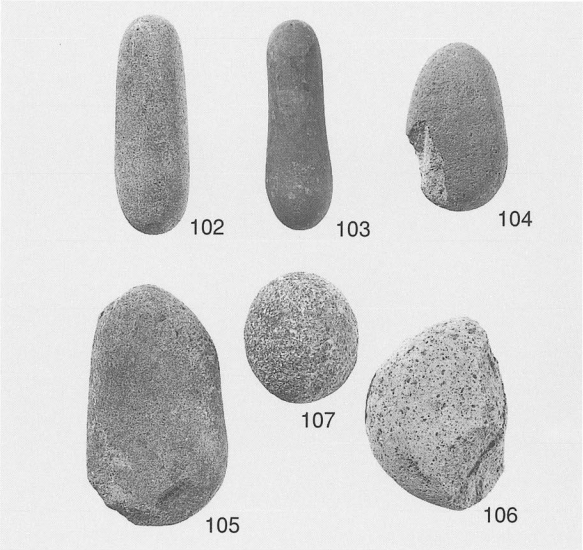
⑥出土石器（二次加工のある剥片）



①出土石器（磨石）

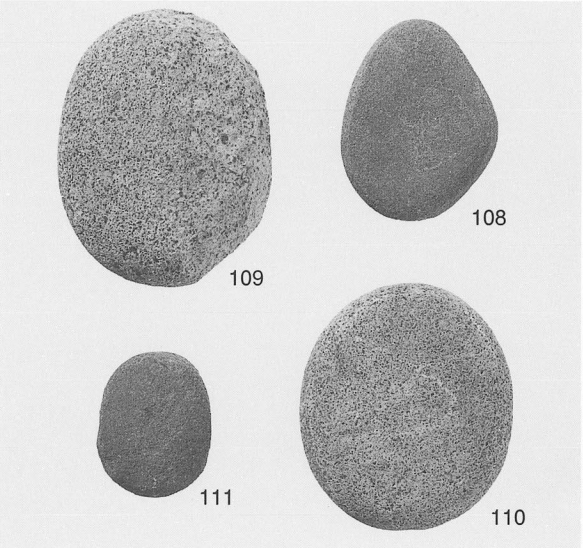


④ＳＡ１・ＳＣ１出土土器

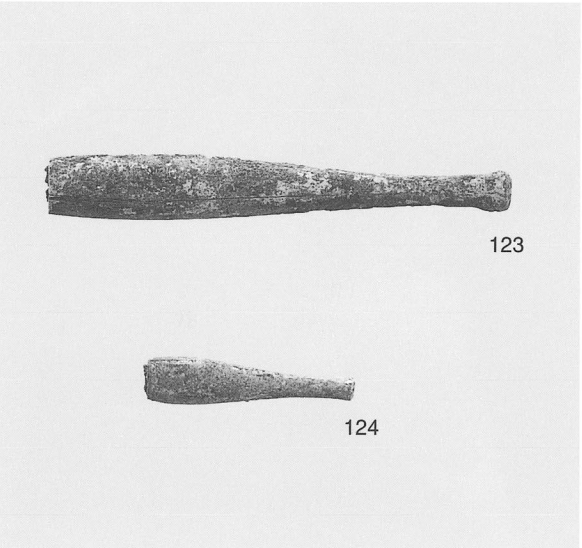


②出土石器（敲石①）

⑤ＳＡ２出土弥生土器



③出土石器（敲石②・凹石）



⑥土壙群出土煙管